

第274図 C1642-OO出土土器 (1/4)

166) は底径6.4cmをはかる。体部内面はヘラミガキ調整、外面は表面剥離のため不明。色調は2.5Y8/2灰白色。(C167) は口径15.2cmをはかる。口縁部内外面はヘラミガキ、体部外面は表面剥離のため不明。内面はヘラミガキ調整を施す。色調は2.5Y8/3淡黄色を呈する。

黒色土器B類 (C168・169) いずれも椀で、他の器種は得ていない。(C168) は口径15.8cmをはかる。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はヘラミガキ、外面はヘラケズリ後にヘラミガキ調整を施している。色調はN3/0暗灰色を呈する(図版127)。(C169) は口径14.1cm、器高5.7cmをはかる。高台は根元から剥離している。口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面はヘラミガキ、底部内面は一定方向にヘラミガキを施している。色調は10YR4/1褐色灰色を呈する(図版120)。

土師器小皿 (C170~172) (C170) は口径9.0cm、器高2.0cmをはかる。低く丸い体部に、わずかに外反して斜上方に立ち上がる口縁部をもつ。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は5Y8/1灰白色を呈する。(C171) は口径10.0cm、器高1.3cmをはかる。口径に対して器高が著しく低いものである。口縁端部内面に浅い沈線一条を施す。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面は表面磨滅のため不明。色調は灰色7.5Y4/1を呈す。黒色土器の可能性も考えられる。(C172) は口径9.2cm、器高2.0cmをはかる。浅い椀状の体部からそのまま口縁部に続く。口縁部内外面はヨコナデ調整を施すがタッチが浅いため体部との境目は明瞭でない。体部内外面はナデ。色調2.5Y8/2灰白色を呈す。

土師器椀 (C173) 口径14.4cmをはかる。内弯ぎみに外上方に開く体部に、緩やかに屈曲して外反する口縁部を有する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面は表面磨滅のため

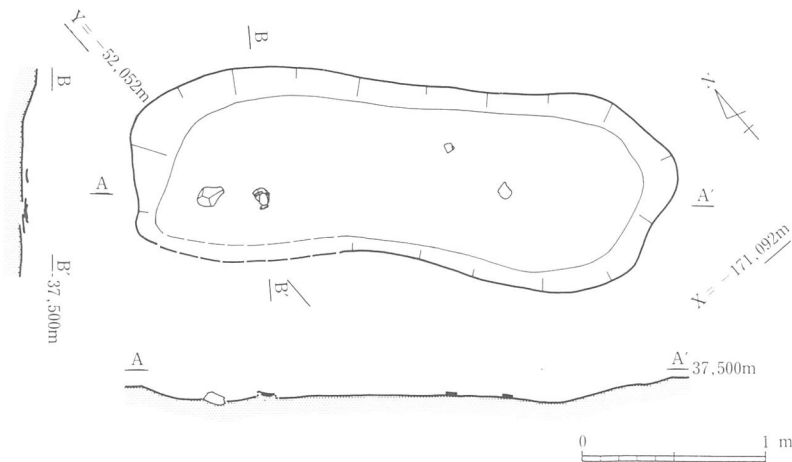
不明。色調は7.5YR7/6橙色を呈す。

(宮崎)

C1678-00 (第275図、図版100)

3区の中央南寄りにおいて検出した。規模は、 $2.99 \times 0.92\text{m}$ の隅丸長方形プランを有し、検出面からの深さは5cmをはかる。主軸の方位は $N-48^{\circ}-W$ 。断面形態は緩やかな逆台形を呈す。

埋土中から土師器皿、須恵器体部片および自然石等を得ている。いずれも坑底からやや浮いた状態で検出された(第275図、図版100)。

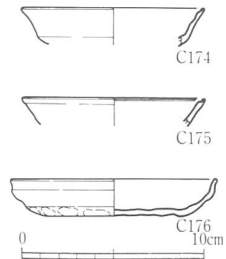


第275図 C1678-00 平面・断面図 (1/40)

〔土器〕(第276図、図版120・130)

土師器皿(C174~176) (C174・175)は口縁端部内面に一条の沈線をめぐらす。(C174)は口径9.9cmをはかる。口縁部は外反ぎみに立ち上がり、端部は尖頭状を呈している。調整は表面磨滅のため不明。色調は10YR7/8黄橙色を呈す。

(C175)は口径9.9cmをはかる。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。色調は5YR6/8橙色を呈す。(C176)は口径10.8cm、器高2.0cmをはかる。口縁部は二段にヨコナデ、底部内外面は指頭圧痕。色調は7.5YR6/8橙色を呈す(図版120)。その他、土師器皿片が2点出土している(図版130-C357・358)。



第276図 C1678-00 出土土器 (1/4)

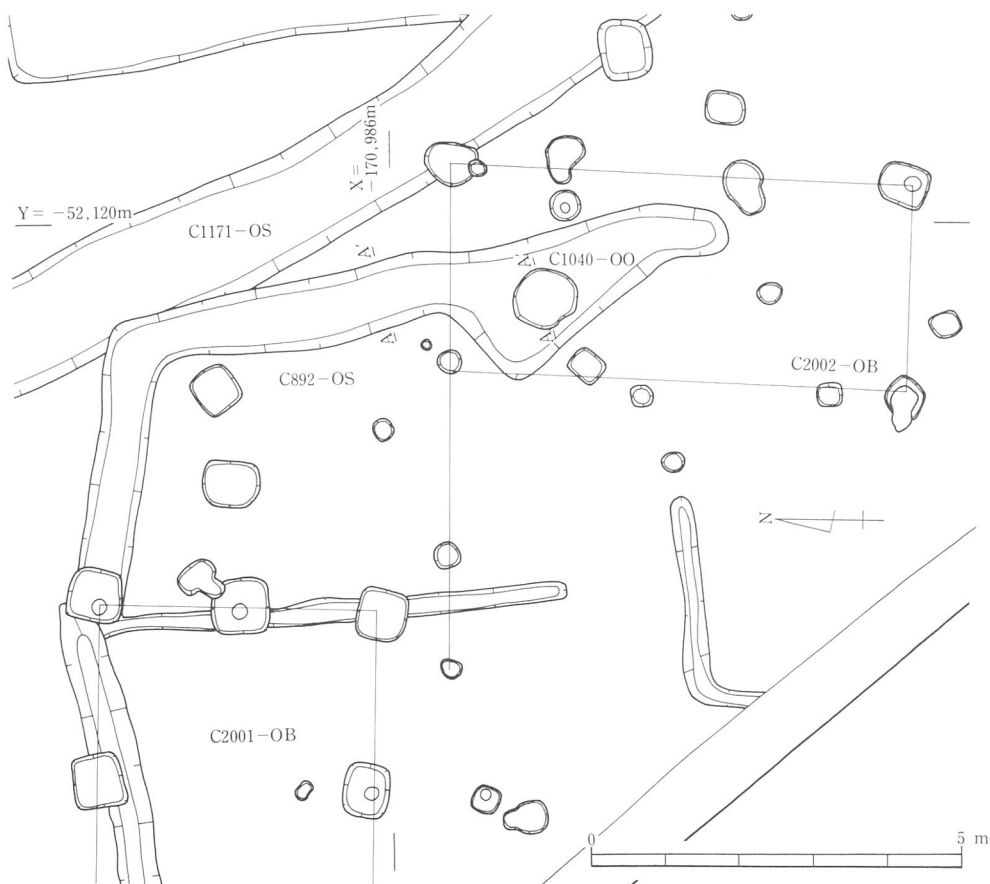
C1721-00

3区中央やや南寄りにて検出した。溝C1679・1724・1725-OSに切られている。平面プランは1.2×0.5mの楕円形を呈している。断面形態は逆台形を呈し、検出面からの深さは10cmをはかる。主軸の方位はN-99.5°-W。(宮崎)

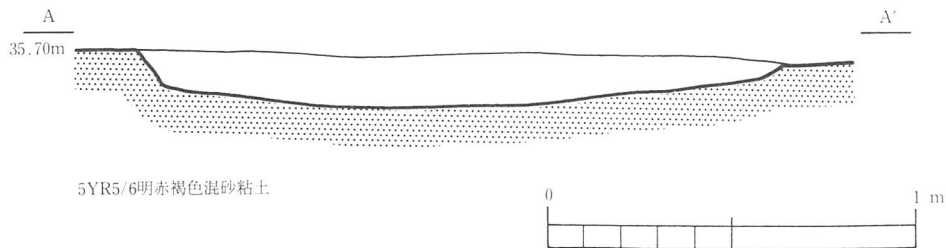
溝

C892-OS (第277図、図版82・117・128)

2区の北半で検出された溝である。L字形を呈するが、南端付近は一部三角形に拡張している。溝の西端は、掘立柱建物C2001-OBのC1309-OPに切られている。現存長約11m、幅0.7~1.8m、深さ8cmを測る。断面は浅い弧状を呈し、埋土は明赤褐色混砂粘土の単一層で炭塊が混っている。遺物は、溝底より少し浮いた状態で、8世紀中~後半(平城III~V)土師器・須恵器・製塩土器が出土している。



第277図 C892-OS 平面図 (1/100)

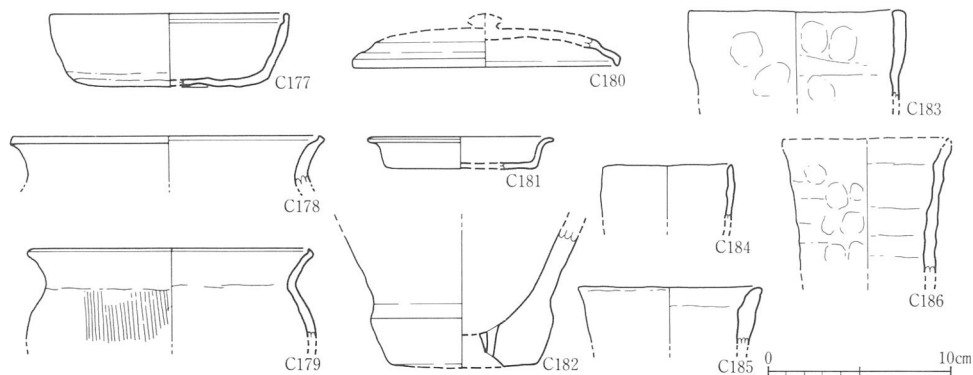


第278図 C892-OS断面図 (1/20)

出土遺物 土師器杯A、同甕A、同高杯A、須恵器杯B蓋、同鉢Fと製塩土器がある。

土師器 杯A (C177) は1/2残存し、口径13cm、器高4cmを測る(杯A II)。口縁部は、巻き込みの小さいB形態を呈する。底部には凹凸が残り、口縁部にはヨコナデが施されている(a o手法)。色調は橙色系で、胎土は赤色酸化土粒の頻度が高い。甕Cには(C178)と(C179)がある。両者とも口縁部の巻き込みは、ナデ調整により平坦面を呈している。(C178)は、口径17cmを測る。(C179)は、口径15cmを測る。口縁部は、外面に指頭圧痕が残るなど調整が不十分で形が歪んでいる。外面はタテハケ調整(4.5条1cm)。両者とも、色調は浅黄橙色を呈し、焼成は硬質。胎土は長石粒の頻度が高いのが特徴である。高杯Aは脚柱部の破片で、a手法のつくりである。

須恵器 杯B蓋(C180)は口縁部がA形態を呈し、口径14.5cmを測る。皿E(C181)は、口縁端部が横方向に拡張するのが特徴で、底部はヘラ切り未調整である。口径10cm、器高1.8cmを測る。鉢F(C182)は、軟質で風化が著しい。底部には焼成前に円孔が穿たれている。



第279図 C892-OS出土土器 (1/4)

製塩土器 4個体分の口縁部がある。(C183)は、口縁部が内弯し、上端面が平坦を呈する。ナデ調整だが、指頭圧痕の凹凸が顕著に残る。口径12cm。軟質で橙色を呈する。(C185)は、口縁部が外反し端部が断面三角形に肥厚する。ナデ調整、口径10cm。にぶい黄橙色。(C186)は、口縁部が短く外反するもので、均一な器厚を測る。ナデ調整だが、内外面には指頭圧痕と粘土紐による凹凸が顕著に残る。口径10cm前後と推定される。浅黄橙色を呈し、硬質。(C184)は、口径7cmを測る。他と比較して器壁が薄く、口縁端部が尖り気味に終わっている。浅黄橙色。 (小山田)

C936-OS (第280・281図、図版82)

3区中央にて検出した南北走る溝状遺構である。幅0.24~0.50m、深さ0.10mをはかり、断面形態はU字形を呈している。

北端で西に折れ、溝C937-OSにまじわり、南端では土坑C935-OOに切られている。上面は掘立柱建物C2007-OBの柱穴C830-OP、C2008-OBの柱穴C823・827-OP、C2009-OBの柱穴C824・829-OPに切れ、これら建物群に先行することは明らかである。

遺物の大半は南側に寄って、土師器甕・壺、須恵器壺・蓋等が出土した。

〔土器〕 (第282図)

奈良時代後半の土師器杯もしくは皿の底部・甕、須恵器壺・蓋、製塩土器等の資料を得



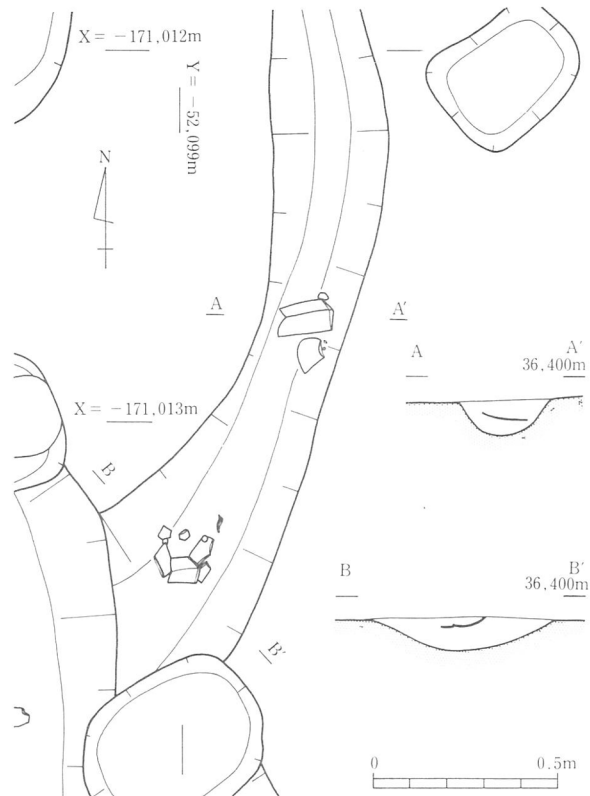
第280図 C936・937-OS 平面図 (1/80)

ている。製塩土器は小破片のため
図示していない。

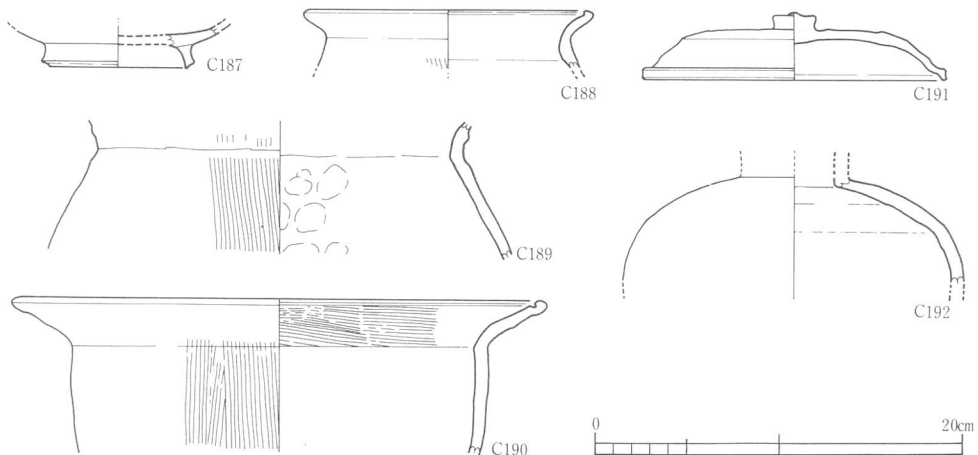
土師器杯もしくは皿 (C187)
底径7.4cmをはかる。「八」の字形
に開く高台を張り付けている。端
部はしっかりとした面をもち、中
央部はやや凹む。色調は2.5YR6/
8橙色を呈している。

土師器甕 (C188~190) (C
188)は口径15.0cmをはかる小形品
である。頸部から外反して開く口
縁部をもつ。端部は内側に弱く巻
き込む。口縁部はヨコナデ、頸部
外面はタテハケ調整を施す。色調
は10YR4/1褐灰色。

(C189・190) (C189)は頸
部径19.8cmをはかり、口縁部およ
び体部の大半を欠失する。調整は体部外面はタテハケ、内面は指頭圧痕である。色調は5YR
7/4にぶい橙色を呈する。(C190)は口径28.1cmをはかる。口径は体径を大きく上回る。



第281図 C936-OS 遺物出土状況・断面図 (1/20)



第282図 C936-OS 出土土器 (1/4)

低く外傾して伸びる口縁部をもち、端部は内側に巻き込み、丸くおさめている。それがため端部内縁に一条の沈線が走る。口縁部内面はヨコナデ後にヨコハケ、外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、内面はヨコナデ調整を施す。色調は2.5Y7/1灰白色を呈している。他に、頸部から体部までの破片であるが、体部外面はタテハケ、内面にヘラケズリ調整を施す甕形土器も出土している。

須恵器蓋(C191) 比較的平坦な頂部に屈曲する縁部をもつ。頂部には扁平な宝珠形つまみを付している。縁部は下端を突出させ、面を形成している。外面上半はロクロ削り、下半および内面はロクロナデ調整を施す。口径16.4cm、器高3.7cmをはかる。色調は10Y2/1灰白色を呈す。

須恵器壺(C196) 口頸部、体部大半を失う。卵形の体部をもつものと思われ、最大体部径は18.6cmをはかる。色調はN8/0灰白色を呈す。

以上、これらの土器は資料的制約があるものの、形態の特徴から判断して、平城宮IV～V期に相当すると考えられる。

C937-OS (第280図、図版82)

3区中央、C936-OSの西0.4mで検出した。幅0.3m、深さは削平を受けたためであろう0.1mと浅い。断面形態はU字形を呈している。

C936-OSと併行して南北走る溝で、北側は東西走る溝C934-OSに切られ、南端では土坑C935-OOに切られている。上面は柱穴C826・1172・1174・1563・1564-OPに切られている。

時期は、遺物の出土をみていないため明らかにしえないが、遺構の重複関係から判断して、C936-OSに併行するものと考えられる。

C1637-OS (第285図、図版96)

3区南端において検出した。第1次調査で検出しているSD0177と同一の溝である。弧を描きつつ東から西へ走行し、C1638-OSと重複する。幅85cm、深さ23cmをはかり、断面形態は緩やかな皿状を呈している。

溝中に堆積する埋土は、大きく3つの層に分けられる。(I)2.5Y7/2灰黄色混粗砂シルト層(カーボン・マンガン斑を含んでいる)、(II)2.5Y8/1灰白色粘質シルト層、(III)2.5Y8/1灰白色粘砂層(黄褐色粘土が混る)である。遺物のほとんどは(II)層中より出土した。

なお、本溝はC1638-OSと同一面にて検出され、切り合い関係も認められず、埋土も基

本的に同一であることから推して、若干の前後関係は考慮した上で、両溝は同時併存していたものと考えられる。出土遺物、特に黒色土器の形態においても、明らかな差異をみいだすことができないこととも照合する。以上のことから、C1638-OSと同様にC2015-OBに伴う排水施設としての機能を有していたと考えられる。

〔土器〕（第283図、図版129）

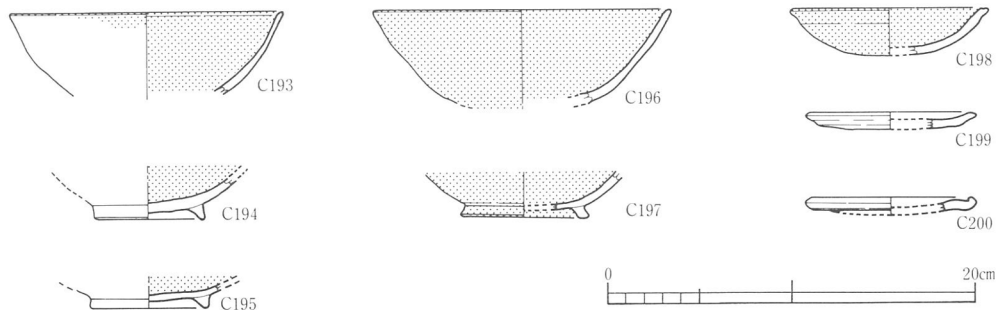
黒色土器A類椀・B類椀・皿、土師器小皿、須恵器体部片等がある。時期は平安時代後半である。いずれも溝底からやや浮いた状態で検出された（図版90上）。

黒色土器A類椀（C193～195）（C193）は口径14.7cmをはかる。口縁端部内面に軽い稜線が入る。内外面は表面磨滅のため不明。色調は7.5YR8/3浅黄橙色を呈する。（C194・195）は底部である。いずれも表面磨滅のため調整は不明。（C194）は底径5.7cmをはかる。色調はN3/0暗灰色を呈する。（C195）は底径6.2cmをはかり、色調は10YR8/2灰白色を呈する。

黒色土器B類椀（C196～197）（C196）は口径16.0cmをはかる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ調整。色調は10Y2/1黒色。（C197）は底径6.7cmをはかる。体部外面はヘラミガキ、内面は表面磨滅のため調整は不明。色調は10Y2/1黒色を呈する。

黒色土器B類小皿（C198） 口径10.5cm、器高2.6cmをはかる。浅い体部から、緩やかに屈曲後、外反する口縁部を有する。口縁端部上端内面に沈線一条をめぐらす。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデ調整を施す。色調は10YR2/1黒色。破片の一部は1次調査で検出されたSD0177から出土した土器と接合した。

土師器小皿（C199・200）（C199）は口径8.7cmをはかる。ほぼ平坦な底部に、外反



第283図 C1637-OS 出土土器（1/4）

して短く開く口縁部を有する。端部は外傾し、面をもつ。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデ調整。色調は7.5Y8/2灰白色。(C200)は口径8.7cmをはかる所謂T字状口縁を有する小皿である。色調は10YR7/4にぶい黄橙色。

C1638-OS (第284・285図、図版91・96・97)

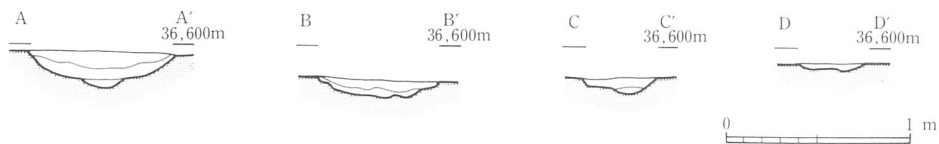
3区南端において検出した。東側はC1637-OS及び第1次調査で検出されているSD0177、西側はC1639・1640-OSと重複している。

幅は40～95cm、深さは5～19cmをはかり、建物C2015-OBをコ字形に廻っている。断面形態は緩やかなU字形を呈する。溝底は東から西へむかって傾斜し、C1639～1640-OSに続く。

なお、C2015-OBの西庇柱穴C1643-OPが溝底において検出されたことから判断して、C2015-OBの構築に先立って掘削もしくは存在していたものと思われる。建物の規模は溝に規定された可能性も考えられる。

埋土は、溝中の土層堆積状況から大きく3層に分けられる(第284図、図版91上)。(I)灰黄色混粗砂シルト層、(II)灰白色粘質シルト層、(III)灰白色粗砂層(粘性が入る)である。

(I)層は、溝の機能消失後に堆積した土層。(II)層は、溝の機能時からその消失時までの間に形成された土層と思われる。遺物の大半は(II)層中より出土した。特に、東側に集中していた(図版90)。(III)層は、掘立柱建物C2015-OBの屋根から流れ落ちる雨水によって、形成されたくぼみに堆積した土層である。



第284図 C1638-OS断面図(1/40)

〔土器〕(第286図、図版118・119・129)

平安時代後半頃の黒色土器A類椀・B類椀・B類皿、土師器小皿、土師器台付小皿、須恵器等を得ている。須恵器は小破片のため図示していない。なお、これらの土器群は東側に集中し、一定範囲内に相接して出土した状況から判断して、廃棄の同時性を示す資料として把握されよう。

黒色土器A類椀(C201～207) 口径の大小によって、17cm前後のもの(C201・202)、15cm前後のもの(C205)、14cm前後のもの(C203・204)等の3つのタイプに分けること



第285図 C1637~1640-OS 平面図 (1/100)

が出来る。

(C201) は口径16.6cmをはかる。体部内面はヘラミガキ、外面は表面磨滅のため調整不明。色調は7.5Y8/2灰白色を呈する。(C202) は口径16.7cmをはかる。大きく上方に開く体部に、外反して上方に開く口縁部を有する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は表面磨滅のため不明、外面は指頭圧痕が明瞭に観察される。色調は7.5Y8/1灰白色を呈する。

(C203) は口径14.6cmをはかる。外面は表面磨滅のため調整不明、内面はヘラミガキ、口縁部はヨコナデを施す。色調は7.5Y7/1灰白色を呈す。(C204) は口径14.2cmをはかり、口縁部は、強いヨコナデを加え、大きく上方に外反する。内外面はヘラミガキ調整。色調は10YR8/2灰白色を呈する。

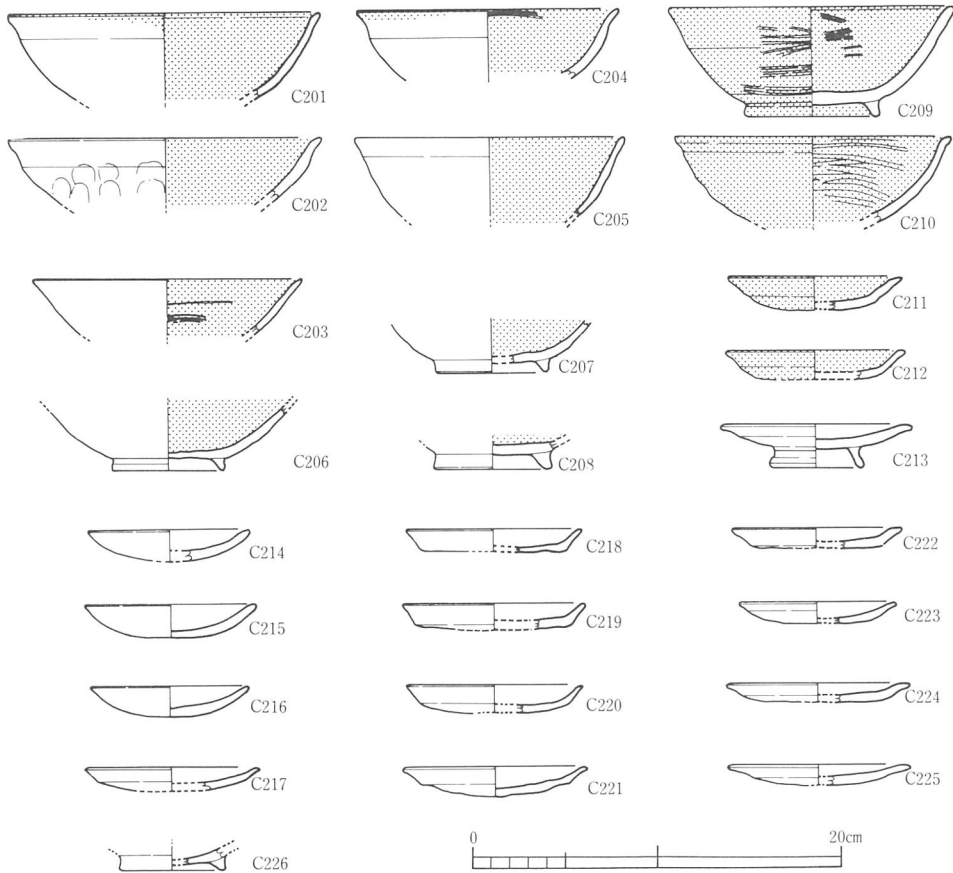
(C205) は口径14.5cmをはかる。口縁部内外面はヨコナデ、他は表面剥離のため調整不明。色調は2.5Y7/3浅黄色を呈する。

(C206) は底径6.0cmをはかる。調整は表面磨滅のため不明。色調は10Y8/1灰白色を呈す。(C207) は底径5.9cmをはかる。内面はヘラミガキ、外面は表面磨滅のため調整不明。色調は7.5Y8/1灰白色を呈する。他の黒色土器A類椀に比して砂粒の入りかたが多く、胎土は粗い。(C208) は底径6.2cmをはかる。底部内面はヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。色調は2.5Y8/3淡黄色を呈す。

黒色土器B類椀 (C209・210) (C209) は土師器小皿 (C221) とともに (II) 層からやや浮いた状態で検出された (図版96)。口径15.3cm、器高6.0cm、底径7.0cmをはかる。口縁端部は円頭状におさめている。他のものに比較して器壁は厚く、安定感のある高台を張りつけている。高台はやや外傾して、端部は丸く終える。口縁部はヨコナデ後にヘラミガキ、体部内面はヘラミガキ、外面はヘラケズリ後にヘラミガキ調整。色調は N3/0暗灰色を呈する。(C210) は口径15.0cmをはかる。口縁部に強いヨコナデを施しているために、端部はやや外に突出する。体部内面はヘラミガキ、外面は表面磨滅のため調整不明。色調は10Y2/1黒色を呈する。

黒色土器B類皿 (C211・212) (C211) は口径9.5cm、器高1.8cmをはかる。内外面共にヘラミガキ調整を施す。色調は N3/0暗灰色。(C212) は口径9.5cmをはかる。口縁部はヨコナデ、体部はナデ調整。色調は N2/0黒色を呈す。

土師器小皿 (C214~225) (C214・215) は丸い底部から、内湾ぎみに開く口縁部をもつ。端部は丸くおさめている。口径に対して器高の占める割合は高い。(C214) は口径8.6cm、器高1.7cmをはかる。内外面はナデ調整を施す。色調は7.5Y8/1灰白色を呈する。(C



第286図 C1638-OS 出土土器 (1/4)

215) は口径9.2cm、器高1.8cmをはかる。調整は内外面ともにナデ。色調は7.5Y8/2灰白色。

(C216) は口径8.5cm、器高1.7cmをはかる。丸い底部から、緩やかに外反して開く口縁部を有する。端部は尖頭状。口縁部内外面はヨコナデ、体部はナデ調整。色調は5Y8/3淡黄色を呈す。

(C217) は口径9.1cmをはかる。低く丸い底部から、外反して開く口縁部を有し、端部は外にやや突出する。色調は7.5Y8/3浅黄橙色。胎土は、1~2mm前後の砂礫を含み、やや粗い。

(C218~220) 平坦な底部から屈曲して、外反する口縁部を有する。いずれも色調は7.5Y8/2灰白色を呈する。(C218) は口径9.6cm、器高1.2cmをはかる。(C219) は口径9.7cm、器高1.4cmをはかる。(C220) は口径9.4cm、器高1.5cmをはかる。口縁端部は、わずかに突出している。

(C221) は口径9.7cm、器高1.6cmをはかる。丸く低い底部から屈曲して、強く外反して開く口縁部を有し、端部は面をもつ。口縁部内外面はヨコナデ、底部外面は指頭圧痕、内面はナデ調整である。色調は7.5Y8/2灰白色。

(C222) は口径9.1cm、器高1.1cmをはかる。平坦な底部に、口縁部は外反して開き、端部は面をもつ。色調は7.5Y8/1灰白色。

(C223) は口径8.3cm、器高1.2cmをはかる。低く丸い底部から上方に開き、短く外反する口縁部を有す。色調は7.5Y8/2灰白色を呈す。

(C224・225) 低平な底部から、滑らかに外反する口縁部をもつ。端部は尖りぎみにおさめる。(C224) は口径9.4cm、器高1.0cmをはかる。口縁部はヨコナデ、体部はナデ調整である。色調は7.5Y8/1灰白色。(C225) は口径9.4cm、器高1.1cmをはかる。色調は7.5Y8/2灰白色。

土師器台付小皿(C213) 口径9.8cm、器高2.4cm、底径4.8cmをはかる。形態的に灰釉陶器及び緑釉陶器の台付皿を模したものと考えられる。口縁部および高台はヨコナデ、底部内外面はナデ調整である。色調は7.5Y8/2灰白色を呈する。

土師器椀(C226) 底径5.4cmをはかる。調整は表面磨滅のため不明。色調は7.5Y8/1灰白色。

以上の土器群は、その形態的特徴から11世紀前半～中頃に比定され、いまだ当該時期の出土例の少ない泉州地域においては絶好の基準資料となるであろう。時期はまさに瓦器出現の直前にあたる(最も古い瓦器椀と共伴する可能性も考えている)。

C1639-OS (第285図、図版97)

3区南端、西寄りにて検出した。C1638-OSの西隅から、西方に伸びる溝で、幅約0.25m、深さ0.05mをはかる。西端はC1762-OXによって破壊されており、現存長は2.8mである。

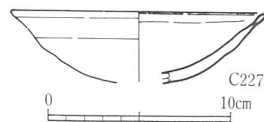
埋土は2層に分けられる。(I) 2.5Y8/1灰白色粘質シルト層、(II) 2.5Y8/1灰白色粗砂層(粘性が入る)である。

なお、C1638-OSと重複して検出され、埋土が基本的に同じであること、加えて溝底が東から西へ傾斜していること等から判断して、C1639-OSはC1638-OSと同様に建物C2015-OBの排水施設としての機能を有していた溝と考えられる。

出土遺物には黒色土器A類・B類椀、土師器杯・小皿等があるが、いずれも細片で、図示できるものは土師器杯1点のみ。

〔土器〕（第287図、図版130）

土師器杯（C 227） 口径14.0cmをはかり、底部を失う。底部から、内湾ぎみに開く体部にいくぶん外反して伸びる口縁部をもつ。端部は尖頭状を呈する。口縁部内外面は強いヨコナデ、体部内外面はナデ調整を施す。色調は7.5YR7/4にぶい橙色。



第287図 C1639-OS 出土土器（1/4）

C1640-OS（第285図、図版97）

3区南端、C1639-OSの南0.8mで検出した東西走る溝である。幅約0.2m、深さ0.05mをはかり、断面形態は浅いU字形を呈する。埋土および溝底の傾斜もC1639-OSと同様な状況を示し、西端でまじわっている点から、建物C2015-OBに伴う排水施設の一部と考えられる。ただし、C1639-OSに較べて深さが浅い点、気がかりである。なお、遺物の出土はみられなかった。

C1641-OS（第288図、図版100）

3区の南端において、古墳時代前期のC1830-OSを切り込んで、北東-南西に直進するようにして検出した。南西側は収束し、北東側は調査区外に及ぶ為、全容は明らかにしえない。総延長6.6mを確認している。幅は0.7~1.2m、深さは4~5cmをはかる。

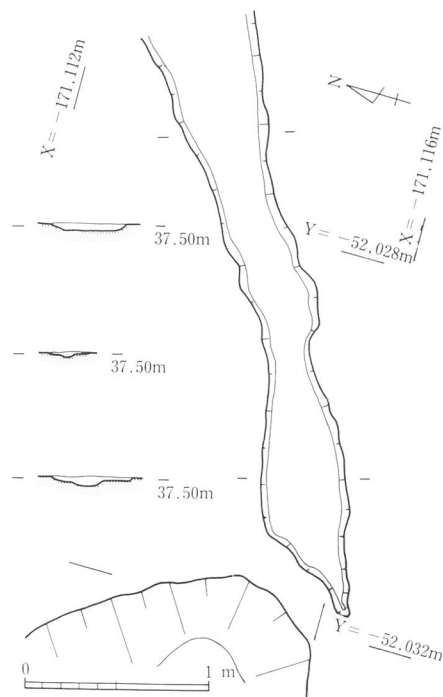
埋土は、1~2mm前後の黄褐色粘土塊、カーボン粒を含む10YR6/1褐色灰色粘質シルト層の単一層である。

〔土器〕（第289図、図版120・128）

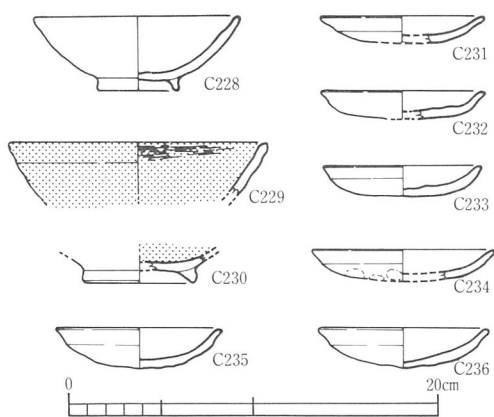
バスケット1杯分の黒色土器A類椀・B類椀、土師器椀、土師器小皿、須恵器等を得ている。

黒色土器A類椀（C230） 底径5.9cmをはかる底部片である。内外面の調整は表面磨滅のため不明。色調は2.5Y2/4淡黄色。

黒色土器B類椀（C229） 口径14.0cmをはかる。口縁端部内面に軽い稜線が入る。口縁



第288図 C1641-OS 平面・断面図（1/40）



第289図 C1641-OS 出土土器 (1/4)

部内外面はヨコナデ後にヘラミガキ、
 体部内面はヨコヘラミガキ、外面は表
 面磨滅のため調整は不明。色調は N2/
 0黒色を呈する。

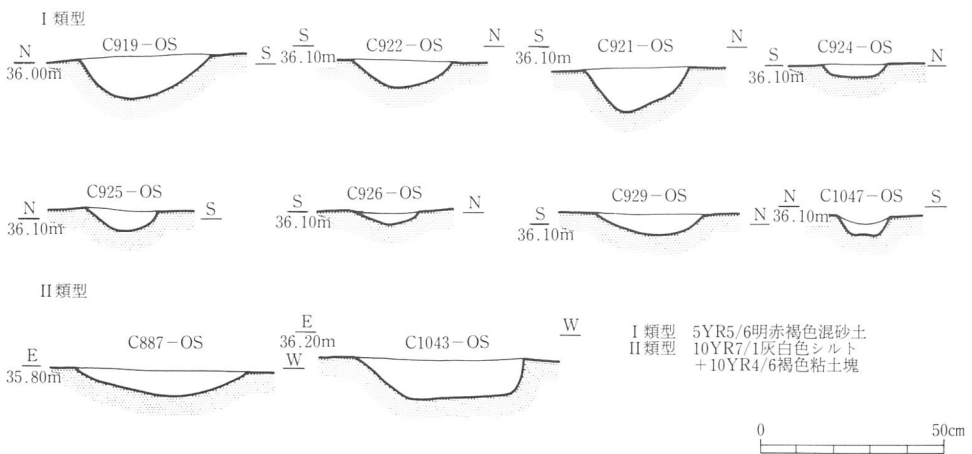
土師器碗 (C228) ここでは取りあ
 えず土師器で説明するが、黒色土器の
 可能性も指摘しておきたい。口径11.0
 cm、器高4.0cm、底径4.3cmをはかる小
 振りな土器である。調整は全体に磨滅
 しているので不明。色調は5Y8/3淡黄

色を呈する。

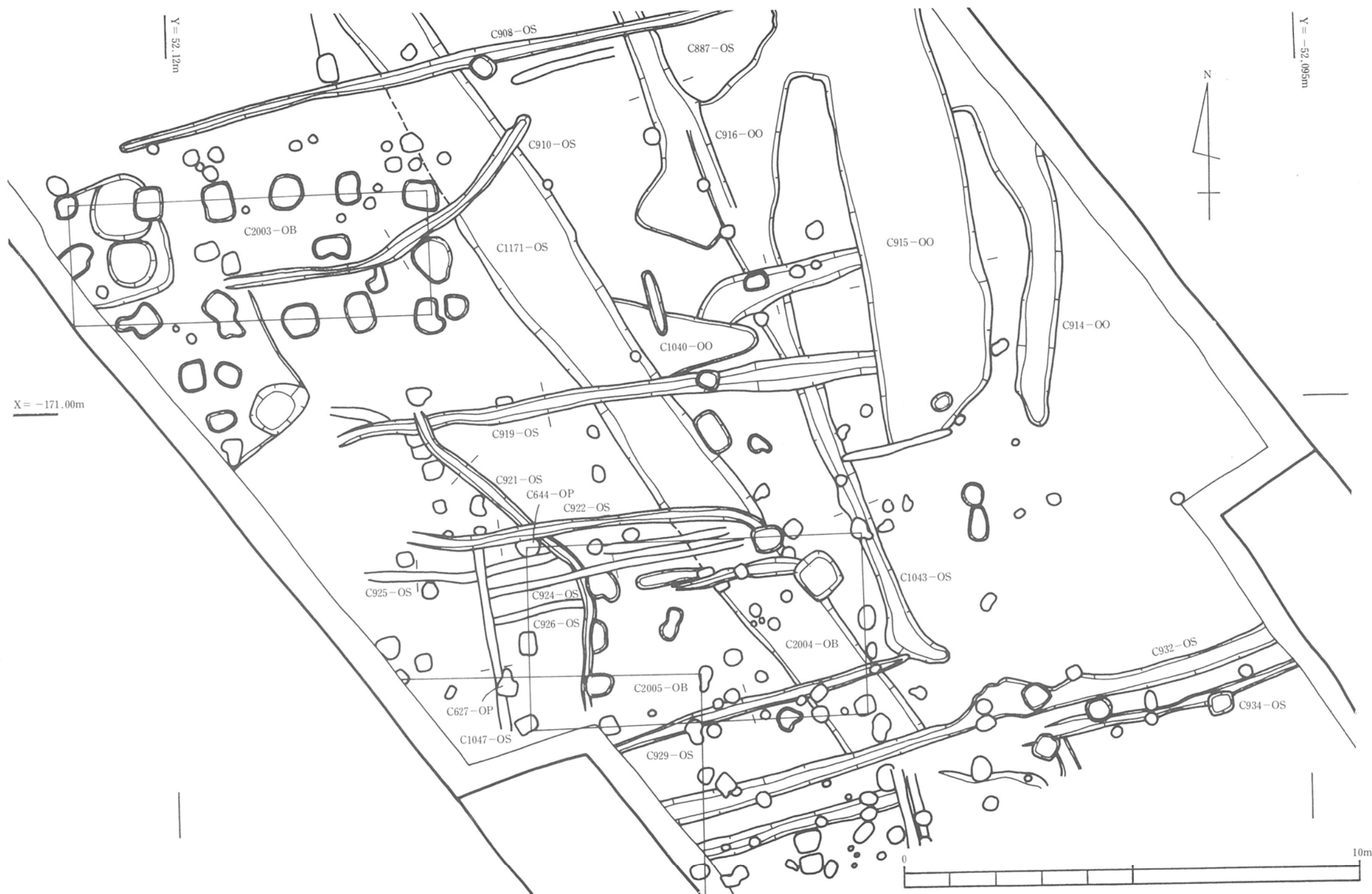
土師器小皿 (C231~236) いずれも口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデ調整
 を施している。器高から、1.8cm以下のもの (C231~234)、2.2cm前後とやや深いもの (C
 235~236) の大小がある。(C236) は口径9.0cm、器高2.2cmをはかる。 (宮崎)

2区小溝群 (第290~292図、図版75)

2区の北半で検出された小溝群で、北より列記すると、C887・C910・C919・C921・
 C922・C925・C924・C926・C1047・C929・C1043-OSとなり、計11条を数える。こ
 れらの小溝群は、規模や埋土により2類型に分離できる。I類型はC1043・C877-OS
 で、溝幅が70~80cmとII類型より広く、埋土は明赤褐色混砂土を基調とする。II類型は上



第290図 C-2区北半部小溝群断面図 (1/20)



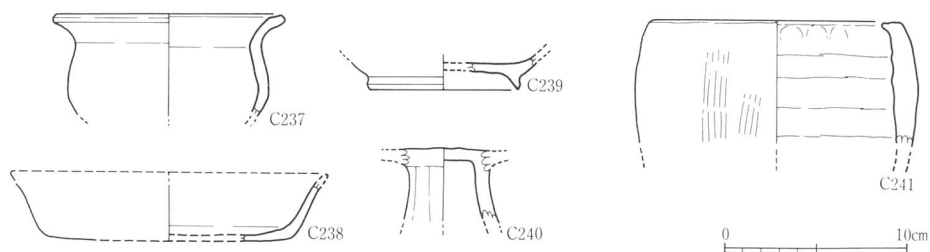
第291図 C-2区北半部小溝群平面図 (1/100)

記以外の溝で、溝幅は30cm前後、深度5～10cmを測る。概ね東西方向の走行で、埋土は灰白色シルトに粘土塊の混じるものである。

遺物の出土量は僅かである。土師器壺B (C237)はC919-OS出土。黒色土器碗(C239)はC822-OS出土。須恵器杯A (C238)と土師器高杯A (C240)はC910-OS出土。(C241)は器種不明の土師器で、C887-OS出土。

上記の資料で溝の時期を決定するのは困難だが、遺物の示す9世紀から10世紀中頃にかけての時間幅に収まるものと推定される。

なお、小溝群を介して建物C2004-OBとC2005-OBの間に、C2004-OB北西隅柱C644-OP→C925-OS→C1047-OS→C2005-OB桁行北柱列C627-OPという重複関係が得られている。(小山田)



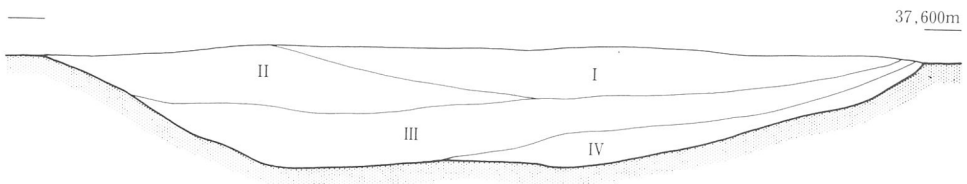
第292図 C-2区北半部小溝群出土土器 (1/4)

SD0177 (第293図)

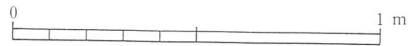
3区南端、掘立柱建物址C2015-OB及びC1638-OSと重複して検出された。第1次調査で検出された溝状遺構で、本調査でもその一部を確認している。

北はC2015-OB、西はC1638-OSと重複するが、前後関係を確認することはできなかった。幅は約2.4mで、北東から南西に向かって走行する。主軸の方位はN-117°-W。断面形態は緩やかな浅鉢状を呈し、深さは約0.3mをはかる。溝底のレベルは東側で、T.P.+37,205m。

埋土は土層の堆積状況から、4層に分けることができる。(I)層褐色粘土塊混り暗灰色土、(II)層黄色混り暗灰色砂質土(カーボンを含む)、(III)層暗褐色灰色土(下位に厚さ5cm前後のカーボンが層を形成)、(IV)層微砂混り暗黄灰色土である。



- I 褐色粘土塊混り暗灰色土
- II 黄色混り暗灰色砂質土 (カーボンを含む)
- III 暗褐色土 (下位に厚さ 5 cm 前後のカーボンが層を形成)
- IV 微砂混り暗黄灰色土



第293図 SD-0177平面・断面図 (1/20)

(I)～(III)層の堆積は、層中に含まれる内容物から判断して、溝の機能消失後に形成されたものと思われる。遺物の大半は(III)層からで、黒色土器碗・皿、土師器小皿等が出土している。平面的な拡がりをもつ出土状況より推して、人為的に投棄したものと考えられる。廃棄の同時性を有する資料として理解されよう。

これらの土器群の中には、底部外面に線刻記号をもつ黒色土器B類碗(C252)1点を含んでいた。

溝廃絶の時期は、黒色土器B類碗の形態および法量、調整等の特徴から判断して、11世紀前半～中頃に想定される。

したがって、遺物の上からも本溝はC1637・1638-OS、C2015-OBとほぼ同時期に廃絶したと推定できよう。

〔土器〕(第294図、図版119・120)

黒色土器A類碗・B類碗・皿、土師器小皿等が出土している。

黒色土器A類碗(C242～251) 口縁端部内面に沈線を施すもの(C242)と端部を丸くおさめただけのもの(C243～245)がある。

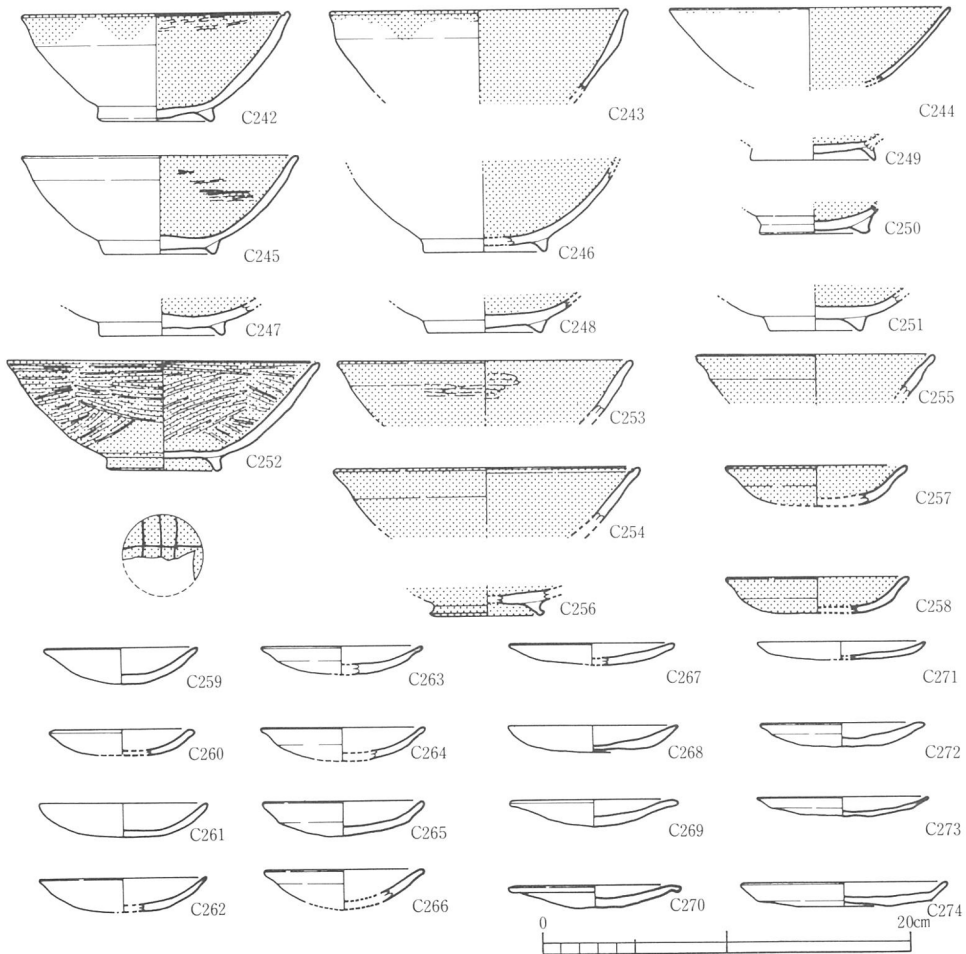
(C242)は口径14.4cm、器高5.8cm、底径5.9cmをはかる。口縁部の器壁は5.8mmとやや厚手である。碗部内面はヘラミガキ、外面の調整は表面磨滅のため不明。色調は7.5YR7/4にぶい橙色を呈す。

(C243)は口径16.0cmをはかる。口縁部と体部との境目に強い稜線が入る。内面の調整はヘラミガキ、外面は表面磨滅のため不明。色調は7.5YR7/4にぶい橙色を呈す。(C244)は口径14.5cmをはかる。体部は底部から直線ぎみに外へ大きく開いている。調整は表面磨滅のため不明。色調は7.5YR7/4にぶい橙色を呈す。(C245)は口径14.9cm、器高5.3cm、底径6.0cmをはかる。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はヘラミガキ、外面は表面磨滅のため不明、底部外面はナデ調整を施す。色調は10Y6/1灰色。

(C246～251) いずれも底部片である。(C246)は底径6.5cmをはかる。調整は表面磨滅のため不明。(C247)は底径6.6cmをはかる。調整は表面磨滅のため不明。(C248)は底径6.1cmをはかり、調整は表面磨滅のため不明。外面の色調は7.5YR8/1灰色を呈する。(C249)は底径6.7cmをはかり、調整は内外面ともにナデ。色調は外面10Y2/1黒色、内面7.5Y8/1灰白色を呈する。(C250)は底径5.7cmをはかり、低く安定感のある高台を付す。色調は外面7.5YR6/8橙色を呈する。(C251)は底径4.9cmとやや小振りな高台をもつ。色調は外面7.5YR6/8橙色を呈す。

黒色土器B類碗 (C252～256) 口径16cm前後のもの (C252～254)、14cm前後のもの (C255)の大小がある。A類碗と較べて口径の割りに器高がやや低いのが特徴として指摘できる。

(C252) は口径16.9cm、器高5.9cm、底径5.8cmをはかる。緩やかに内弯して外上方に開く体部に直口する口縁部を有する。端部は丸くおさめている。端部内面上縁に一条の浅い沈線を廻らしている。口縁部はヨコナデ後にヘラミガキ、体部内面は斜めにヘラミガキ、外面はヘラケズリ後に4分割のヨコヘラミガキ調整を施す。底部内面は一定方向にヘラミガキ、外面はナデ調整である。色調はN2/0黒色を呈する。底部外面には浅いタッチでヘラによる刻線を施している。同様の例は黒色土器ではないが、大園遺跡 SE801出土の瓦器碗



第294図 SD-0177出土土器 (1/4)

にみられる。(C253)は口径15.8cmをはかる。口縁部はやや外反して、端部は円頭状を有する。口縁部はヨコナデ後にヘラミガキ、体部内外面はヨコヘラミガキ調整を施す。色調はN2/0黒色。(C254)は口径16.4cmをはかる。口縁端部内面上縁に一条の浅い沈線を施す。内外面ヘラミガキ調整。色調はN1.5/0黒色を呈する。

(C255)は口径12.8cmをはかる。口縁部内外面はヨコナデ後にヘラミガキ、体部内外面はヘラミガキ調整を施す。色調は5Y2/1黒色を呈する。

(C256)は底部片で底径5.7cmをはかる。色調はN2/0黒色を呈する。

黒色土器B類皿(C257・258) 溝C1638-OSの法量にくらべてやや大きい。(C257)は口径9.7cm、器高2.2cmをはかる。内外面ともにヘラミガキ調整を施す。色調は5Y2/1黒色を呈する。(C258)は口径9.8cm、器高1.95cmをはかる。ヨコナデ後にヘラミガキ調整を施す。色調は10Y2/1を呈する。なお、本溝から出土した黒色土器B類皿の破片が前述している溝C1637-OSのものと同接合(第283図C198)。

土師器小皿(C259~274) 口径7.35~11.0cm、器高1.0~2.2cmをはかる(図版119)。

(C259~262) 丸い底部から、内湾ぎみに開く口縁部をもち、口縁部に施すヨコナデが弱いため底部との境が明瞭でないものである。(C259)は口径8.0cm、器高1.9cmをはかる。色調は5Y8/1灰白色を呈する。(C260)は口径7.3cm、器高1.5cmをはかり、端部をわずかに外につまみだす。色調は7.5Y8/2灰白色を呈す。(C261)は口径9.0cm、器高1.8cmをはかる。色調は7.5Y8/2灰白色。(C262)は口径9.0cm、器高1.9cmをはかる。端部は尖頭状。色調は5YR7/4にぶい橙色を呈す。

(C263~266) 丸い底部から、緩やかに外反し開く口縁部を有する。口径に対して器高の低いもの(C263)、高いもの(C264~266)がある。

(C263)は口径8.6cm、器高1.5cmをはかる。色調は2.5Y8/3淡黄色を呈す。

(C264~266) (C264)は口径8.7cm、器高1.8cmをはかる。色調は7.5YR8/2灰白色を呈している。(C265)は口径8.5cm、器高1.9cmをはかる。底部内面はナデ、外面は指頭圧痕が残る。色調は2.5Y8/2を呈す。(C266)は口径8.4cm、器高2.2cmをはかり、小皿にあってはやや深い形状をなす。色調は5Y8/1灰白色を呈している。

(C267~269) 口径に比して器高が低く、底部は平坦で、底部と口縁部の境目が不明瞭なものである。(C267)は口径8.7cm、器高1.2cmをはかる扁平な小皿。色調は7.5Y8/1灰白色を呈している。(C268)は口径9.0cm、器高1.5cmをはかる。口縁部に軽いヨコナデを施し、やや内湾する。色調は7.5YR7/6橙色を呈す。(C269)は口径9.0cm、器高1.0cmをは

かり、器壁は薄い。口縁部の立ち上がりは弱く、わずかに内弯している。色調は2.5Y8/1灰白色を呈す。

(C270・271) 小さな丸い底部から、緩やかに外反して低く伸びる口縁部を有する。

(C270)は口径8.6cm、器高1.5cmをはかる。口縁端部は円頭状を呈する。色調は7.5YR6/6橙色。(C271)は口径8.4cm、器高1.2cmをはかる。口縁部は下方に折り曲げ、外面に凹面を生じさせている。底部内外面の調整は表面磨滅のため不明。色調は7.5Y8/2灰白色を呈する。

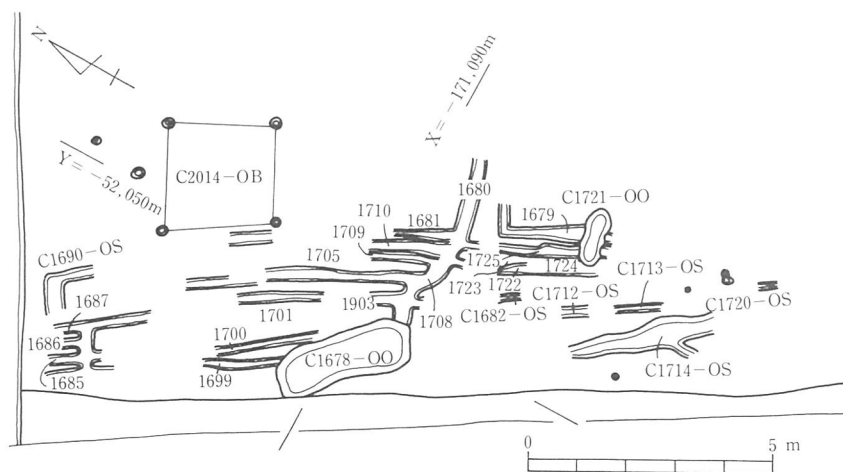
(C272～273) 平らな底部から屈曲し、外反して短く開く口縁部をもつ扁平な小皿。

(C272)は口径8.5cm、器高1.3cmをはかる。口縁部内外面のヨコナデは軽いタッチ。色調は7.5Y8/1灰白色を呈する。(C273)は口径9.2cm、器高1.0cmをはかる。著しく磨滅し、器壁は薄い。色調は7.5Y8/2灰白色を呈す。

(C274)は口径11.0cm、器高1.3cmをはかる。比較的平坦な底部から、屈曲し、外傾して伸びる口縁部を有する。底部はやや上げ底。色調は10Y8/1灰白色を呈する。

3区小溝群 (第295図、図版85)

3区の中央南寄り、掘立柱建物C2014-OBの西側において検出された小溝群(C1679～1683・1685～1690・1699～1705・1708～1710・1722～1725-OS)である。幅10～30cm、深さは3～5cmとひじょうに浅い。形状からして、耕作にともなう鋤溝と考えられる。



第295図 3区小溝平面図 (1/150)

C1680・1699・1700-OSは土坑C1678-OOを切り込み、C1679・1724・1725-OSは土坑C1721-OOを切っている。小溝の時期は、これら2つの土坑に後出し、出土遺物より判断して、12世紀代に比定される。

〔土器〕(第296図、図版130)

土師器、黒色土器、瓦器、須恵器等を得ているが、いずれも細片で、図示できる資料は2点。



第296図 C1679・1701-OS出土土器(1/4)

瓦器碗(C275) 底径6.0cmをはかり、安定した高台をもつ。内面はヘラミガキ調整を施す。色調はN3/0暗灰色。C1679-OS出土。他に、黒色土器A類碗(C353)、土師器小皿(C355)がある。

瓦器小皿(C276) C1701-OS出土。口径9.2cmをはかる。内外面ヘラミガキ調整。色調はN5/0灰色を呈す。(宮崎)

第5節 鎌倉時代～室町時代

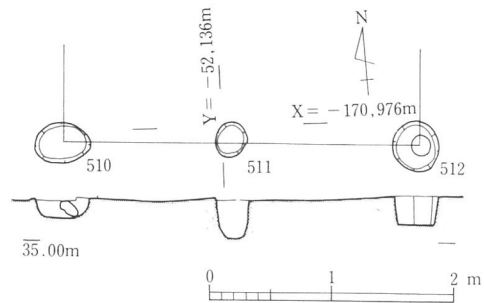
調査区の全域に亘って、耕作に伴う小溝・畦畔・区画溝や土坑、柱穴等が検出されている。2区北端では掘立柱建物1棟、3区の北側では轆を検出した。

第1項 遺構と遺物

掘立柱建物

C3001-OB(第297図)

2区の北端で検出した。梁間2間(3m)の南北棟と推定される。柱間は約1.5mの等間である。柱掘形は円形で、径30～40cmをはかる。(小山田)



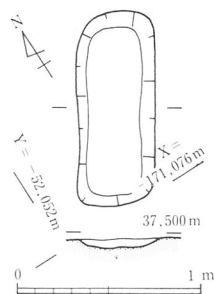
第297図 C3001-OB平面・断面図(1/60)

土坑

C1478-OO(第298図)

3区中央やや東寄りにて検出した。規模は1.05×0.43mの隅丸長方形を呈し、深さは5cmをはかる。主軸の方向はN-147.7°-W。埋土は、鉄分および1mm前後のマンガン斑文を含む2.5Y6/2灰黄色レキ混じりシルト層。得られた土器は瓦器小皿片1のみ。時期は瓦器小皿の形態的特徴から鎌倉時代に推定される。(宮崎)

轍 (第299図、図版85・102・103)



第298図 C1478-OO 平面・断面図 (1/40)

2区北半で、幅約10cmを測り、シルトを埋土とする多数の小溝が検出された。試掘時にも検出されていたが、今回調査面積が拡がりこれらの小溝が対で併走することが明瞭になり、轍と認定した。走行は、概ね東西方向(C1360-OS、C1998-OX)とそれよりやや北に振るもの(C1997・C1999-OX)に限定されている。軸幅は、C1997-OXで約1.5mを測る。他も近似する値が計測されている。車輪のめり込みは、良好に遺存するC1997-OXで約30cmを計測する。

遺物は、C1997-OXより12世紀後半の瓦器碗の小片が検出されている。(小山田)

踏み込み跡

2区北半部で2箇所(C890・900-OX)、3区南端部で1カ所(C1762-OX)検出している。黄褐色粘土をベースとして、径10~20cm前後の凹みが足跡状に残るもので、灰色シルト層によって充填されている。出土遺物はほとんどなく、わずかに瓦器碗の小片を得ている。

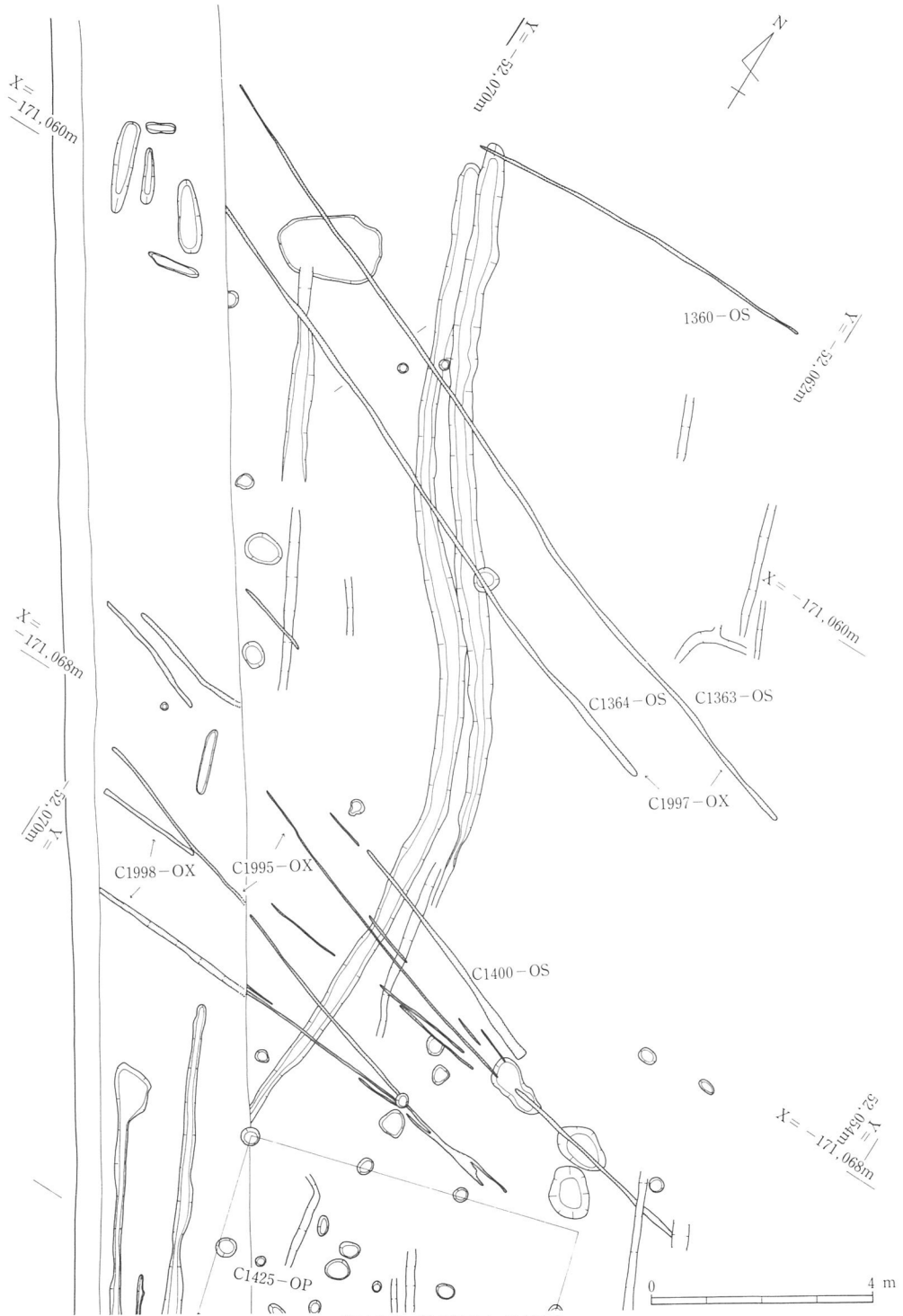
小溝 (第300・301図、図版101・113・114)

調査区の全域において確認している。幅はおおむね20~30cm、深さは5~10cmをはかる。埋土は灰色粗砂シルト層を基調としている。

軸方向から、小溝は大きく5つのタイプに分けられる。AタイプはN-95~105°-W、BタイプはN-118~122°-W、CタイプはN-204°-W、DタイプはN-130°-W、Eタイプは上記の範疇に入らないものである。

各タイプの代表的な遺構を抽出すると、Aタイプは2区北半部に限定され、C878~880、883~886、889、902、904、908、932、934、942、943、1228、1229-OS等がある。なかでもC932・934-OSは現畦畔や段に沿う形で、検出されている。いずれも出土遺物から、13世紀代に比定される。

Bタイプは3区以南全域に広く分布し、C1330、1332、1354~1359、1473、1480、1481、1491~1496-OS等がある。第III C層の掘削後、第V層上面にて検出された。出土遺物から14世紀代に比定されるC1330-OS以外は13世紀代に比定される。なお、6区では第III A a層上面および第III A c層上面において検出している。小溝からは、ほとんど遺物を得ることができなかつたため時期を明らかにすることは出来ないが、第III層中に含まれる土器か



第299図 轍平面図 (1/120)

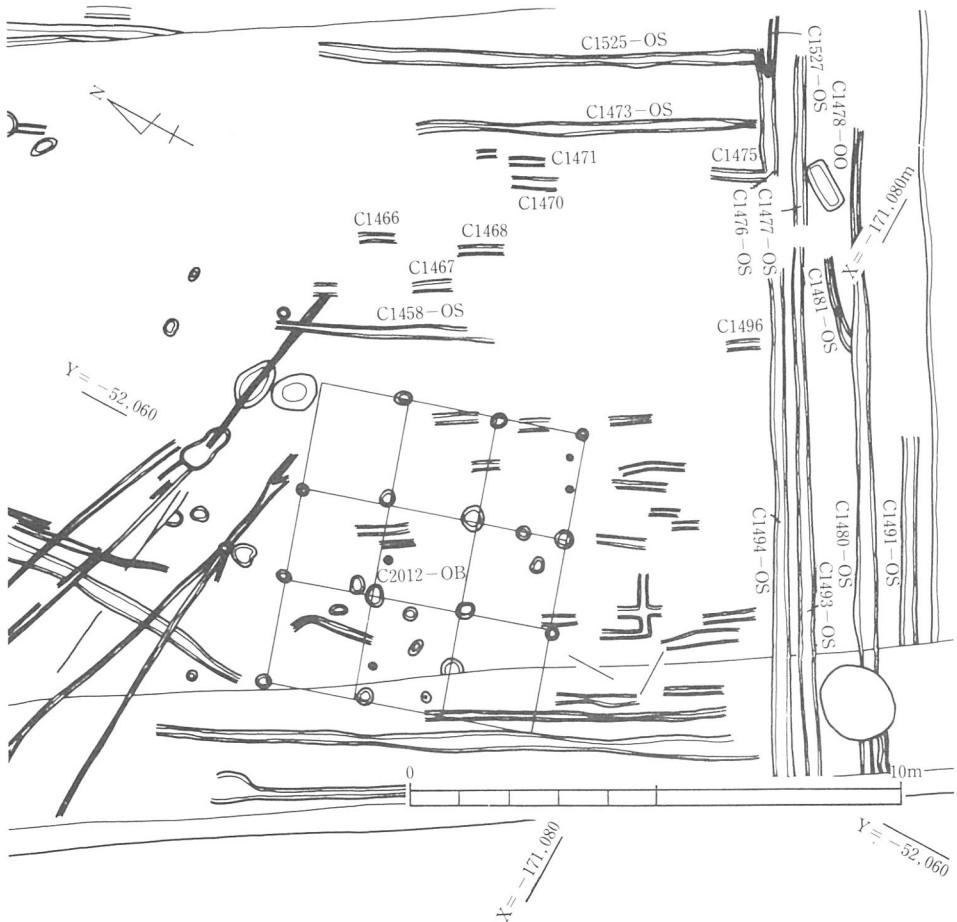
ら判断して、14～15世紀と推定される。

Cタイプは溝C1330-OSのすぐ西側において検出した。C1303～1315-OS等がある。出土遺物から、13世紀代に比定される。

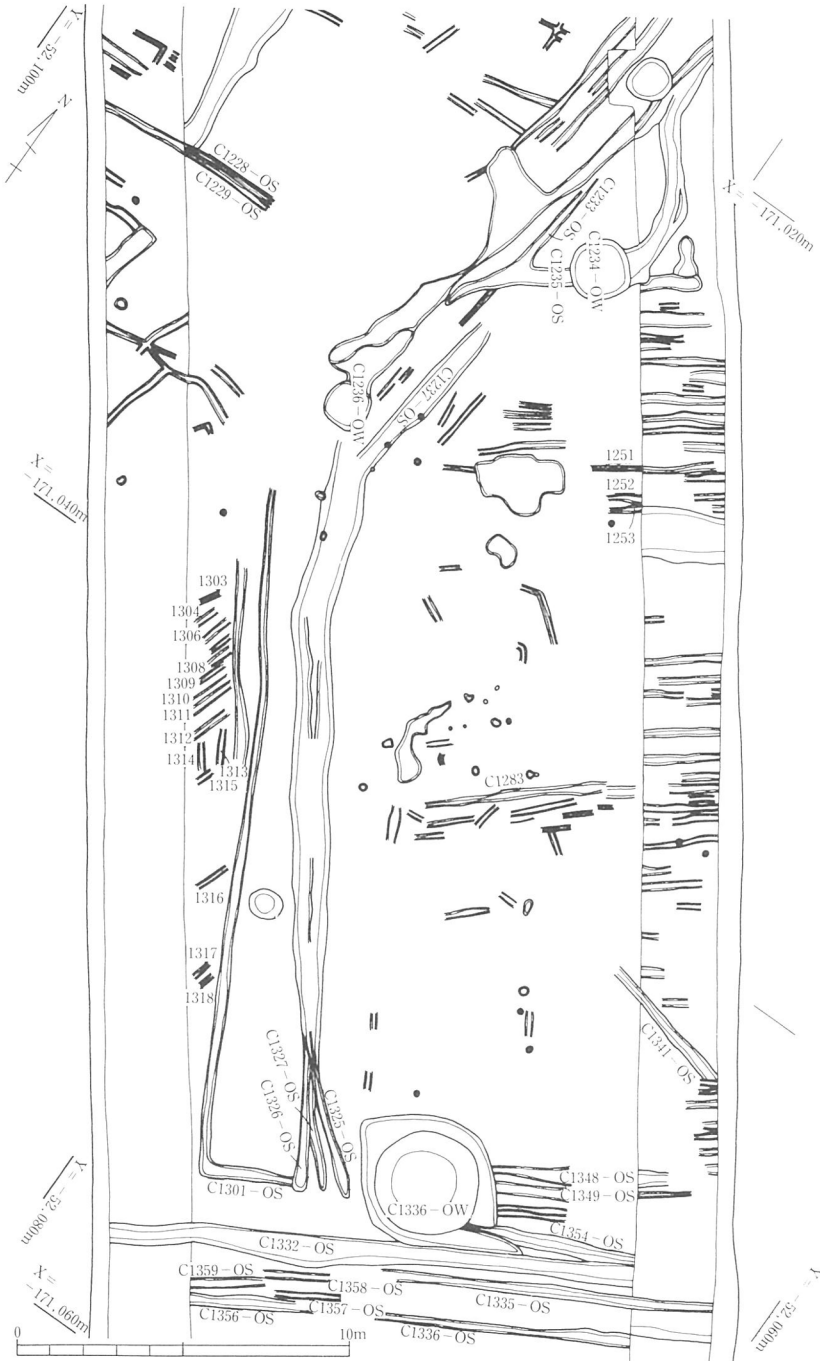
Dタイプは2区南半部の東寄りにて検出された。C1242～1246・1251～1253・1283・1285-OS等がある。C1283-OSより鎌倉時代中頃の瓦器碗が出土している。

EタイプはC1232・1233・1321～1326・1566・1654～1659-OS等がある。重複関係から何回にもわたって掘り直しが認められた。C1325～1327-OSは、14世紀代の青磁碗が出土している溝C1330-OSに切られているため、時期がやや後出することは明らかである。なお、その性格はDタイプの区画溝と思われる。

これらの小溝はタイプごとに一定の広がりをもって分布しており、現在の段および畦畔



第300図 鎌倉～室町時代小溝平面図(1) (1/150)



第301図 鎌倉～室町時代小溝平面図(2) (1/200)

の方向を規定している。DタイプはEタイプの東側に、Cタイプは西側に、Bタイプは南側に、Aタイプは西側に限定され、分布している。

〔土器〕(第302図、図版130)

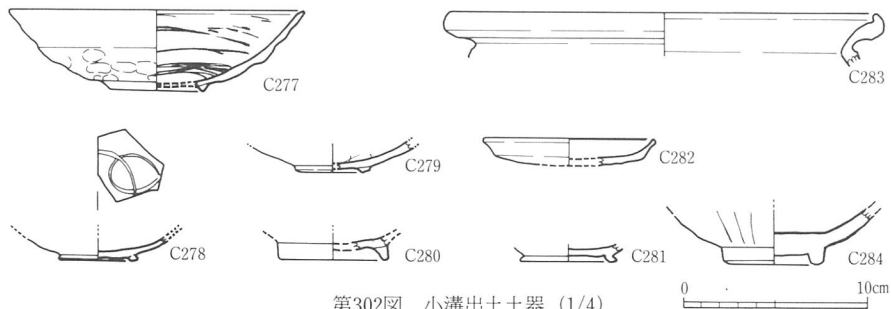
大半は小破片であり、図示しうる資料はわずかである。

瓦器碗 (C277~281) (C277) は口径16.1cm、器高4.3cm、底径5.2cmをはかる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は指頭圧痕調整。内面に幅1.6mmのヘラミガキを横方向にほどこしている。色調はN5/0灰色。2区のDタイプの小溝C1283-OS出土。

(C278) は区画溝C1332-OS出土。底径4.2cmをはかる。口縁部から体部の大半を失う。底部内面に螺旋状のミガキ調整を加えている。他に、C1332-OSより、黒色土器A類碗・B類碗、土師器小皿・羽釜 (C363・364)、瓦器碗・皿、東播系練鉢、須恵器片等を得ている。(C279) は底径4.2cmをはかる。底部内面に斜格子状のミガキを施す。色調は7.5Y5/1灰色を呈する。C1228-OS出土。(C280) は底径6.0cmをはかり、安定した高台をもつ。表面磨滅のため調整は不明。色調はN4/0灰色を呈する。C1494-OS出土。先に触れたC1332-OSやC1491~1495・1480-OS同様に区画を示す溝と思われる。C1494-OSからは他に黒色土器A・B類碗、土師器小皿片等が出土している。図示したものは混入品である。(C281) は底径5.2cmをはかる。調整は表面磨滅のため不明。色調はN3/0暗灰色を呈す。C1480-OS出土。

土師器小皿 (C282) 口径9.2cmをはかる。比較的平坦な底部から屈曲し、外反して短く開く口縁部を有する。端部は丸くおさめている。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデ調整。色調は10YR7/6明黄褐色を呈す。2区北端に位置するC899-OS出土。他に、瓦器碗、陶器体部 (C369) 等が出土している。

土師器羽釜 (C283) 口径23.2cmをはかる。口縁部は低く外反し、端部を内側に折り曲げている。色調は2.5Y8/4淡黄色。6区第ⅢA c層上面にて検出されたC205-OS出土。



第302図 小溝出土土器 (1/4)

青磁椀 (C284) 底径4.7cmをはかる。I-5-b類。畳付部は若干、釉が流れ付着している。釉は薄めに施釉される (0.5mm位)。色調は灰白色7/2。

第2項 包含層 (図版131・132・134・135・139)

基本土層第III層がこれに相当し、調査区の全域に広く堆積する。平安時代末から室町時代にかけて形成された土層で、サヌカイト片、須恵器、埴輪片、土師器、黒色土器、瓦器、青白磁、陶器、瓦等の各時代の遺物を包含している。層厚は平均50cmで、最も良好な6区では80cm、希薄なところで40cmをはかる。III A、III B、III C層に大別される。6区ではIII A層はさらに4つに分層される。上位よりA a層 (2.5Y6/8明黄褐色混砂-マンガン斑を顕著に含む)、A b層 (2.5Y6/8明黄褐色混砂土+10Y7/1灰白色砂質土)、A c層 (10YR 5/8黄褐色混砂シルト+5Y6/1灰色砂質シルト)、A d層 (10YR5/8黄褐色混砂シルト)である。

なお、A a層とA b層、A c層とA d層は厚さ約1cmの鉄分沈着層によって明確に分層されていた。III A a・A c層上面にて、畦畔と耕作に伴う南北走および東西走する小溝を検出した。III A a・A b層は包含される遺物から14世紀末～15世紀前半頃に比定される。III A c・A d層は14世紀中～末。

III B層は、4区と5区においてa・bの2層に分けられる。5区のIII B b層の上面で2つの畦畔とそれに伴う杭跡を検出している。包含される土器、特に瓦器椀の形態的特徴から、時期は13～14世紀に比定される。

III C層は3～6区にて堆積している。色調は黄褐色を呈するが、5～6区ではシルト質粘土、3区では砂質シルトと、地区によって質をいくぶん異にする。層厚は6区でやや厚く25cm、他は10～15cmをはかる。包含される遺物から12～13世紀に比定される。南へいくほど厚さは減ずる。 (宮崎)

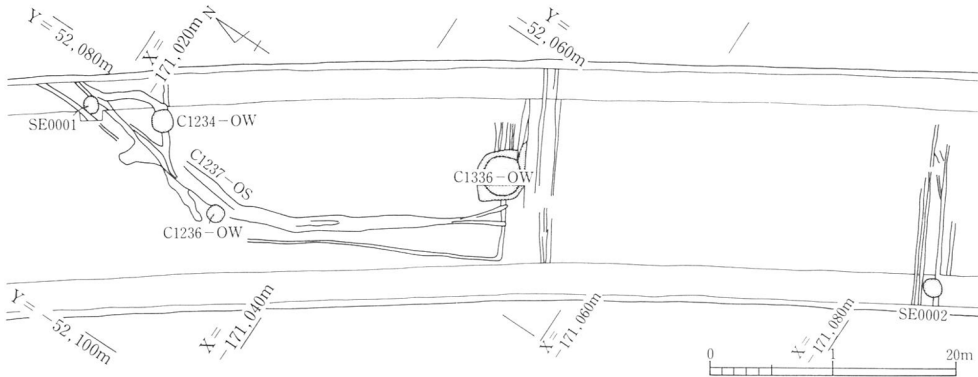
第6節 江戸時代以降

検出した遺構は、井戸5基、溝、畦畔等である。溝および畦畔は、現在の地割りにのっている (第303図、図版83)。

井戸

C1234-OW (第304図、図版133)

2区の中央東寄りにおいて検出した。C1235-OSを切り込んで掘削している。径1.65×1.50mの円形素掘り井戸である。深さは1.5m以上で、それ以下の調査は壁面崩壊の恐れが



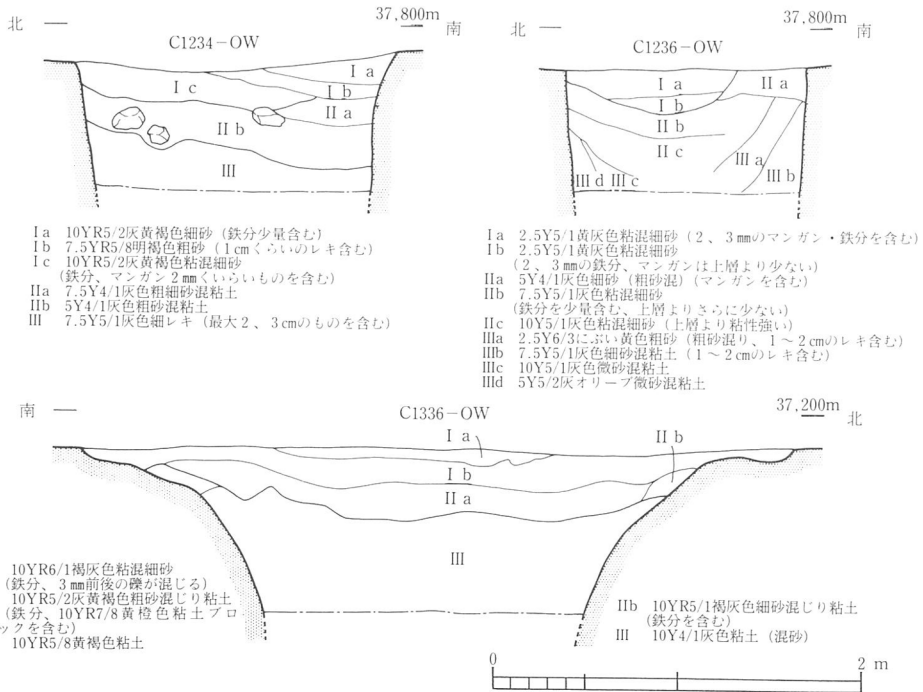
第303図 C2・3区の江戸時代以降の遺構平面図 (1/600)

あったため中止している。

井戸内の埋土は大きく3つに分けられる。遺物は主に (II) 層から、人頭大の石とともに染め付け等の陶磁器類、巴文軒丸瓦片1点を含む瓦等が出土している (図版133下)。

C1236-OW (第304図)

2区の中央東寄りにおいて検出した。径1.3mをはかる円形素掘り井戸である。C1234-



- I a 10YR5/2灰黄褐色細砂 (鉄分少量含む)
- I b 7.5YR5/8明褐色粗砂 (1cmくらいのレキ含む)
- I c 10YR5/2灰黄褐色粘混細砂 (鉄分、マンガン2mmくらいものを含む)
- II a 7.5Y4/1灰色粗細砂混粘土
- II b 5Y4/1灰色粗砂混粘土
- III 7.5Y5/1灰色細レキ (最大2、3cmのものを含む)

- I a 2.5Y5/1黄灰色粘混細砂 (2、3mmのマンガン・鉄分を含む)
- I b 2.5Y5/1黄灰色粘混細砂 (2、3mmの鉄分、マンガンは上層より少ない)
- II a 5Y4/1灰色細砂 (粗砂混) (マンガンを含む)
- II b 7.5Y5/1灰色粘混細砂 (鉄分を少量含む、上層よりさらに少ない)
- II c 10Y5/1灰色粘混細砂 (上層より粘性強い)
- III a 2.5Y6/3にぶい黄色粗砂 (粗砂混り、1~2cmのレキ含む)
- III b 7.5Y5/1灰色細砂混粘土 (1~2cmのレキ含む)
- III c 10Y5/1灰色微砂混粘土
- III d 5Y5/2灰オリブ微砂混粘土

- I a 10YR6/1褐灰色粘混細砂 (鉄分、3mm前後の礫が混じる)
- I b 10YR5/2灰黄褐色粗砂混じり粘土 (鉄分、10YR7/8黄橙色粘土ブロックを含む)
- II a 10YR5/8黄褐色粘土

- II b 10YR5/1褐灰色細砂混じり粘土 (鉄分を含む)
- III 10Y4/1灰色粘土 (混砂)

第304図 C1234・C1236・C1336-OW 断面図 (1/40)

OW同様、現在の地表面にも影響を与えている段および畦畔に沿って掘削されていることから、飲料水のために掘られた井戸ではなく、農作用に利用された井戸と思われる。調査は壁面崩壊する恐れがあったため、マイナス1.5mまでで終えている。

井戸内の埋土は大きく3つに分けられる。遺物は主に（II）層～（III）層中から、わずかに陶磁器類を得ている（図版133-C408・409）。

C1336-OW（図版133）

2区の南端で検出された。中世の溝C1348～1353-OSおよび区画溝C1354-OSを切り込んで掘削されている。

規模は径4.1×4.2mで、ほぼ円形を呈する素掘り井戸である。断面形態は検出面から45cmまでは緩やかな浅鉢状を呈し、それ以下は径を狭め、直線気味に下がっている。調査は壁面崩壊の恐れがあったため1.8m下げた段階で中止している。

井戸内の埋土は大きく3つに分けられる。遺物は各層より出土している。染め付けを含む陶磁器類や巴文軒丸瓦、平瓦等を得ている（図版133）。

溝

C1237-OS（第303図、図版83・130）

2区の南半部において、現在の段に沿うような形で検出された。幅0.7m、深さ5.7m以上をはかる。（宮崎）

第7節 小 結

先土器時代～縄紋時代 調査成果のひとつに第IV層黄色粘土にて石器の包含を確認しえた点をあげることができる。先の横長剝片やチップは掘立柱建物柱穴載断時に原位置が確認されたもので、これにより洪積段丘上黄色粘土の形成が先土器時代～縄紋時代にまで及んでいることが判明した。（小山田）

古墳時代前期 遺構には溝2条と土壙墓群とがあり、土地利用の性格は自ずと限定される。溝は3区南端と土壙墓群中の2箇所のみられる。3区南端の溝C1830は自然流路ではあるが、最終段階は人為的埋積によるもので、肩部より布留式土器が一括廃棄された状態で検出されている。土器群は壺、高杯、甕で構成され、小若江北式に併行するものといえる。溝C300は重複関係から土壙墓群に後出することは明らかではあるが、土壙墓の希薄な箇所を走行することから土壙墓の存在を意識して掘削されたものと推測される。土壙墓は5区を中心に総数約165基検出されている。さらに調査区外へ拡大することが予測される

が、概ね等高線に沿う形で南北方向に分布するものといえる。現状では南北60m以上、東西35m以上を測る。土壙墓は埋土によりⅠ～Ⅳ群に類型化でき、類型単位に規模や分布状況に一定のまとまりが読みとれる。中世期の削平により遺存状態は不良だが、埋納土器が原位置を保つ例もみられる。土壙墓には相互の重複関係がみられるが、出土土器よりその時間幅は小さく小若江北式を前後するものと推測される。上記より当該期は墓域として利用されていたことは明らかである。土壙墓群の北東約400mには時期的に併行する摩湯山古墳が存在するが、今回の調査より前方後円墳と土壙墓群という両極に位置する墓制が一定空間にて共存することが知られたわけである。 (小山田)

古墳時代後期 遺構は調査区全域に分布するがその密度は低く、溝と落ち込み状の土坑という限定されたものである。遺構内出土遺物は少量で、それによると遺構の上限は6世紀代と判断される。遺構の希薄さに整合して中世期包含層中の当該期の遺物量も少量で、遺物量とともに竪穴式住居等の検出されているB地区と比較すると対称的な様相が認められる。溝は7条検出されているが、調査区外へ伸びたり古代・中世の削平を受けるなど全容に関しては不明な点が多い。しかし、2区北端の溝C875の検討は不十分ではあるがそれ以外の溝については、①人為的掘削による②人為的埋積による機能停止③遺物が僅少である④等高線に平行する、という共通点と時期的に併行することから南接するA地区の溝と一連のもの、灌漑用水路と理解される。落ち込み状土坑は4区にみられ、小規模な低湿地状態の一端が窺えるものである。従って、以上の状況は集落遺構の欠落する空白地帯がA地区より本調査区まで続くことを物語るものといえる。 (小山田)

奈良時代～平安時代 2区から3区にかけて古代集落が展開する。遺構には、掘立柱建物15棟、掘立柱塀、溝、土坑等があり、奈良時代中頃から平安時代後期まで続く。遺物は日用雑器類が主である。時期別には建物を中心にⅠ期～Ⅴ期に概括される。(第306図、第6表)

Ⅰ期 掘立柱建物3棟(C2001・C2002・C2003)、土坑1基(C915)、溝3条(C892・C936・C937)で構成され、主に2区北半に位置する。8世紀中頃～後半で、平城京Ⅲ～Ⅴ式に属する。建物C2002と建物C2003はL字型の配置関係にあり、前者の東桁行柱列と後者の南妻柱列が一直線上に揃っている。建物C2001は推定5間×2間の東西棟で、上記2棟と比較すると間切り柱を有し床面積が広いなど異なる様相をみせている。

Ⅱ期 遺構は主に2区南半に位置し、掘立柱建物2棟(C2008・C2011)と土坑3基(C1046・C1040・C935)で構成される。9世紀前半～中頃にあたり、概ね平城京Ⅵ～Ⅶ式に

属する。ただし、土坑C1040は平城京 SD650A 併行まで下がるかもしれない。建物は2棟一組で、建物C2008の東桁行柱列が建物C2011の中軸に揃うように計画されている。基本的には東西棟と南北棟のL字型の配置関係にある。両者を比較すると、建物C2008が3間×2間の身舎のみであるのに対して、建物C2008は3間×2間の身舎に西面の廂を有するもので構造上格差がみられ、床面積にいたってはその差が明瞭に現われている。土坑C935は重複関係より建物C2008に先行することは明らかであるが、形状が不定形なことから建物C2008に先行する整地跡と推測される。

Ⅲ期 2区中央に位置し、掘立柱建物が計7棟（C2004・C2005・C2006・C2007・C2009・C2010・C2016）検出されている。遺物のみを取り上げると、Ⅰ期土坑C915にも混入資料として散見される。建物群は出土遺物より9世紀後半～10世紀前半の時間幅に収まるが、重複関係と棟方向および軒の出の検討によりⅢa期（C2040・C2010）・Ⅲb期（C2007・C2005）・Ⅲc期（C2009・C2016）・Ⅲx期（C2006）の4小期に分けられる。

Ⅲa期 建物C2010と建物C2004の2棟である。建物C2004は溝C915とC1047を介してⅢb期建物C2005に先行することが明らかになっている。建物は2棟一組で、建物C2004東妻柱列と建物C2010西桁行柱列が一直線上に揃うように計画されている。東西棟・南北棟のL字型の配置構成である。両者はともに3間×2間の身舎に間切り柱を有する構造で床面積も一致し、共通した規格で建てられている。

Ⅲb期 建物C2007と建物C2005の2棟である。東西方向に併列する配置関係にあり、北辺には掘立柱塀（柵の可能性もある）がみられる。ともに東西棟であるが、建物C2007が5間×2間で総柱かあるいは束柱を有する構造であるのに対して、建物C2005は3間×2間とひとまわり規模が小さくなっている。

Ⅲc期 建物C2009と建物C2016の2棟である。Ⅲ期での位置付けを示す直接的な事実関係はないが、当小期は①重複関係からⅢa・Ⅲb期の両期には併存しない②下記のとおり構造的にみてⅢa・Ⅲb期より新しい要素を含む、の2点より設定されたものである。建物C2009は3間×2間の身舎に西面する幅広の廂を有し北妻側に付属施設（入口?）を備える構造である。建物C2016は建物C2009の柱筋に揃えて建てられた小規模建物で、2間×1間を測る。配置からみて建物C2009に付属するものと推測される。

Ⅲx期 建物C2006が該当する。本建物は、①Ⅲa期建物C2004と重複する②Ⅲb期建物C2007およびC2005とは軒が1mと近接し同時併存は困難である③Ⅲc期建物C2009とは棟方向にずれがみられる、という状況にあり、従って変遷過程での当小期の位置付けは

不明とせざるをえなかった。建物C2006は5間×1間の長方形を呈することから、性格的に単独存在は考え難く、調査外に対となる主屋の存在が予測される。

Ⅳ期 3区北半に位置する建物C2012のみである。10世紀前半～中頃に当る。3間×3間の総柱構造である。構造上性格を倉と推定すると、調査外西方に主屋の存在が予測される。

Ⅴ期 掘立柱建物3棟(C2012・C2013・C2015)、土坑5基(C1016・C1478・C1721・C1565・C1642・C1016)と溝C1637・1638・SD0177などがあり、主に3区南半に集中している。時期は11世紀前半と推定される。建物群は配置関係よりみて一定の屋敷地を形成していると推測される。現況では、雨落ち溝C1638が明瞭に残り5間×2間の身舎に北面と西面の廂を有する建物C2015が主屋で、4間×1間の建物C2013と1間×1間の建物C2014が付属屋であるとの構成がみられる。調査面積が狭長なため規模の内容には不明な点が多いが、土坑C1565・C1642・C1678や溝SD0177などは屋敷地と同一空間に属することから屋敷地に含まれる遺構とみなせる。溝SD0177は大阪府教育委員会による試掘調査では溝と理解されていたが、今回の調査により塵芥土坑であることが明らかになった。問題になるのは、黒色土器碗や土師器皿などが一括状態で検出された土坑C1642である。これらの土器に関しては、先の遺構記述のとおり土坑廃絶に伴い投棄されたものとの理解が可能である。しかし一方では出土状態には一括状態の土器を埋葬に伴う副葬品とみなす余地があり、ここでは土壌墓の可能性も残しておきたい。

以上のように奈良時代から平安時代に至る遺構群を5期にわたる集落変遷の結果と理解した。調査区が狭長なため言及できる範囲もおのずと限られてはくるが、以下変遷を通じて看取される諸点を建物を中心として列記しまとめとする。

<分布> 遺構分布の中心は時期が下るに従い2区北半から3区南半へ移動しており、時期別に限定される傾向にある。立地からみると2区と3区は北へ傾く洪積段丘の緩傾斜面にあたるが、先の移動は時期とともに集落の立地が順次高くなっていることを示している。

<建物構成> 2様相に大別できる。①Ⅰ期～Ⅲa期。2棟ないし3棟一組の構成と推測され、L字形もしくは平行に配置されている。建物に伴う宅地割施設としてはⅢa期に掘立柱塀がみられる程度であるが、計画性のある建物配置からみて一定の土地区画に則した形態とみなせる。棟方向はⅡ期で一度乱れるが真北を原則としている。各時期の建物間には構造上Ⅱ期のように等質な場合と、Ⅰ期・Ⅲa期のように間仕切り柱や廂の有無それ



第305図 山直条里地割と建物の位置関係図

に柱間寸法に一定の格差がみられる場合とがある。②III c～V期。様相Iと同様に2棟ないし3棟で構成されると推測されるが、構造・規模より主屋に対する付属屋として明確に区別できる建物が含まれている。2間×1間（建物C2016）、3間×3間総柱（建物C2012）、4間×1間（建物C2013）、1間×1間（建物C2014）などで、いずれも居住用としては不自然な形態をとっている。棟方向は漸移的に西へ振れており、V期の屋敷地では周辺に現存する条里地割に一致するようになる。

＜建物配置と土地区割＞（第305図） 上記より建物構成には一定の原則性があり、10世紀前半を境として二様相に分けられることが明らかになった。そこで建物配置と宅地を含めた土地区割との係わりが問題になるが、ここでは調査区周辺に遺存する条里地割を復元した第305図をもとに二つの問題点を指摘しておく。まず条里地割の復元であるが、牛滝川流域には方位の異なる三種類の条里地割がみられ平野部には和泉郡を広域に覆う主条里が、山直谷には仮称山直小規模条里（以下山直条里と略）と仮称積川小規模条里が展開している。^{（註3）} 本調査区は上記のうち山直条里に含まれ、坪界Aが山直条里の北辺にあたと推測される。^{（註4）} 概略数値では方位は真北より西へ約22°振れ、一坪の一边は108m～110mを計測している。ところで後ほど問題となるところであるが、整然とした区画の中に一部条里の乱れている箇所があることに気づく。里道Bと畦畔Eに挟まれた東西約100mの範囲で、ほぼ真北方向に一致する畦畔C・D・Eがみられることから先の山直条里とは異なる土地区割の存在が予測される範囲である。そこで、この復元に建物の配置関係および位置を重ねてみると、ひとつは先述のとおりV期にみられる屋敷地が遺存する条里地割に方位的に整合することから屋敷地の配置が条里地割にそくして計画的になされていた可能性が指摘できる点である。調査結果から屋敷地の範囲を知る手掛かりは得られていないが、復元した条里地割との位置関係から坪界Kが屋敷地の東辺になることはほぼ誤りないと推測される。次の中世期の項で述べられているように、現存する条里区割に整合する地下遺構の存在は12世紀末～13世紀代に至ってはじめて普遍的に知られるようになる。従って条里地割が一定の形態をなすまでの時間幅を考慮すると、先の屋敷地の形成期が山直条里にみられる大規模開発の開始期にあたる可能性がでてきたわけである。

もうひとつは、I期からIII b期にかけての真北を原則とする建物群が検出された範囲（2区）と先にみた条里地割の乱れている箇所が位置的に整合することから、条里地割の乱れを先の建物群に係わる土地区画を踏襲した結果生じたものとみなせないか、という問題である。調査成果より条里地割の乱れは、重複する区画溝の検出より13世紀まで遡ること

が明らかになっている。従って当時を復元すると、この範囲には山直条里の原則から逸脱した土地区割がみられることになり、位置関係および方位の整合性から時期的に先行する建物群との関係が指摘されるわけである。調査成果にはこの両者の関係を直接的に証明する資料はみられないが、循環論的にはなるものの提示した状況自体先に想定した建物群を含む一定範囲の土地区画の存在を裏付けることになり、当地に山直条里に先行して奈良時代から平安時代中頃にかけて真北を地割原則とする土地区割が存在したことを傍証するものといえよう。

<建物群の動向> 不十分な検討ではあるが以上のことから、建物配置と土地区画の係わりが示す変遷には10世紀前半～11世紀前半にひとつの画期をみい出すことができる。すなわち、8世紀後半に出現した一定の土地区画とそれに伴う計画的な集落構成が10世紀前半を境に崩れ始め11世紀前半には広範囲な条里地割に整合する屋敷地が出現することである。屋敷地の出現を条里地割との整合から条里地割に示される大規模土地開発に係わる有力農民層の輩出された結果を把えると、先の画期は律令的村落から中世的村落への変貌を意味するものと理解できる。 (小山田)

鎌倉時代～室町時代 今回の調査によって検出された遺構は、掘立柱建物、柱穴、土坑、轍、耕作に伴う踏み込み跡、小溝・畦畔・区画溝等である。

掘立柱建物(C3001-OB)は2区の北端で検出され、梁間2間分を確認している。当該期の遺構は、周辺ではほぼ南北東西方向に走る小溝のみで、他に建物に関する遺構は検出することが出来なかった。

轍は3区にて数条検出された。埋土中より瓦器椀片が出土し、その形態的特徴から12世紀末～13世紀前半と考えられる。

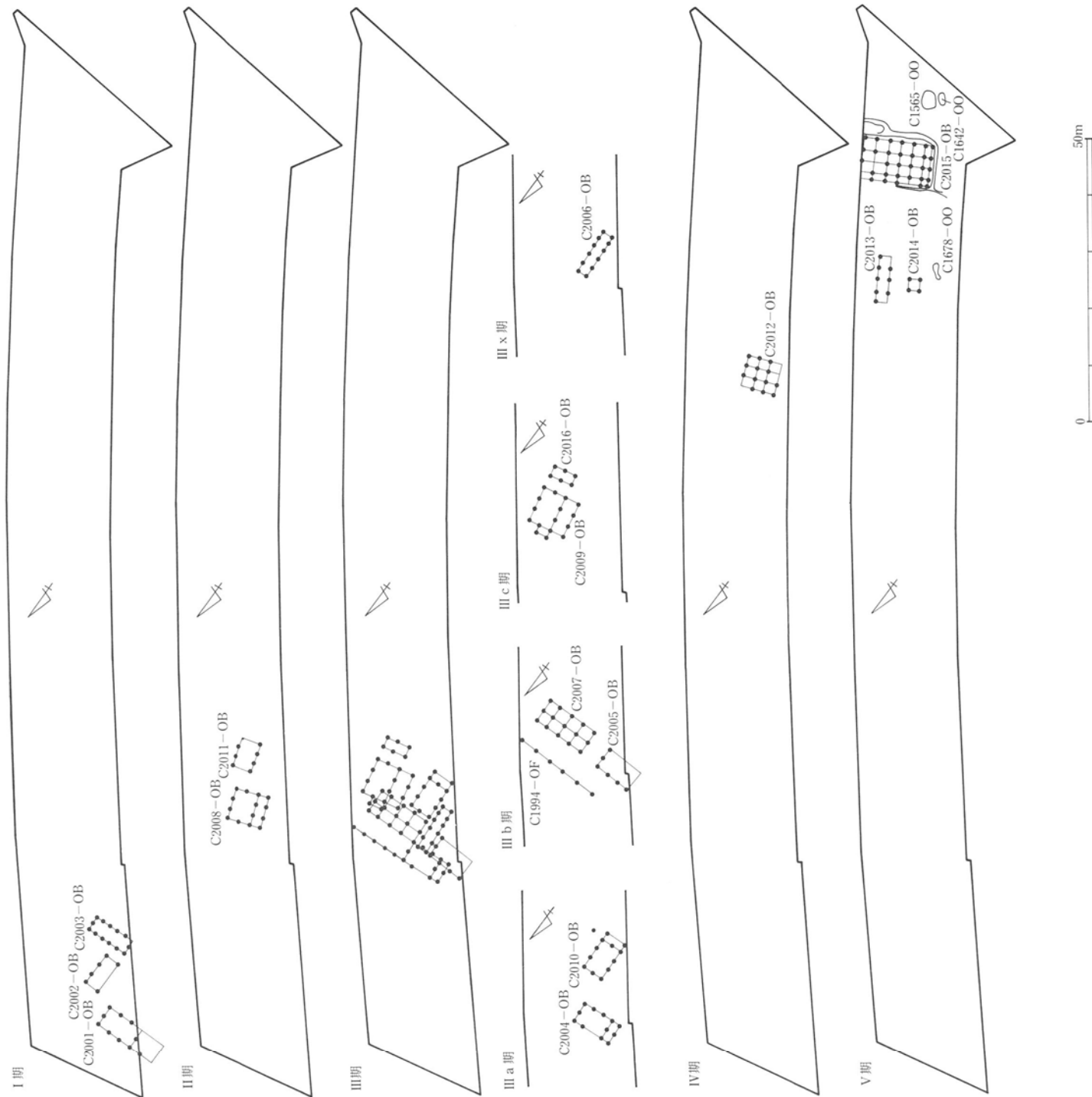
小溝は調査区の全域にわたって検出された。主軸の方位から、5つに分類される。これらの小溝は現地表面に残る地割りを規定し、埋土中より出土している遺物から13世紀に比定され、現在の地割りは遅くとも13世紀まで遡ることが明らかとなった。 (宮崎)

江戸時代以降 調査区の全域にわたって耕作にかかわる小溝や畦畔、井戸を検出した。畦畔は中世期の地割りをほぼそのまま利用したかたちで踏襲している。井戸は5基、いずれも円形素掘りのもので、深さは2m以上をはかる。 (宮崎)

- 註1. 中村浩『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯、大阪府教育委員会 1980 以下須恵器の型式は上記に拠る。
2. 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』1976、同『平城宮発掘調査報告Ⅺ』1981、などに拠る。
3. 藤永正明「和泉郡の条里型地割に関する問題点」『大園遺跡発掘調査概要・Ⅶ』大阪府教育委員会 1982
4. 山直条里の地番は、本遺跡の南約600mに位置する二俣池周辺に残る坪名をもとに千鳥式で復元したものである。

第6表 C地区奈良・平安時代主要遺構時期別一覧

遺構	年代	8 C	9 C	10C	11C
建物2001-OB					
2002-OB					
2003-OB					
2008-OB					
2011-OB					
2004-OB					
2010-OB					
2005-OB					
2007-OB					
2009-OB					
2006-OB					
2012-OB					
2013-OB					
2014-OB					
2015-OB					
土坑 C 915-OO					
C1046-OO					
C 935-OO					
C1040-OO					
C1678-OO					
C1721-OO					
C1636-OO					
C1016-OO					
C1565-OO					
C1642-OO					
溝 C 892-OS					
C 936-OS					
C 937-OS					
SD0177					
C1637-OS					
C1638-OS					
C1639-OS					
C1640-OS					
C1641-OS					



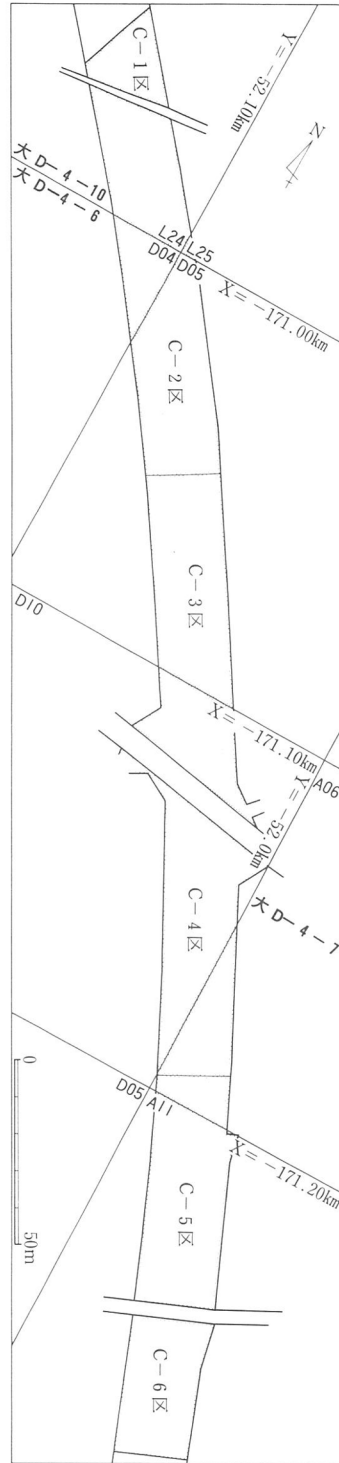
第306図 奈良・平安時代掘立柱建物変遷図 (1/1000)

第7表 C地区掘立柱建物一覧

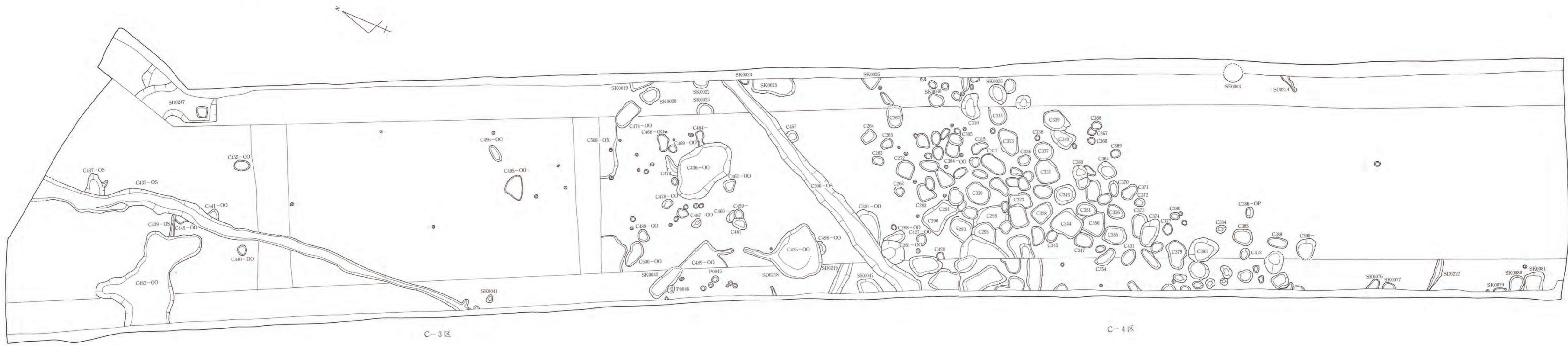
時期	地区	建物番号	規模	棟方向	廂	桁行全長	梁行全長	床面積	柱 穴	備 考
I	2	2001	以上 4×2 (5×2)	WE		以上 9.50m	3.82	36	方 0.6~0.7	間切り柱
I	2	2002	(3×2)	NS		(6.20)	(2.84)	18	方 0.34~0.7	
I	2	2003	5×2	WS		7.92	2.70	20	方 0.5~0.9	
II	2	2008	3×3	NS N-16°-W	W	5.71	6.55	37	方・略方 0.36~0.54	
II	2	2011	3×2	NS N-15.25° W		5.48	3.60	20	略方 0.35~0.39	
III a	2	2004	4×2	WE		7.74	3.84	30	略方 0.3~0.6	間切り柱
III a	2	2010	3×2	NS N-1°-W	(S)	7.48	4.03	30	円 0.32~0.47	(間切り柱)
III b	2	2005	(3×2)	WE		(6.7)	4.164	28	円 0.38~0.55	
III b	2	2007	4×2	WE	(E)	9.68	4.55	44	略方・円 0.30~0.54	(総柱)
III c	2	2009	3×3	NS N-9° W	W	6.56	6.95	46	略方・円 0.39~0.58	(入口)
III c	2	2016	2×1	N-10°-W WE		4.20	1.96	8	円 0.21~0.36	
III x	2	2006	5×1	N-1° W NS		8.58	2.1	18	円 0.18~0.36	
IV	3	2012	3×3	WE N-17°-W		6.00	5.40	32	円 0.2~0.45	総柱
V	3	2013	(4×1)	N-29°-W		6.12	(1.95)	(12)	略方・円 0.19~0.38	
V	3	2014	1×1	N-29.5°-W		—		5	円 0.21~0.46	
V	3	2015	6×4	WE N-115.6° W	N・W	12.25	7.52	92	円 0.16~0.49	(総柱)

地区別主要遺構

時代	地区	1	2	3	4	5	6
古墳時代前期				C1830-OS	C300-OS	土塚墓群	
古墳時代後期			OS-1711D	C1372-OS C1786-OS	C437-OS		C 386-OS
奈良時代		OS-937 OO-156 C 2003-OS C 892-OS C2002C	OS-937 OO-156 BO-2002C				
平安時代		BO-4004C OO-1040-OO OO-935 C 2008-OB C2010-OB C2016-OB	BO-1112C BO-2002C BO-2002C BO-5902C	C2012-OB C2014-OB C1565-OO C1678-OO C1638-OS			
鎌倉時代		SO-444 SO-944	SO-444 SO-944	C1483-OS C1492-OS C1493-OS C1494-OS C1495-OS		C 208-OS C 116-OX	
室町時代		AWO-4231D AWO-4231D AWO-4231D	SO-4231D				



第307図 C地区調査区割図と地区別主要遺構



第310图 C地区遺構図(3) (1/200)





$X = -171.260m$

$X = -171.280m$

第311図 C地区遺構図(4) (1/200)



第VIII章 考察

第1節 遺構・遺物の分析と検討

第1項 三田遺跡におけるプラント・オパール分析

宮崎大学 藤原宏志

最近、考古学的試掘調査の段階で土壌試料を採取しプラント・オパール分析を行うことにより埋蔵水田土層とその分布域を事前に探査する方法が多くの遺跡調査で採用されるようになった。住居址や墓址だけでなく生産址の発掘調査が行われるようになり、各時代の生産・社会に関する全体像が明らかになりつつある。

このような調査の結果、わが国における農耕の起源や伝播に関する従来の定説は大きく見直されなければならないとなっている。たとえば弥生時代に始まるとされていた水田稲作が縄紋時代晩期まで遡ることが明らかになったり、八世紀以降とされていた東北地方の水田稲作が弥生時代中期まで遡ることがわかったことはその一例であろう。

その他にも、水田区画や農具の普及など古代、先史時代農耕の姿が具体的な生産址の発掘調査により鮮明になってきている。

さらに、最近の調査の成果として、古代、先史時代だけでなく、これまで史学が対象としてきた歴史時代の遺構・遺物の考古学的調査が進み、より客観的データが蓄積されるようになったことは評価されるべきであろう。

1970年代の後半から、考古学と自然科学の共同研究が組織的に行われるようになり、新しい手法が開拓されつつある。プラント・オパール分析法も自然科学と考古学の共同研究の結果実用化された新しい分析法の一つである。

1. 遺跡の概況

三田遺跡は岸和田市三田町に所在する古墳時代～近世に至る遺跡である。遺跡は舌状に張り出した台地の縁辺部に位置している。

周辺には摩湯山古墳、馬子塚古墳、三田東山古墳など大小の古墳が散在し、相当な規模の集落とそれにとまなう生産址の存在が推定される地域である。

調査対象域は二つの舌状台地に挟まれた谷部を縦断する形になっており、古い時代から生産面として利用された可能性をうかがわせる立地状況である。

2. 試料および分析法 (付図4 参照)

分析用試料はB-1区北東部およびB-2区北西部で各一地点ずつ土層ごとに計20点を採取した。

試料は壁面土層へ100cc採土円筒を沿直方向に打ち込み採取されたものである。

プラント・オパール分析は定量分析法に準じて行った。同法の概要を第312図に示した。なお、同定量法の詳細については別報を参照されたい。

3. 分析結果および考察 (第10・54図土層断面図参照) 分析結果は第313図および第314図に示した。

(1) B-1地点では古墳時代(5層)より上層に連続してイネが出現する。プラント・オパールの密度およびその結果から推定されるイネ籾生産総量を勘案すると、この地点で古墳時代以降稲作が行われた可能性が極めて高いことがわかる。分析結果の数値から判断すると、乾田型の水田が営まれていた公算が大きい。

(2) B-2地点でも古墳時代(4e層)より上層ではイネが連続的に出現している。ただし、B-1地点と異なり、古墳時代の一時期(4e層)は湿った状態にあったと考えられ、この時期の稲作はむしろ湿田型の稲作を想定するほうが妥当であろう。

(3) ケタ(Bambusaceae)とヨシ(Phragmites)の消長はその地点の乾湿変化を示す指標となる。分析結果を見ると全体にタケ類が多く出現し、比較的乾燥した環境下で堆積が進行したものと推定される。しかし、B-1地点の2A層、B-2地点の4e層ではヨシの出現もみられ、これらの時期には比較的湿潤な環境であったことがうかがわれる。

(4) 発掘調査の結果、明瞭な水田遺構は検出されなかった。おそらく、水田遺構が後代の攪乱により破壊された結果であろうと思われる。

(5) 乾田型の水田稲作が行われたとすれば当然裏作の存在が考えられる。今回の分析では裏作の検証までには至らなかったが今後の課題として残したい。

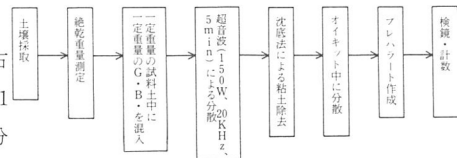
参考文献

1) 藤原宏志 1976 プラント・オパール分析の基礎的研究(1)-数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法-考古学と自然科学第9号15-29

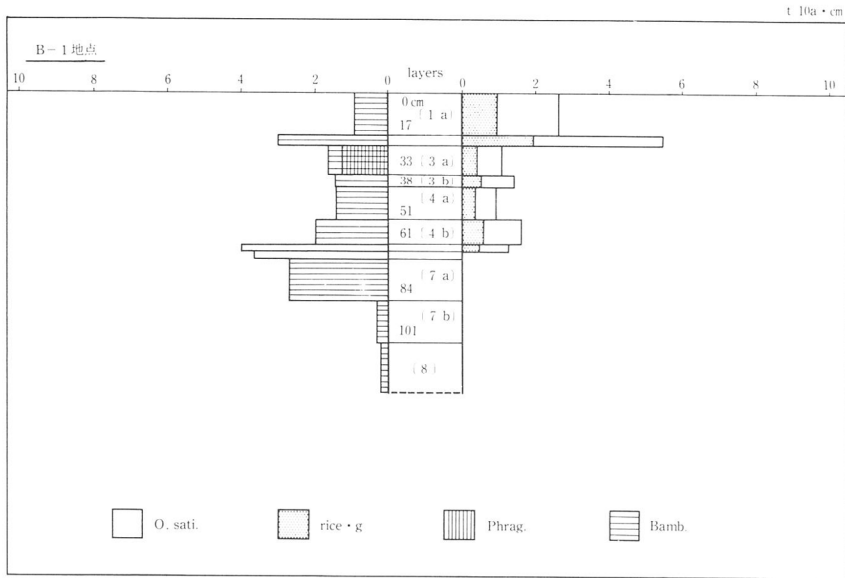
2) 藤原宏志 1976 プラント・オパール分析による古代栽培植物遺物の探索 考古学雑誌第62巻第2号54-61

3) 藤原宏志・佐々木章 1978 プラント・オパール分析法の基礎的研究(2)-イネ(Oryza)属植物における機動細胞珪酸体の形状-考古学と自然科学第11号9-20

4) 藤原宏志 1979 プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)-福岡・板付遺跡(夜白式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(O. sativa, L)生産総量の推定-考古学と自然科学第12集29-42

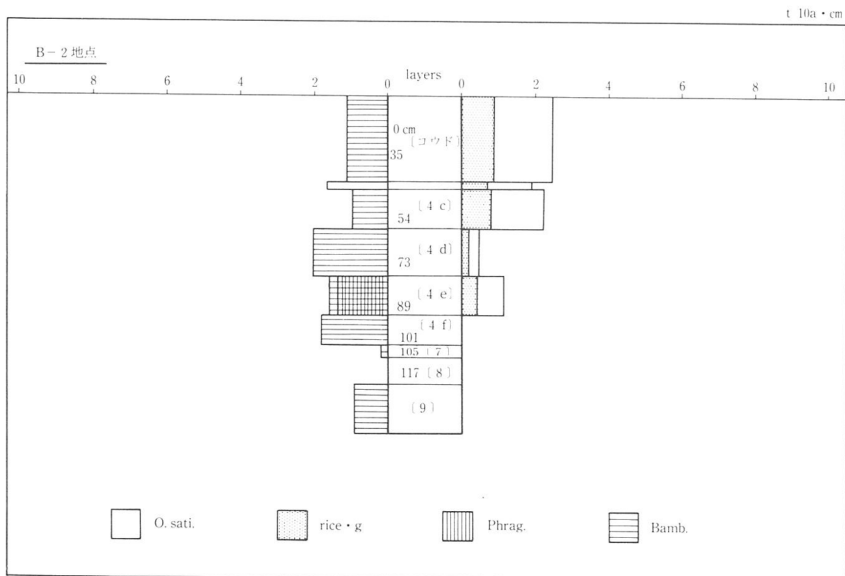


第312図 ガラスビーズ法によるプラント・オパール定量分析概要



オオサカ ミタノシジ '86 01 30

第313図 定量分析法分析結果(1)



オオサカ ミタ '86 01 30

第314図 定量分析法分析結果(2)

I はじめに

1 目的

調査の期間中に川崎地質株式会社に委託して花粉ならびに珪藻分析を実施した。

本分析は、発掘調査中にトレンチ側壁より採取した土層の試料を分析して、各時代における遺跡およびその周辺の植生や水域の状況等の古環境を推定・復原するために行ったものである。

花粉・珪藻分析を行った試料は、各々40試料である。このうち、化石の含有量が極少ないか、ほとんど無いものが、花粉分析で8試料、珪藻で32試料あった。このように、化石が極少ない理由としては、陸成の堆積物もしくは土壌であるため、水域起源の珪藻化石はもともと含まれていないこと、花粉化石は水成堆積物のように濃集していないか分解されているためと考えられる。

2 分析位置および対象

分析試料の採取地点は、A地区においてA(1)～A(3)の3地点、B地区においてB(1)～B(4)の4地点、合計7地点である。試料採取地点の位置については付図4を参照されたい。

7地点の名称と発掘調査地区ならびに地図メッシュ番号の関係は以下の通りである。

- ① A(1)地点、A3地区（東壁）、大D-4-7 A16PT
- ② A(2)地点、A3地区（遺構）、大D-4-7 A16WW
- ③ A(3)地点、A3地区（南壁）、大D-4-7 A21BV
- ④ B(1)地点、B1地区（東壁）、大D-4-7 E02BJ
- ⑤ B(2)地点、B2地区（西壁）、大D-4-7 E02OK
- ⑥ B(3)地点、B3地区（東壁）、大D-4-7 E07AS
- ⑦ B(4)地点、B3地区（東壁）、大D-4-7 E07HU

土層断面図と採取試料番号を第315図に示した。

Ⅱ 花粉分析

1 試 料

試料はA(1)地点が5点、A(2)地点が2点、A(3)地点が2点、B(1)地点が10点、B(2)地点が6点、B(3)地点が7点、B(4)地点が8点である。

各地点の土質、試料採取深度は第315図の通りである。

2 分析方法

花粉分析の方法は第316図の分析フローの順に行った。

分析処理の手順のうち、5ミクロン振動マイクロフィルターを使用することによって、粒径処理を確実にした。

抽出した花粉化石はグリセリンゼリーと混合してスライドガラス上に滴下し、カバーガラスをかけて封入してプレパラートとした。各試料につき2～3枚のプレパラートを作成する。プレパラートを顕微鏡(400～1000倍率)で観察し、メカニカルステジによる帯分析で通常100個から250個の検定、計数を行った。

3 分析結果

各地点の分析結果は第317～323図に示した。

(1) 検出された花粉化石の種類

延べ32試料から検出された花粉化石の種類は、第7表に示す45種類である。これらのうち、全試料を通じて花粉組成を特徴づける種類は以下のものである。

① 卓越樹木花粉

アカガシ亜属、コナラ亜属、ニヨウマツ亜属、スギ属、ツガ属

② 卓越草本花粉

イネ科

③ 栽培種花粉

イネ科 (>40)、ソバ属

イネ科 (>40) はイネ科のうち、花粉粒径が 40μ 以上のものを示しており、イネ属 (*Oryza*) を含んでいると考えられるが、中村 (1974) に指摘されているようにそのすべてがイネ属であるとは断定出来ない。

(2) 花粉組成の変遷傾向と分帯

土層の区分との対応から、花粉組成の変遷傾向が連続的に検討できるのは、B(1)とB(2)の2地点である。これら2地点の分析結果を比較対照しながら、花粉組成による層序的グルーピング、つまり花粉分帯を行った結果は以下のようである。

① 地山層

砂質、礫質堆積物で風化も進んでいるため、花粉化石が検出されず、不明である。

② ベース層ならびに、古墳包含層：I帯

B(1)地点の試料No.8, 9 およびB(4)地点の試料No.6, 7, 8の5試料は化石の含有量が少ないために、データの信頼性はやや低いが、ツガ属、コナラ亜属、コウヤマキ属などの自然植生要素が主体を占め、イネ科(>40)も出現する。これをI帯とする。

③ 中世床土～中世含層(下)：II帯

ツガ属、モミ属、コウヤマキ属等の自然植生要素が上位の層より多く、逆にイネ科ならびにイネ科(>40)は少ないのでこれをII帯とする。

④ 中世包含層(上)～近世耕作土：III帯

イネ科(>40)の出現率が高く、ソバ属が出る。自然植生要素はII帯より少ないのでこれをIII帯とする。

⑤ 現世床土・耕作土：IV帯

ニョウマツ亜属、スギ属の人為要素が大半を占め、自然植生要素は極少なくなり、イネ科ならびにイネ科(>40)と田畔の草本が出現するのでこれをIV帯とする。

(3) 各地点の花粉分帯と特徴

上記のI帯～IV帯の花粉分帯を基本とし、各分析地点における花粉組成がいずれの分帯に対応するかをまとめたものが第324図である。

以下に、各地点における花粉分帯と組成の特徴を列記する。

① B(1)地点

・I帯(試料No.8～9)

検出花粉数量が少ないので、データの信頼性は低い。コウヤマキ属、ツガ属、コナラ亜属が卓越し、アカガシ亜属の出現率は上位の帯にくらべて低い。イネ科(>40)は出現するが、出現率は上位の帯にくらべて低い。

・II帯(試料No.6～7)

ツガ属、アカガシ亜属、ニヨウマツ亜属、イネ科が卓越し、コウヤマキ属、コナラ亜属などを伴う。イヌマキ属が出現する。コウヤマキ属、イネ科は増加の傾向、コナラ亜属は減少の傾向を示す。

・Ⅲ帯（試料No.3～5）

アカガシ亜属、ニヨウマツ亜属、イネ科が卓越し、コナラ亜属などを伴う。ヤマモモ属が出現する。No.3 にハンノキ属が出現する。

・Ⅳ属（試料No.1～2）

ニヨウマツ亜属、スギ属、イネ科が卓越し、アカザ科などを伴う。

② B(2)地点

・Ⅱ帯（試料No.5～6）

コウヤマキ属、アカガシ亜属、コナラ亜属、イネ科が卓越し、モミ属、ツカ属、スギ属などを伴う。B I (E)地点に比べると、ヨモギ属、タンポポ属、タデ科などの出現率が高い。

・Ⅲ帯（試料No.2～4）

アカガシ亜属、コナラ亜属、コウヤマキ属、イネ科が卓越し、スギ属などを伴う。イヌマキ属、ブナ属が出現する。No.2 にタンポポ属等が出現する点はB I (E)地点と類似する。

・Ⅳ帯（試料No.1）

ニヨウマツ亜属、スギ属が卓越する。

③ A(1)地点

・Ⅱ帯（試料No.4～5）

ツガ属、アカガシ亜属、コナラ亜属、イネ科が卓越し、スギ属、コウヤマキ属などを伴う。

・Ⅲ帯（試料No.1～3）

アカガシ亜属、コナラ亜属、コウヤマキ属、イネ科が卓越し、ツガ属、スギ属などを伴う。B(1)地点に比べると、ツガ属、コウヤマキ属の出現率が高い。No.1 でタンポポ属などの出現率が高くなるのは、B I (E)地点のNo.3 の特徴に類似するが、ニヨウマツ亜属の出現率が高くなりかけている点はⅢ帯とⅣ帯の中間的特徴を示す。

④ A(2)地点

・Ⅰ帯（試料No.1～2）

花粉構成の特徴は、試料によって異なり、No.2 ではアカガシ亜属、スギ属、No.1 ではコウヤマキ属が高率出現する。本2 試料は、スギ属もしくはコウヤマキ属が高率出現する点

で、B(1)地点などのIII帯とは組成上の特徴が異なる。

⑤ A(3)地点

- ・ III帯（試料No.1～2）

アカガシ亜属、イネ科が卓越し、ニヨウマツ亜属、スギ属、コナラ亜属などを伴う。No.1にソバ属が出現する。

⑥ B(3)地点

- ・ IV帯（試料No.1～3）

ニヨウマツ亜属、イネ科が卓越し、スギ属などを伴う。

⑦ B(4)地点

- ・ I帯（試料No.6～8）

検出花粉数量が少ないので、データの信頼性は低い。ツガ属、コナラ亜属が卓越し、コウヤマキ属、スギ属を伴う。アカガシ亜属の出現率は上位の帯にくらべて低い。

- ・ IV帯（試料No.1～2）

ニヨウマツ亜属、スギ属、イネ科が卓越し、ヒノキ科などを伴う。

III 珪藻分析

1 試料

試料はA(1)地点が5点、A(2)地点が2点、A(3)地点が2点、B(1)地点が10点、B(2)地点が6点、B(3)地点が7点、B(4)地点が8点である。

各地点の土質、試料採取深度は第315図の通りである。

2 分析方法

珪藻分析の方法は第11図の分析フローの順に行った。

分析処理の手順のうち、5ミクロン振動マイクロフィルターを使用することによって、粒径処理を確実にした。

抽出した珪藻化石はブルーツェダックスで封入しプレパラートとした。各試料につき2～3枚のプレパラートを作成する。プレパラートを顕微鏡（400～1000倍率）で観察し、メカニカルステージによる帯分析で通常100個から250個の検定、計数を行った。

3 分析結果

各地点の分析結果は第326～329図に示した。

(1) 検出された珪藻化石の種類

延べ8試料から検出された珪藻化石の種類は、第9表に示す53種類である。これらのうち、珪藻組成を特徴づける種類は以下のものである。

① 卓越種類

Pinnularia 属	P. subcapitata
	P. viridis
	P. gibba
Eunotia 属	E. monodon
Hantzshia 属	H. amphioxys
Cymbella 属	C. aspera

これらはいずれも淡水域の底性もしくは付着性の種類である。

② 淡水域以外の種類

海水域もしくは汽水域の種類として以下のようなものが検出されたが、いずれも出現個体数は少ない。

Cyclotella striata
C. stylorum
Coscinodiscus oculusiridis
Nitzshia cocconeiformis
N. acuminata

(2) 各地点の珪藻化石の特徴

① A(1)地点

試料No.5はPinnularia属が卓越し、Eunotia属、Stauroneis属、Cymbella属などを伴う。前2属は酸性の淡水域の種類で降雨の影響が強い浅い水域の群集と考えられる。

② B(1)地点

試料No.1～2はPinnularia属が卓越し、Eunotia属、Cymbella属などを伴う。Navicula属も出現する点から河川域の群集と考えられる。No.2に出現するCyclotella属、Nitzshia属、Coscinodiscus属は海水～汽水域の種類であるが、個体数は少なく、他の水域もしくは堆積物から二次的に移動混入したものと考えられる。

③ B(2)地点

試料No.5～6は *Pinnularia* 属が卓越し、*Cymbella* 属、*Stauroneis* 属などを伴う。AIII (16PT) 地点の場合と同じく、降雨の影響が強い浅い水域の群集と考えられるが、河川水の流れ込みもあったと考えられる。

④ B(3)地点

試料No.1は *Pinnularia* 属が卓越する。降雨の影響が強い浅い水域の群集と考えられる。

IV 分析結果の考察

1 土層区分と花粉分帯の関係

土層区分と、花粉分帯（I～IV）の関係は、B(1)地点を基準とすると第10表のようである。この中で、古墳時代はI帯、現代はIV帯となるが、II帯とIII帯は中世と近世の対応とはならず、花粉帯の境界は中世の第4 b層と第4 a層の間となる。

花粉帯は、遺跡およびその周辺後背地の植生状況を反映したものであるから、同一の花粉帯であると判断した土層（試料）はほぼ同時期の堆積物と考えることができ、遺跡土層の区分・対比に花粉データを応用することができる。

以上の考え方に基づいて、B(1)地点を基準として設定した花粉帯の対比をしたものが第324図の花粉帯対比図である。これによると、B地区においては、B(2)地点でII～IV帯、B(3)地点でIV帯、B(4)地点でI帯とIV帯に対応する花粉構成の土層が見出せる。A地区においては、A(1)地点でII～IV帯、A(3)地点でIII帯に対応するものがある。遺構の堆積物を対象としたA(2)地点の花粉構成は、I帯に相当するものと判断される。

このような花粉帯による土層の区分と対比が妥当なものであるかどうかは今後の課題であるが、遺物による土層区分が未確定の場合には、花粉帯を土層区分の目安とすることができる。

2 植生ならびに堆積環境の変遷

土層区分と花粉帯の対応関係をもとに、各花粉帯の特徴と推定される植生状況ならびに堆積環境を示したものが第11表である。このうち、地山部（第8層）からは花粉化石が検出されなかったため状況は不明である。また、古墳時代（第6～7層）は花粉化石の検出

数量が少ないのでデータの信頼性が低い。

① 樹木植生の変遷

樹木花粉種類は遺跡近傍の植生だけでなく、後背流域の丘陵地や山地から供給されたものも混在している。その根拠としては、本来植生帯域を異にする暖温帯広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の要素と冷温帯広葉樹林や針葉樹林の要素が単一の試料から同時に検出される事実が挙げられる。

従って検出された花粉化石群集は、周辺低地の植生と遠方の丘陵・山地の植生に分離して植生を推定する必要がある。

花粉帯のⅠ帯からⅣ帯にかけては、以下のような樹林植生の変遷が推定される。

- ・Ⅰ帯：低地部はアベマキ・クヌギ林やコナラ林などの二次林が分布し、カシ林の分布量は少ない。丘陵・山地はモミ・ツガ・コウヤマキ・スギなどの温帯針葉樹林が分布。

- ・Ⅱ帯～Ⅲ帯：低地部はカシ林で自然植生の度合いが高い。丘陵山地はモミ・ツガ・コウヤマキなどの温帯針葉樹林が分布。

- ・Ⅳ帯：自然植生要素は分布が縮小し、アカマツ・クロマツ林の二次林が発達。

② 草本植生ならびに栽培植物の変遷

樹林花粉数の合計を基数とした草本花粉の比率はⅠ帯からⅢ帯にかけて増加し、Ⅳ帯でやや減少する傾向を示す。草本花粉は樹林花粉にくらべると遠方からの移動混入は少ないと考えられるので、この傾向はそのまま遺跡周辺での草地の状況を反映しているものと判断される。

イネ科以外の草本花粉種類は水田の田畔ないし乾燥裸地に一般的なものが多く、特に顕著な変遷は認められない。

イネ科のうち、イネ属を含む粒径40ミクロン以上の花粉はⅠ帯で少なく、Ⅱ帯で増加、Ⅲ帯で最も多くなり、Ⅳ帯ではやや減少する。

この傾向からすると、Ⅰ帯～Ⅳ帯にかけて、遺跡地もしくはその近傍で稲作が行われていたと考えられ、その規模（面積・密度）と現地性の度合いはⅢ帯が最も程度が大きい。

また、明らかに栽培植物であるソバはⅡ帯の上半部とⅣ帯に出現し、Ⅲ帯での出現率が高い。

③ コウヤマキについて

コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata*) は中世代白亜紀（1億4000万年～6400万年前）以来の古い起源をもつ植物である。現在近畿地方では紀伊半島山岳部の大台ヶ原山系など

ごく限られた地域に分布する。しかし、大阪湾沿岸の沖積層や遺跡の花粉分析調査によると、歴史時代のごく新しい時期までコウヤマキ花粉は検出されている。今回の分析結果によると、コウヤマキは花粉帯のIII帯つまり近世まで出現し、IV帯（現代）に至ってツガなどと同じくほとんど姿を消す。これらのことから以下の点が考察される。

コウヤマキの分布縮小は気候環境などの自然条件ではなく、人為的な森林破壊もしくは選択的伐採が原因である可能性がある。

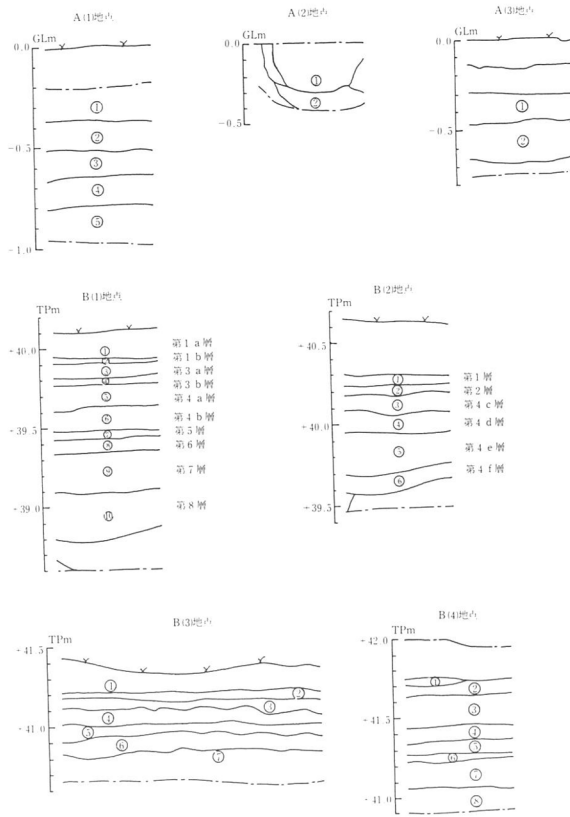
コウヤマキの分布縮小の時期は三田遺跡では近世の後半と推定される。

コウヤマキの自然植生下における植物社会学的位置付けについては現在の分布が限られているために充分明らかではないが、その出現・衰退傾向からすると、ツガ・モミなどと同様に温帯針葉樹林（いわゆるモミ・ツガ林）の構成要素と類似もしくは同一の位置付けが出来るのではないかと思われる。

④ 堆積環境

珪藻分析は化石が検出された試料が8試料と限定されているために、詳細な堆積環境を追跡するに至っていない。また、分析対象の試料が純粋な水域堆積物ではなく、二次堆積物もしくは人為作用を受けた堆積物であるために、検出された珪藻化石群集がどの段階に生成埋積したものであるのかには問題が残る。特に、花粉帯のIV帯に相当する試料から検出された海水域の種類は、河川後背流域に分布する大阪層群の海成層からの二次化石である可能性が高く、現在の遺跡の標高から考えて当時海水の影響がおよんだとは考えにくい。

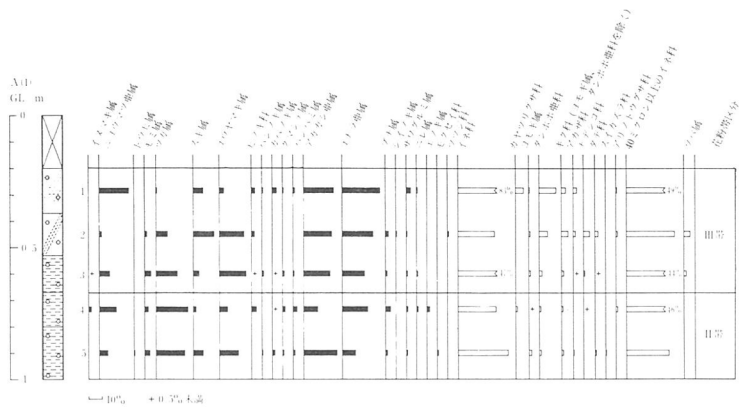
花粉帯のII帯とIV帯に相当する土層の珪藻化石群集はいずれも酸性の小規模（水深・面積）な水域のものが主体であって、降雨の影響を受けやすい「水たまり」的な環境が想定される。このことは、花粉化石群集から推定される水田耕作地ならびにその周辺の草地の植生環境と矛盾しないものであって、水田、水路、小池などの堆積環境を示すものではないかと類推される。



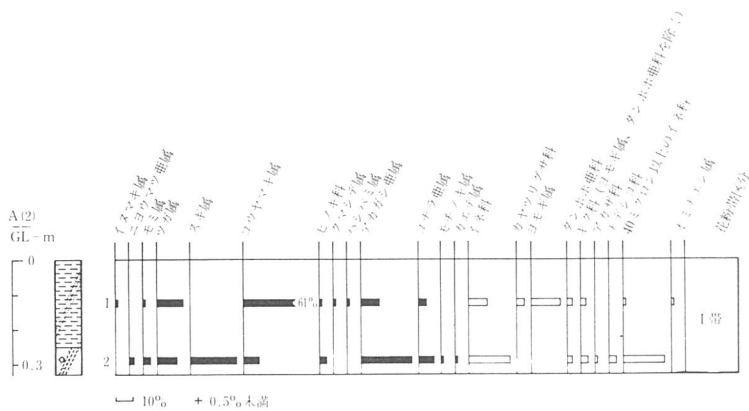
第315図 採取地点土層断面図・試料番号

処理手順	処理内容
対象試料採取	ローリング、露頭、地内より目的に応じた試料を採取する
試料選別	分析試料深度の間隔を設定する粘性土層で約0.1m間隔
基準量抽出	汚染部分を除去し、試料の粒度により100~200gを使用
消化分散処理	KOH 溶液等の分散剤により試料をホモジナイザーで消化・分散
細粒物質除去	5 μ 振動マイクロフィルターでコロイド分を分離・除去する
微化石濃縮	大型時計皿とアシレータにより指滴・覆判法で微化石を濃縮
無機水素酸処理	無機塩酸物質を溶解・除去する
重液分離	比重1.6~1.9の重液中で遠心分離し植物質を濃縮する
脱水処理	アセトリス処理により脱水とセルロース分を溶解・除去する
水洗・濃縮	遠心分離機により水洗し不溶性物質を溶解・除去する
標本作成	グリセリンゼリーによる包埋しプレハートを作成する
鑑定・計数	顕微鏡でプレハートを帯分析し花粉化石の種類と数を鑑定する
統計処理	鑑定結果を集計しコンピュータに入力、処理、図表を出力する
解 析	地層の識別、区分、対比についての概観を行い、植生、地層環境等の解析を行う

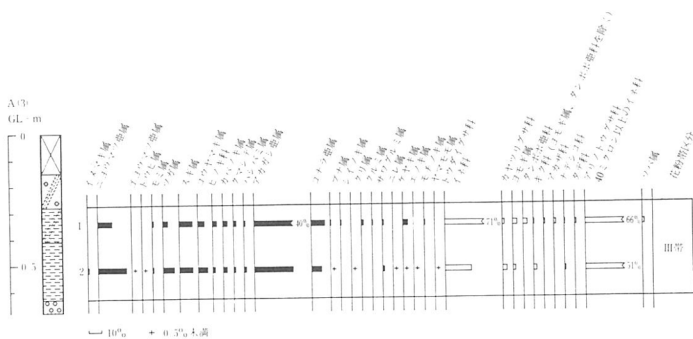
第316図 花粉分析処理フロー



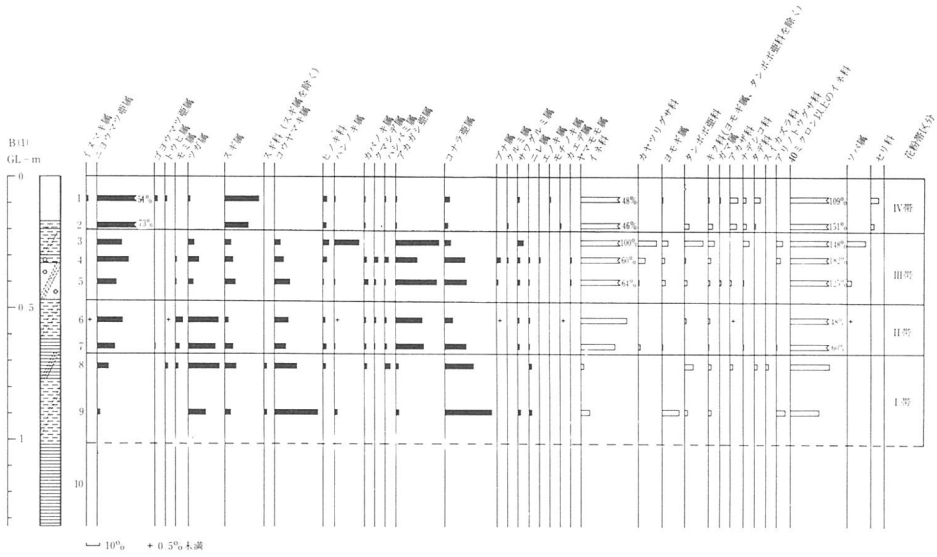
第317図 A16 PT 地点花粉分析結果



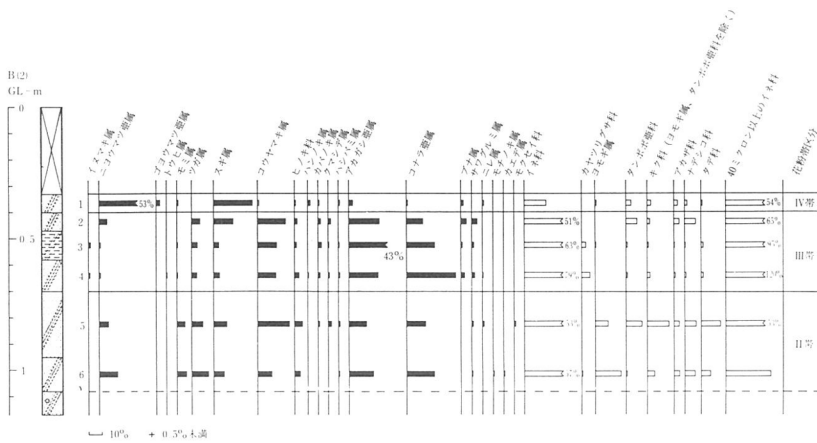
第318図 A16 WW (A 5-OS) 地点花粉分析結果



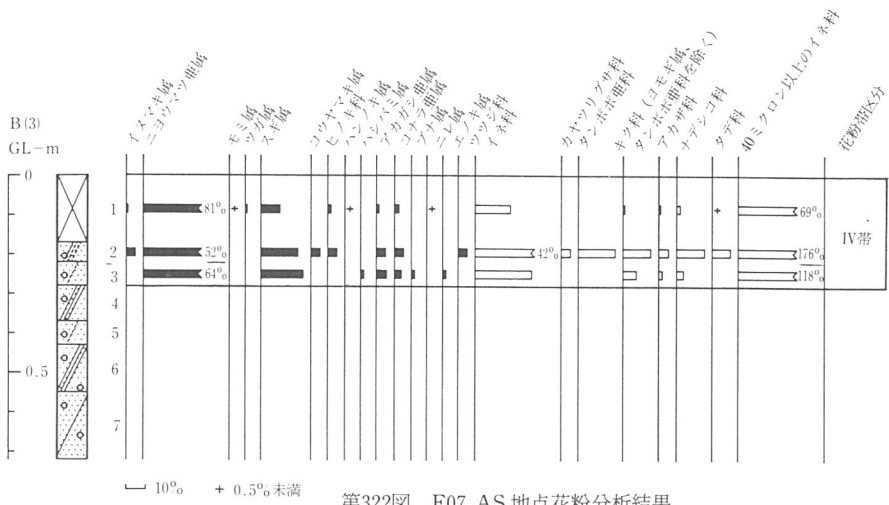
第319図 A21 BV 地点花粉分析結果



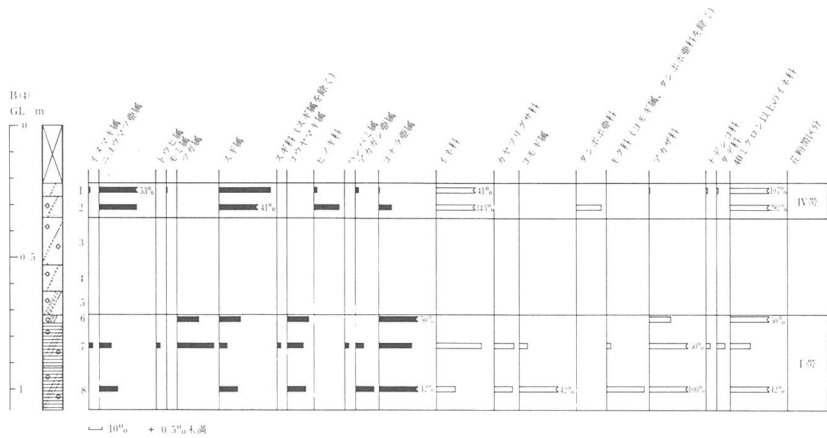
第320図 E02 BJ 地点花粉分析結果



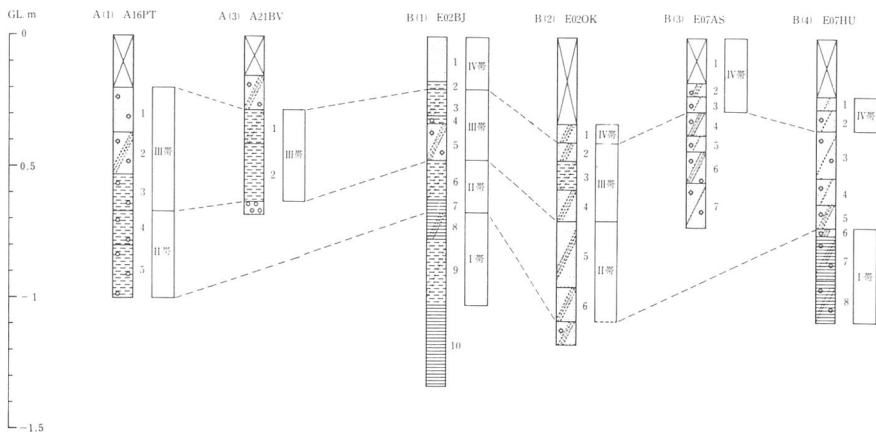
第321図 E02 OK 地点花粉分析結果



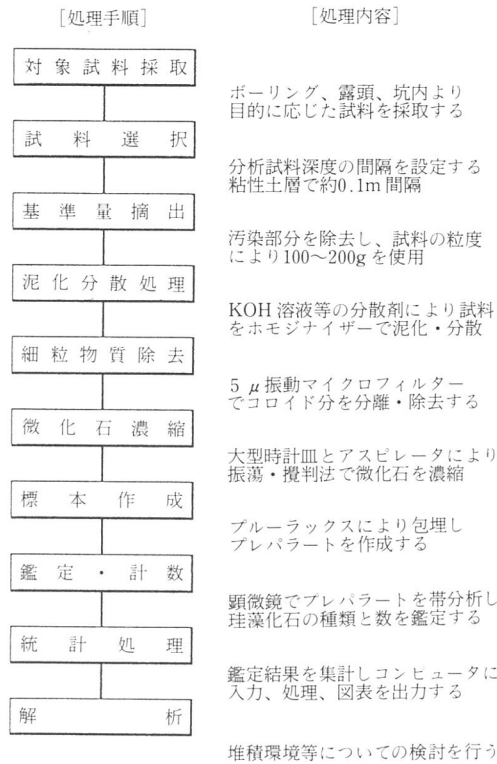
第322図 E07 AS 地点花粉分析結果



第323図 E07 HU 地点花粉分析結果

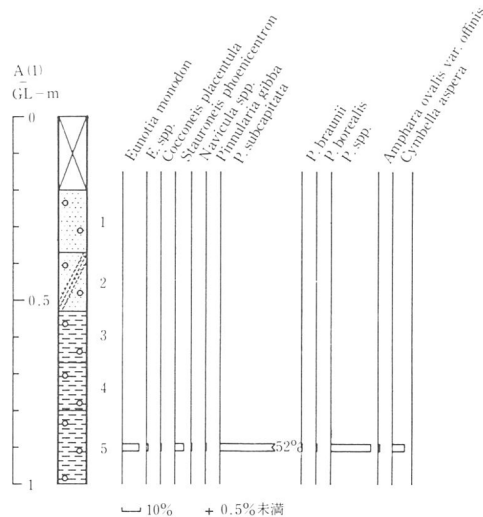


第324図 各地点花粉組成と花粉分帯の対比



珪藻分析処理フロー

第325図 珪藻分析処理フロー



第326図 A16 PT 地点珪藻分析結果

第8表 検出された花粉化石の種類一覧

[主要樹木花粉種類]		
1	Podocarpus	(イヌマキ属)
2	Diploxylon	(ニヨウマツ亜属)
3	Haploxylon	(ゴヨウマツ亜属)
4	Picea	(トウヒ属)
5	Abies	(モミ属)
6	Tsuga	(ツガ属)
8	Cryptomeria	(スギ属)
10	Sciadopitys	(コウヤマキ属)
11	CUPRESSACEAE	(ヒノキ科)
12	Alnus	(ハンノキ属)
13	Betula	(カバノキ属)
14	Carpinus	(クマシデ属)
15	Corylus	(ハシバミ属)
16	Cyclobalanopsis	(アカガシ亜属)
17	Quercus	(コナラ亜属)
18	Fagus	(ブナ属)
19	Castanopsis	(シノイキ属)
20	Castanea	(クリ属)
21	Juglans	(クルミ属)
22	Pterocarya	(サワグルミ属)
23	Ulmus	(ニレ属)
24	Zelkova	(ケヤキ属)
25	Celtis	(エノキ属)
[主要草本花粉種類]		
26	GRAMINEAE	(イネ科)
27	CYPERACEAE	(カヤツリグサ科)
28	Artemisia	(ヨモギ属)
29	Taraxacum	(タンポポ亜科)
30	COMPOSITAE	(キク科 *ヨモギ属, タンポポ亜科を除く)
[その他の樹木花粉種類]		
31	Ilex	(モチノキ属)
32	Acer	(カエデ属)
35	OLEACEAE	(モクセイ科)
36	Myrica	(ヤマモモ属)
38	EUPHORBIACEAE	(トウダイグサ科)
[その他の草本花粉種類]		
44	Typha	(ガマ属)
45	CHENOPODIACEAE	(アカザ科)
46	CARYOPHYLLACEAE	(ナデシコ科)
47	POLYGONACEAE	(タデ科)
49	CAPRIFOLIACEAE	(スイカズラ科)
52	HALORAGACEAE	(アリノトウグサ科)
53	ERICACEAE	(ツツジ科)
54	GRAMINEAE(>40)	(40ミクロン以上のイネ科)
55	Fagopyrum	(ソバ属)
56	UMBELLIFERAE	(セリ科)
57	Patrinia	(オミナエシ属)

第9表 検出された珪藻化石の種類一覧

1	<i>Melosira granulata</i>	(メロシラ属)
2	<i>Synedra ulna</i>	(ハリケイソウ属)
3	<i>Meridion circulare</i>	
4	<i>Eunotia pectinalis</i>	(イチモンジケイソウ属)
5	<i>E. lunaris</i>	(//)
6	<i>E. praeupta</i>	(//)
7	<i>E. monodon</i>	(//)
8	<i>E. SPP.</i>	(//)
9	<i>Achnanthes hungarica</i>	(ツメケイソウ属)
10	<i>Cocconeis placentula</i>	(コメツブケイソウ属)
11	<i>Stauroneis phoenicentron</i>	(ジウジケイソウ属)
12	<i>S. anceps</i>	(//)
13	<i>Gylosigma sp.</i>	(エスガタケイソウ属)
14	<i>Neidium iridis</i>	(ハスフネケイソウ属)
15	<i>Navicula disepkata</i>	(フネケイソウ属)
16	<i>N. placenta</i>	(//)
17	<i>N. spp.</i>	(//)
18	<i>Pinnularia viridis</i>	(ハネケイソウ属)
19	<i>P. gibba</i>	(//)
20	<i>P. subcapitata</i>	(//)
21	<i>P. brevistriata</i>	(//)
22	<i>P. braunii</i>	(//)
23	<i>P. mesolepta</i>	(//)
24	<i>P. sundaensis</i>	(//)
25	<i>P. borealis</i>	(//)
26	<i>P. spp.</i>	(//)
27	<i>Amphora ovalis var. affinis</i>	(オビドメケイソウ属)
28	<i>Cymbella minuta</i>	(クチビルケイソウ属)
29	<i>C. turugidula</i>	(//)
30	<i>C. turugidula var. nipponica</i>	(//)
31	<i>C. aspera</i>	(//)
32	<i>C. naviculiiformis</i>	(//)
33	<i>C. sinuata</i>	(//)
34	<i>Gomphonema turris</i>	(クサビケイソウ属)
35	<i>Hantzschia amphioxys</i>	(ユミケイソウ属)
36	<i>Surirella angustata</i>	(コバンケイソウ属)
37	<i>Nitzschia tryblionella var. vactriae</i>	(ニッチア属)
38	<i>N. acuminata</i>	(//)
39	<i>N. cocconeiformis</i>	(//)
40	<i>Cyclotella striata</i>	(ヒメマルケイソウ属)
41	<i>C. stylorum</i>	(//)
42	<i>Coscinodiscus oculusiridis</i>	(コアミケイソウ属)
43	<i>C. spp.</i>	(//)
44	<i>Achnanthes exigua</i>	(ツメケイソウ属)
45	<i>A. japonica</i>	(//)
46	<i>Cyclotella meneghiniana</i>	(ヒメマルケイソウ属)
47	<i>Diploneis finnica</i>	(コバンケイソウ属)
48	<i>Frustulia phomboides</i>	
49	<i>Gomphonema parvulum</i>	(クサビケイソウ属)
50	<i>Navicula cryptocephara</i>	(フネケイソウ属)
51	<i>Pinnularia biceps</i>	(ハネケイソウ属)
52	<i>P. karelica</i>	(//)
53	<i>Surirella robsuta</i>	(コバンケイソウ属)

時代	土層区分	土層名	花粉帯
現代	第1 a層	耕作土	IV
	第1 b層	床土	
近世	第3 a層	耕作土	III
	第3 b層	床土	
中世	第4 a層	包含層	II
	第4 b層	包含層	
	第5層	床土	
古墳	第6層	包含層	I
	第7層	基底層	
	第8層	地山	

第10表 土層区分と花粉分帯の関係

時代	土層区分 B(1)地点	土層名 B(1)地点	花粉帯	産 出 花 粉 の 特 徴				推 定 植 生	産出硅藻の種類	推 定 堆 積 環 境
				卓越樹木花粉	特徴樹木花粉	卓越草本花粉	特徴草本花粉			
現代	第1 a層	耕作土	IV	ニョウマツ亜属 スギ属	イヌマキ属	イネ科	アカサ科 セリ科	森林は人為的な破壊が進み二次林化スギは植林(?)田畔草本、水田耕作地	Pinnularia 属 Stauroneis 属 Pinnularia 属 Eunotia 属	酸~アルカリ性の水域 本来は河川域 酸性の水域 海水域種が混入
	第1 b層									
近世	第3 a層	耕作土	III	ツガ属 アカガシ亜属 コナラ亜属 ニョウマツ亜属	ツグ属 コウヤマキ属 ブナ属 ヤマモモ属	イネ科	イネ科(>40) ツバ属 カタクリゴケ科	周辺の森林はカシ林、ヤマモモ林。山地にはツガ・コウヤマキ林が分布 イネ科(>40)の出現率高く、水田耕作地ソバの栽培	珪藻はほとんど出現しない まれに Pinnularia 属 Cyclotella 属	乾燥陸域
	第3 b層									
中世	第4 a層	包含層	II	ツガ属 アカガシ亜属 コナラ亜属 ニョウマツ亜属	コウヤマキ属 モミ属	イネ科		周辺の森林はカシ林 山地にはモミ・ツガ・コウヤマキ林が分布 自然植生の割合高い 水田耕作地ソバ出現	Pinnularia 属 Cymbella 属	酸性の水域 二次堆積物で本来は 河川もしくはは湿原
	第4 b層									
古墳	第6層	包含層	I	ツガ属 コナラ亜属 コウヤマキ属	コウヤマキ属	ヨモギ属 アカサ科	イネ科(>40) キク科	花粉の含有量少ない クヌギ・スズナギ草、コナラ林などの二次林。カシ林は少ない。 山地にはツガ・コウヤマキ林が分布イネ栽培の可能性大	—	—
	第7層									
	第8層	地山		不明	—	—	—	—	—	—

第11表 三田遺跡の古植生・堆積環境

第3項 三田遺跡における竪穴住居とカマド構造の変遷（第330～332図）

1 はじめに

B地区においては、21棟の竪穴住居が確認された。その中でカマドが明瞭なものは、15棟である。時期的にも、5世紀末葉（I型式第5段階）から6世紀後葉（II型式第5段階）までの約100年間に亘るものであった。各竪穴住居の時期については、その出土遺物から見て大きく3時期にグルーピングが可能であるが、各時期ごとの同時存在の把握については課題を残している。

本項においては、各時期ごとのカマド構造の変遷を明らかにすると同時に、カマドの構造、位置、方向等を基にした竪穴住居のグルーピング作業のための試みを行いたい。

近畿地方の場合には造り付けカマドの遺存状態が悪く、さらにカマド本体が竪穴住居埋土と極めて類似しているために良好な検出例が少ない。このような状況にあって本遺跡の資料は、和泉地域の中でもまとまったものであり、この時期のカマド構造を知る貴重なデータである。それと同時に、この地域での一つの基準パターンを提示している。

2 竪穴住居とカマド構造の変遷

カマド構造が明瞭な竪穴住居で時期の判別可能なものを、前述した3時期に大別すると以下のとおりである。

1期（I型式第5段階～II型式第1段階）

B406(a)・472・473・474・478・800～802-OD。

2期（II型式第2段階～第3段階）

B479・480・798-OD。

3期（II型式第3段階～第4段階）

B469・507-OD。

これからさらにカマド構造が竪穴住居壁内で止まるものと、外側へ張り出すものによって2分される。それにカマドと竪穴住居の方位を加味したのが、第330図である。

1期では、両者のタイプが認められるが、2期は壁外へ張り出すタイプはなく、全て壁内で止まっている。3期の場合は確実なものは2棟のみであったが、2期とは逆に煙道部が外側へかなり延びるものだけである。

次にカマドの支脚について注目してみたい。この場合には、支脚を有するもの（A類）とそうでないもの（B類）の2つに大別される。支脚をもつものは、さらに自然石を利用

したもの（A₁類）と、有蓋高杯を転用したもの（A₂類）に分けられる。

1期においては、A、B類とも認められたが、2期ではA₂類は確認されなかった。また3期では、B類のみである。第331図に整理してみた。この図では、カマドの方位も判るよう提示している。この結果、本遺跡ではA₁類は2期まで、A₂類が1期で消滅するようである。B類は各期で認められたが、おそらく移動可能な土製支脚を使用している可能性が考えられる。また3期段階で支脚が認められない1つの理由として、土師器羽釜の出現が考えられる。残念ながら本遺跡においては、不明瞭であった。

カマドの構造について触れてみたい。第332図は各期を代表するカマドであり、それぞれ大形で良好な遺存状態のものを選んだ。

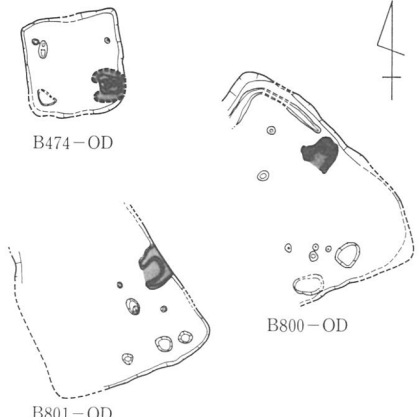
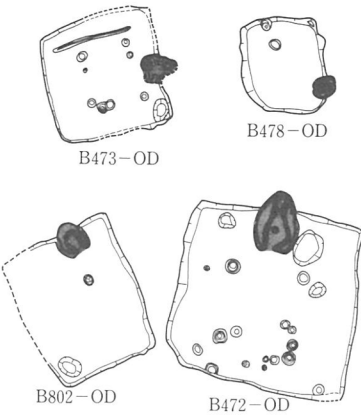
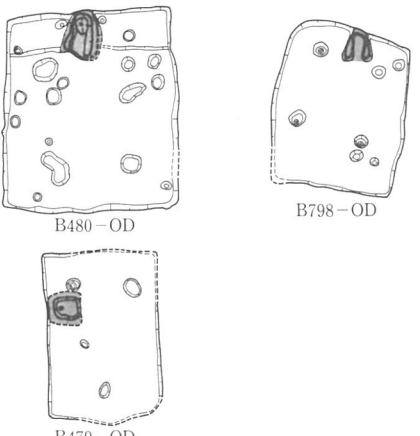

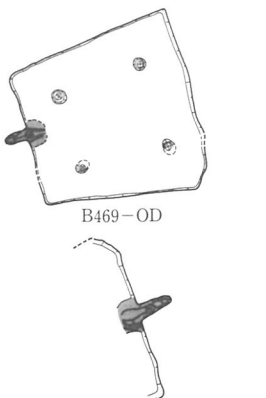
1期を代表するB472-ODの場合には、カマドの壁を作ってから住居床面の貼床を施していた。この場合は、竪穴住居掘削後すぐにカマド本体の構築を実施しているようである。

またカマドの底部分には床貼りを行い、その上に支脚として有蓋高杯を倒立させて据えていた。有蓋高杯には粘土が巻かれていたようであり、高杯を芯に使用した支脚と言える。

このような形態の支脚は、和泉地域北部を中心にいくつかの類例^(註1)が報告されており、「陶邑古窯址群」縁辺部の同時期集落においては、ある程度普遍的な存在のようにも考えられる。住居壁の外側への張り出しについては、おそらく煙出し用の煙突が取り付くための施設のようである。また、支脚の位置から見て、カマドの火口が住居の壁に接するものや、外側へ出てしまうものが認められた（B473・474・478-O B）。これらは、住居の平面プラン全体が外側へ広がっていたか、ないしはカマド部分のみ上屋が張り出す構造をもつと考えられる。

2期については、B480-ODが最も良好な資料であった。B472-ODと同様、カマド本体の底面には床貼りが認められる。この時期住居壁の外側への張り出しは認められなくなるが、おそらく煙突構造と上屋構造に変化が現れるためと考えられる。軽石によって埋没した6世紀後半の集落として著名な、群馬県子持村黒井峰遺跡^(註2)の場合には、垂直に延びる煙突が検出されている。2期のカマドについても、このような構造が想定される。類似した構造は、おそらく1期にも存在したと考えられる。

3期の場合は、B507-ODを代表として提示した。煙道部分が住居外側へかなり長く伸びており、カマド本体部の長さと同じないしそれ以上の状態である。煙道を長くすることにより、カマドの燃焼を良好にする機能があると思われる。支脚を伴っていないが、B469-ODの場合に杯蓋が置かれており、支脚の代用として使われた可能性もある。1、2期と

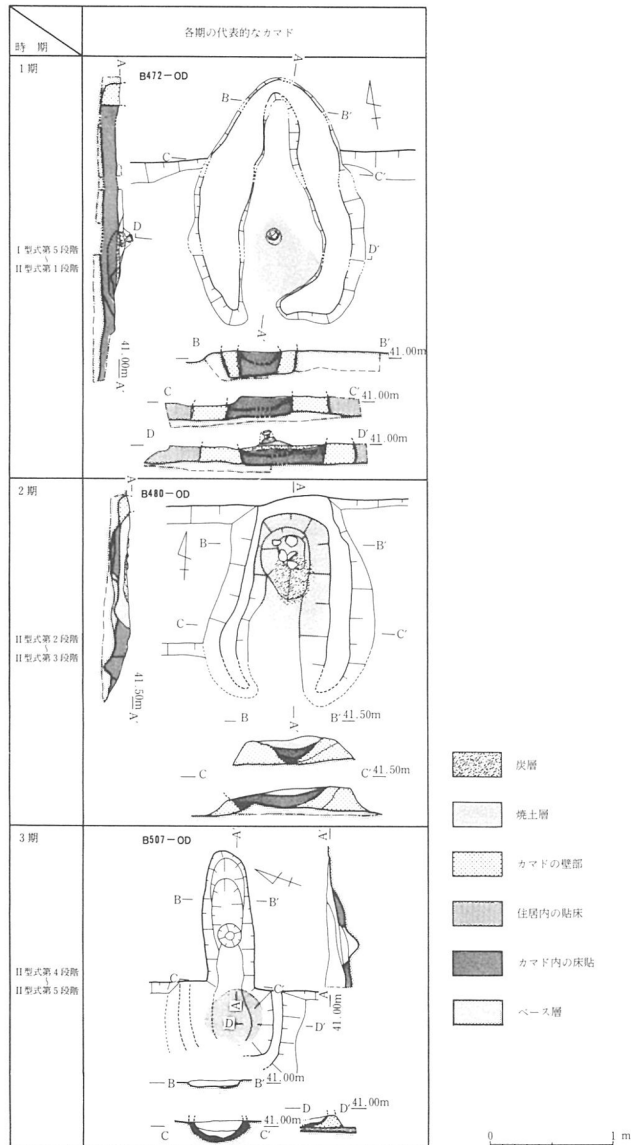
分類 時期	カマドの構造が竪穴住居壁内で止まるもの	カマドの構造が竪穴住居壁外に出るもの
1期 I型式第5段階 II型式第1段階	 <p>B474-OD</p> <p>B800-OD</p> <p>B801-OD</p>	 <p>B473-OD</p> <p>B478-OD</p> <p>B802-OD</p> <p>B472-OD</p>
2期 II型式第2段階 II型式第3段階	 <p>B480-OD</p> <p>B798-OD</p> <p>B479-OD</p>	
3期 II型式第4段階 II型式第5段階		 <p>B469-OD</p> <p>B507-OD</p>

第330図 カマドの構造による分類

時 期	A 類(固定支脚を伴うもの)		B 類(固定支脚を伴わぬもの)
	A1類(自然石使用の固定支脚)	A2類(有蓋高杯使用の固定支脚)	
1 期	<p>B478-OD B473-OD B474-OD</p>	<p>B800-OD B472-OD</p>	<p>B802-OD B801-OD</p>
2 期	<p>B479-OD</p>		<p>B480-OD B798-OD</p>
3 期		<p>0 1 m</p>	<p>B469-OD B507-OD</p>

第331図 カマドの支脚による分類

同様に、カマド底面への床貼りが認められた。また煙道部分についても床貼りが施されており、かなり丁寧な構造をもつ。また B507-OD では、煙道内に土坑が設けられており、煙突からの雨水等の流入を受けるための施設になる可能性が考えられる。



第332図 カマド構造の変遷 (1/60)

3 まとめ（第57・190図参照）

カマドの形状及び支脚の状態、構造等の視点から述べてきた。その結果については、従来言われてきた変遷と大きく異なるものではなかったが、その実体と画期をより具体的に把握することができた。

カマドの位置、構造を基準に竪穴住居の方向、規模、出土遺物等を加味して、各期の中でのグルーピングを試みたい。1期の場合は、A～Cまでの3グループに分けることができた。Aグループ（B473・474・478-OD）、Bグループ（B800・801-OD）、Cグループ（B406(a)・472-OD）である。しかしBグループの2棟については、近接した位置により時期差をもつと考えられる。Aグループ2棟（B473・474-OD）とBグループ1棟との共存が想定される。その場合にB478-ODがB475-ODと共にそれらより先行したと思われる。続いてCグループが出現するようであり、B406(b)-ODについてもこのグループに入るようである。B406(b)-ODとB471-ODについてはCグループの先行する姿ではなかろうか。

2期については、B479-ODとB798-ODのセットが先行し、その後でB480-ODが設けられるようである。B476-ODは2期の古いグループに属しB470-ODが新しい方になると判断される。

3期については、両者が位置的に同時存在したとは考えられない。このためカマドの構造及び出土遺物からB469-ODが古く、B507-ODが新しいと考えられる。

以上の結果から、本遺跡の竪穴住居については次に述べる変遷が想定される。

B844→ B475・478→ B473・474・800→ B406(b)・471・802→ B406(a)・472・801→ B476
・479・798→ B470・480→ B469→ B507。 (渡辺)

註1 「第2章万町北遺跡の調査（第2次調査）」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅳ』和泉丘陵内遺跡調査会 1985年。

土師遺跡『昭和60年度発掘調査報告会』堺市教育委員会 1986年

2 群馬県子持村教育委員会 石井克己氏の御教示。

第4項 古墳時代土器の器種構成とその比率

B地区から出土した古墳時代後期の土器については、2・3区の遺構と2区包含層に関して、器種ごとの破片数集計作業を実施している。ここでは5世紀末葉から6世紀末葉にかけて営まれた各竪穴住居と、特に大量の遺物が検出された溝(B482-OS)出土資料を中心に分析を試みた。破片数による集計であり、なおかつ若干時期の異なる資料も含まれているなど、データとしての誤差を含んでいる点を初めに断っておきたい。

時期と遺構の関係は以下のとおりである。

1期 (I型式第5段階～II型式第1段階)

B406・471・472・473・474・475・478・799～802-OD。

2期 (II型式第2～第3段階)

B476・480・481・479・798・469-OD。

3期 (II型式第4～第5段階)

B469・507-OD、B482-OS。

第333～335図に、各遺構ごとの土師器と須恵器の器種別破片数を棒グラフで示した。また第12表で各時期の形態別破片数をまとめている。各形態と器種の関係は次のように定めた。

貯蔵形態 土師器：壺。須恵器：壺、甕、提瓶。

煮沸形態 土師器：甕、甑。須恵器：甑。

供膳形態 土師器：高杯、椀、把手付椀。須恵器：高杯、杯身、杯蓋、器台、甕。

製塩土器 ほとんどは薄手丸底式の細片であったが、B480-OD出土資料(B157・158)に代表される、外面に荒い叩目を施し胎土が暗褐色を呈するものも含まれる。

1～3期の各形態ごとの特徴とその変化について述べてみたい。貯蔵形態の場合には、1期で土師器が3%を占めるのに対し、2期が0%、3期が1%の割合となり、新しい時期ほど土師器の占める割合が減少する。煮沸形態では、1期で須恵器が0.2%を占めるのみで、他の時期は全て土師器で占められていた。供膳形態で土師器が占める割合は、1期が1%、2期0%、3期3%となり、若干ながら増加傾向を示す。製塩土器は、言うまでもなく全て土師質であるが、点数の面では1期が最も多く、2期以降減少している。

三田遺跡B地区の場合は、煮沸形態においては、ほとんどが土師器で占められるのに対して、それ以外の形態は須恵器の占める割合が極めて高いことになる。その中において、

5世紀末葉（1期）と6世紀後葉から7世紀初頭（3期）を比較した場合に、貯蔵形態で土師器が減少し、供膳形態では逆に増加する傾向を示していた。

各期ごとの土師器と須恵器の破片数を、第13表に提示した。土器の全破片数に占める須恵器の割合は、1期が53%、2期が66%、3期が69%となり、6世紀後葉段階では土器の約7割が須恵器という状態を示している。

このような状況は、大園遺跡で指摘された結果及び石津川流域の遺跡群^(註1)でのあり方とほぼ同様であった。大園遺跡においては、6世紀後半段階で土器の総個体数に占める須恵器の割合が82%である。10%近い違いについては、本遺跡のデータが破片数であり、その誤差によると考えられる。

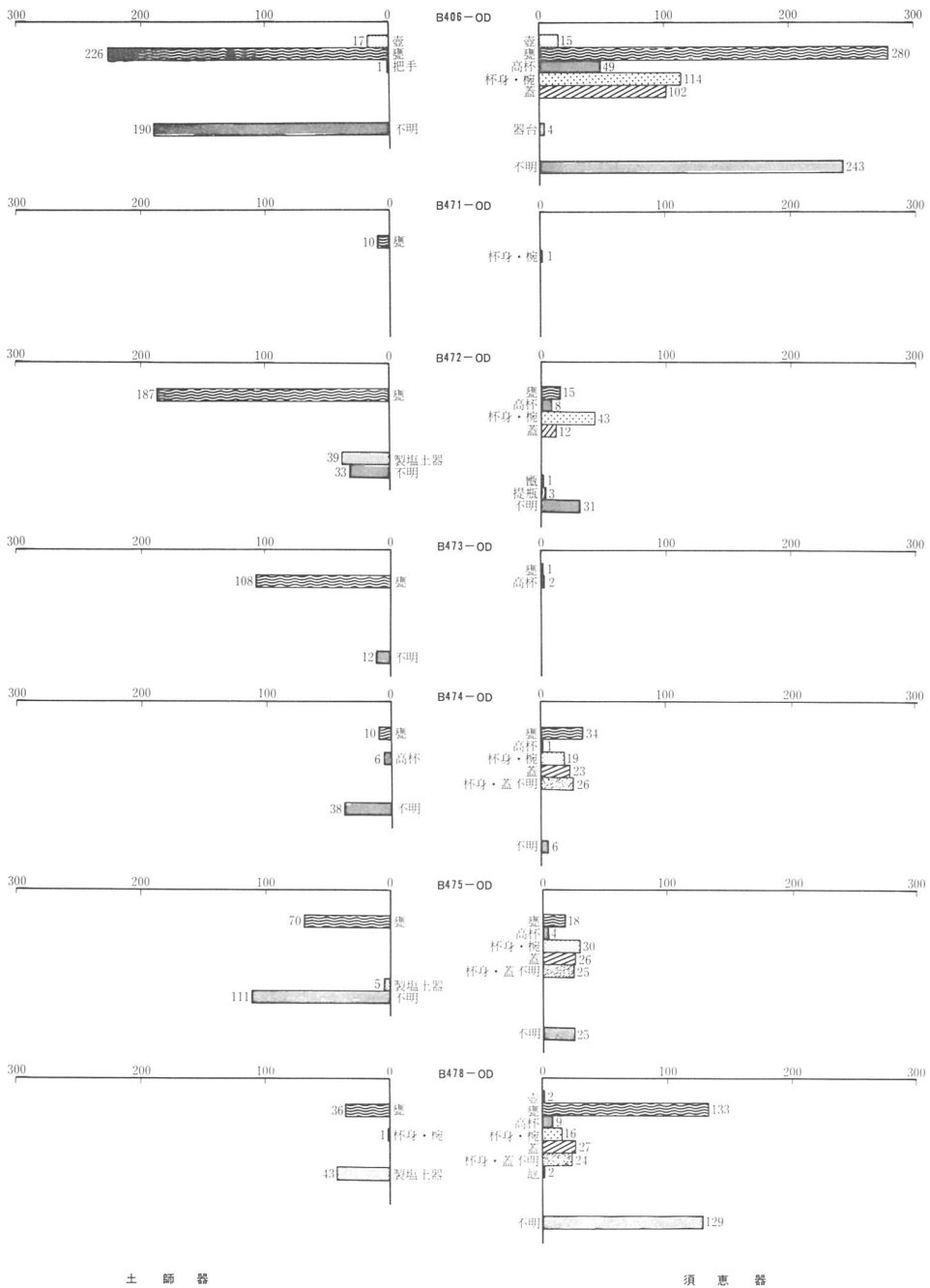
三田遺跡B地区での土師器と須恵器の各期における比率と、器種、形態ごとの割合は、少なくとも和泉地域北部の状況と一致していた。本遺跡は「陶邑古窯址群」南端部（6世紀後半を主たる操業期とする和泉市谷山池、梨本池周辺窯跡群）から直線距離で約3kmほどに位置している。この状況は、大園遺跡に代表される和泉北部の海岸平野（低位段丘面）に立地する遺跡群や、石津川流域の遺跡群と類似していた。すなわち「陶邑古窯址群」縁辺部に位置する古墳時代後期集落での、須恵器流通の状況がほぼ均質であったことを物語っている。

また竪穴住居の場合、埋土中に含まれる土器の量に若干の差異が認められた。このことは、竪穴住居廃絶後の埋没状況並びに遺物の廃棄状況による影響が考えられるが、それに加えてその住居が有していた性格をも反映している可能性が考えられる。出土量が多いものとしては、1期のB406・478-OD、2期のB476・480-ODをあげることができる。逆に3期の竪穴住居においては、遺物が少なかった。1期の場合両者とも重複した切合い関係を示しており、それが一つの理由になると思われる。2期の場合には1期と異なり、他の竪穴住居に比べて卓越していた。B476-ODとB480-ODを比較した場合に、前者は須恵器の供膳形態が多く、後者はそれに加えて、須恵器の貯蔵形態（甕）と土師器の煮沸形態（甕）を多く含んでいる。竪穴住居の規模と、須恵器の甕を多く所有している点から判断して、B480-ODが2期における中心的な竪穴住居であったと判断される。（渡辺）^(註3)

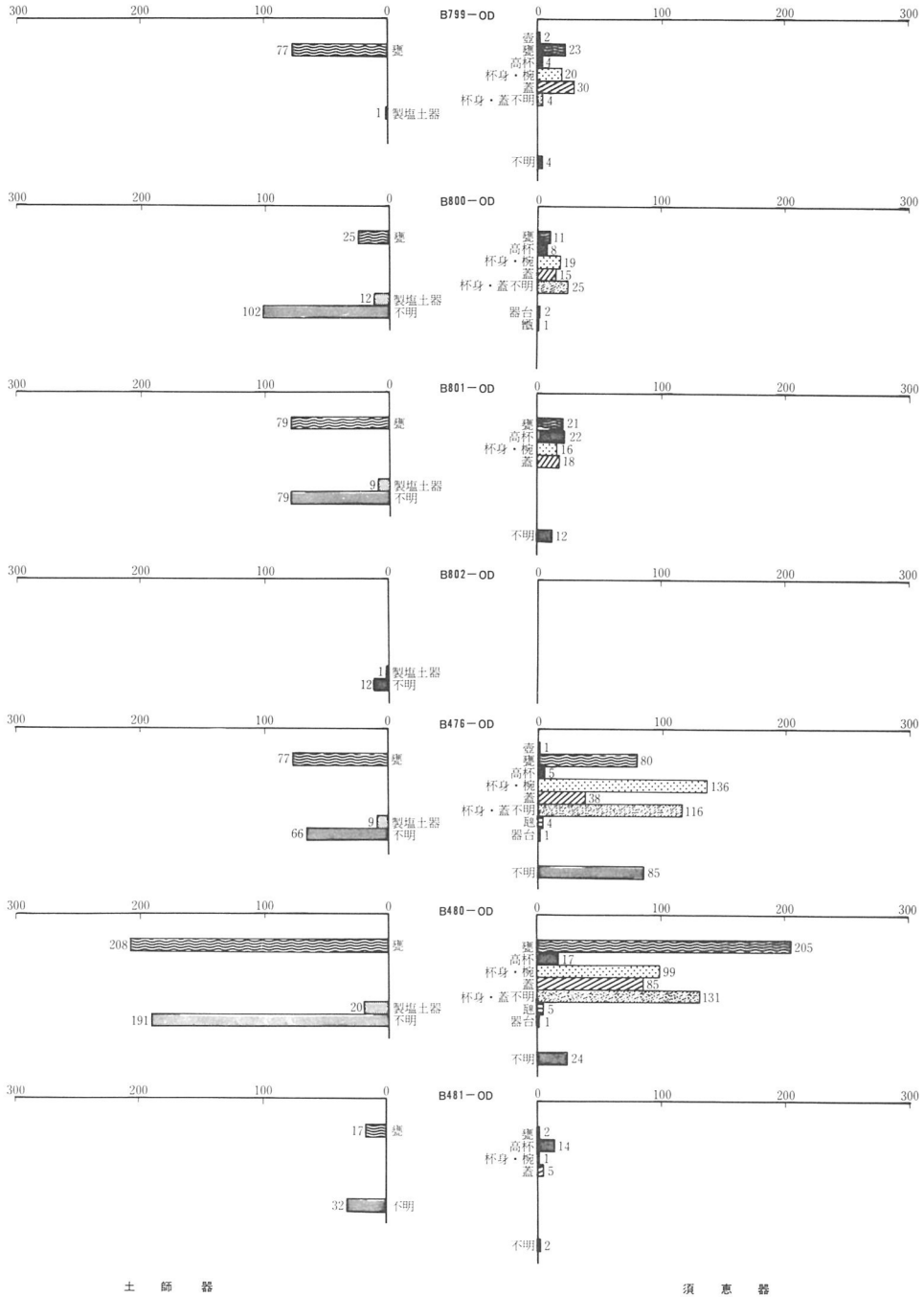
註1 広瀬和雄「6世紀後半における集落出土土器の二、三の分析」『大園遺跡発掘調査概要VI』大阪府教育委員会 1981年

2 石神怡「第VII章まとめ-周辺遺跡との関連において」『府道松原和泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』(財)大阪文化財センター 1984年

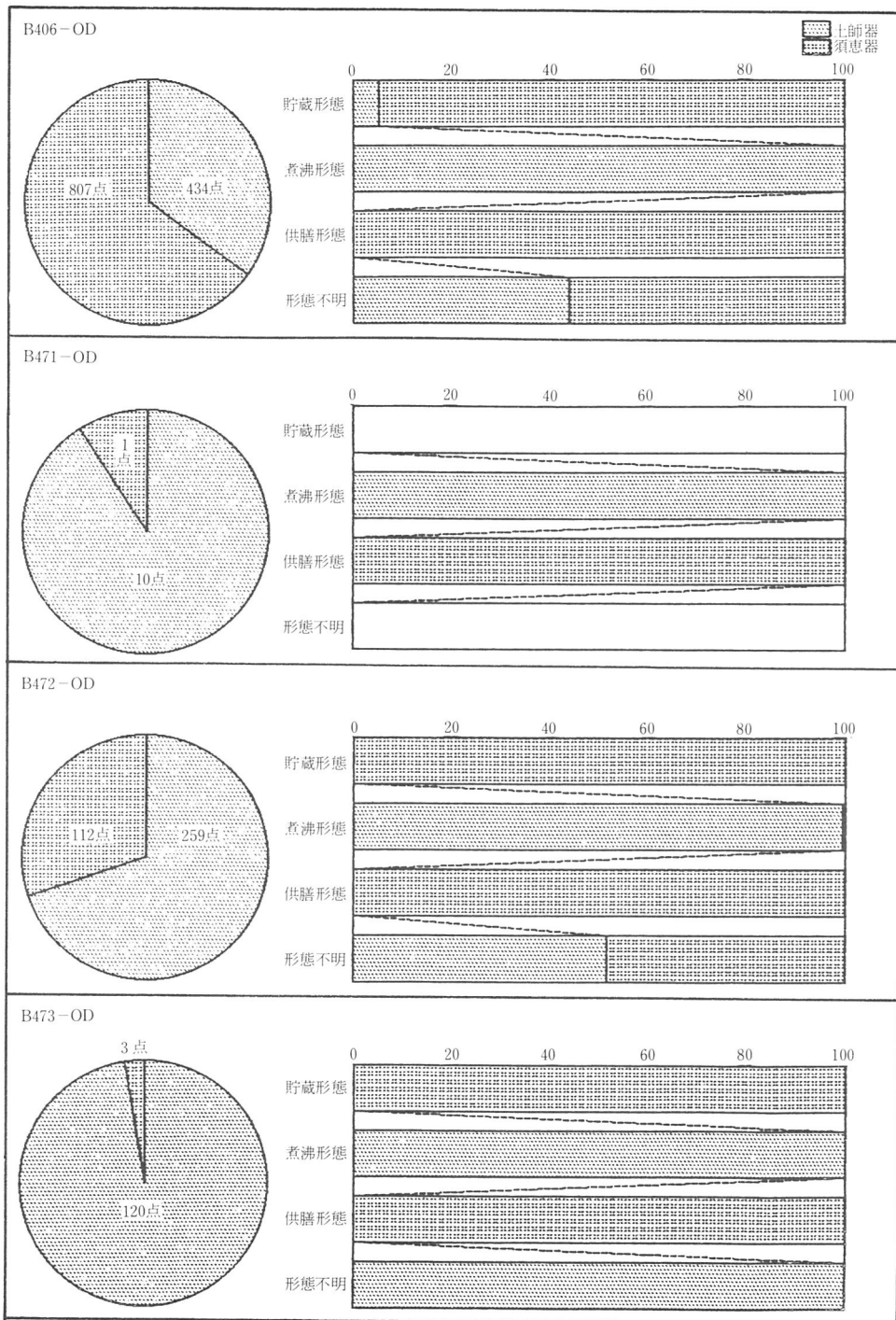
3 註2参照。



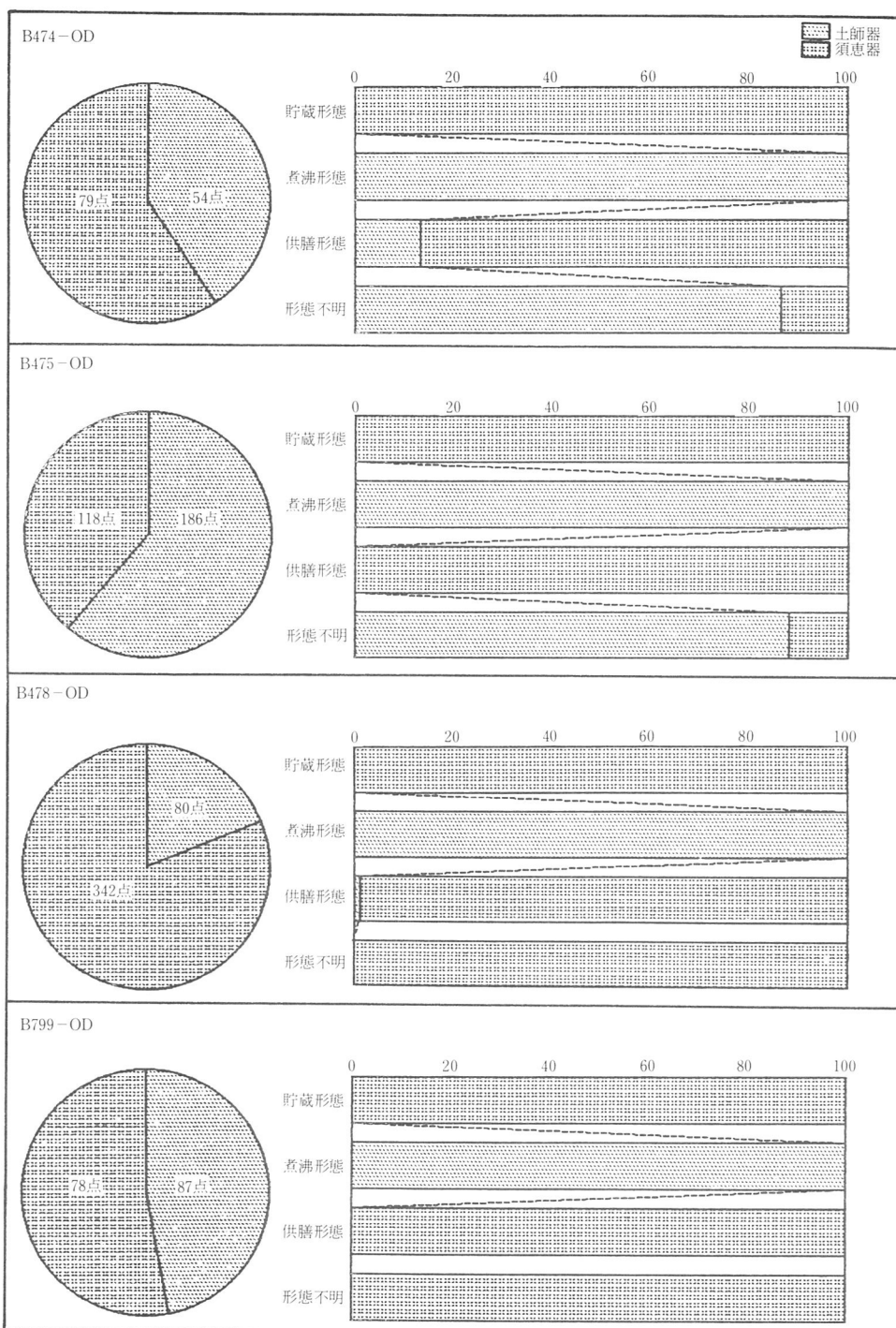
第333図 各遺構の器種別破片数グラフ(1)



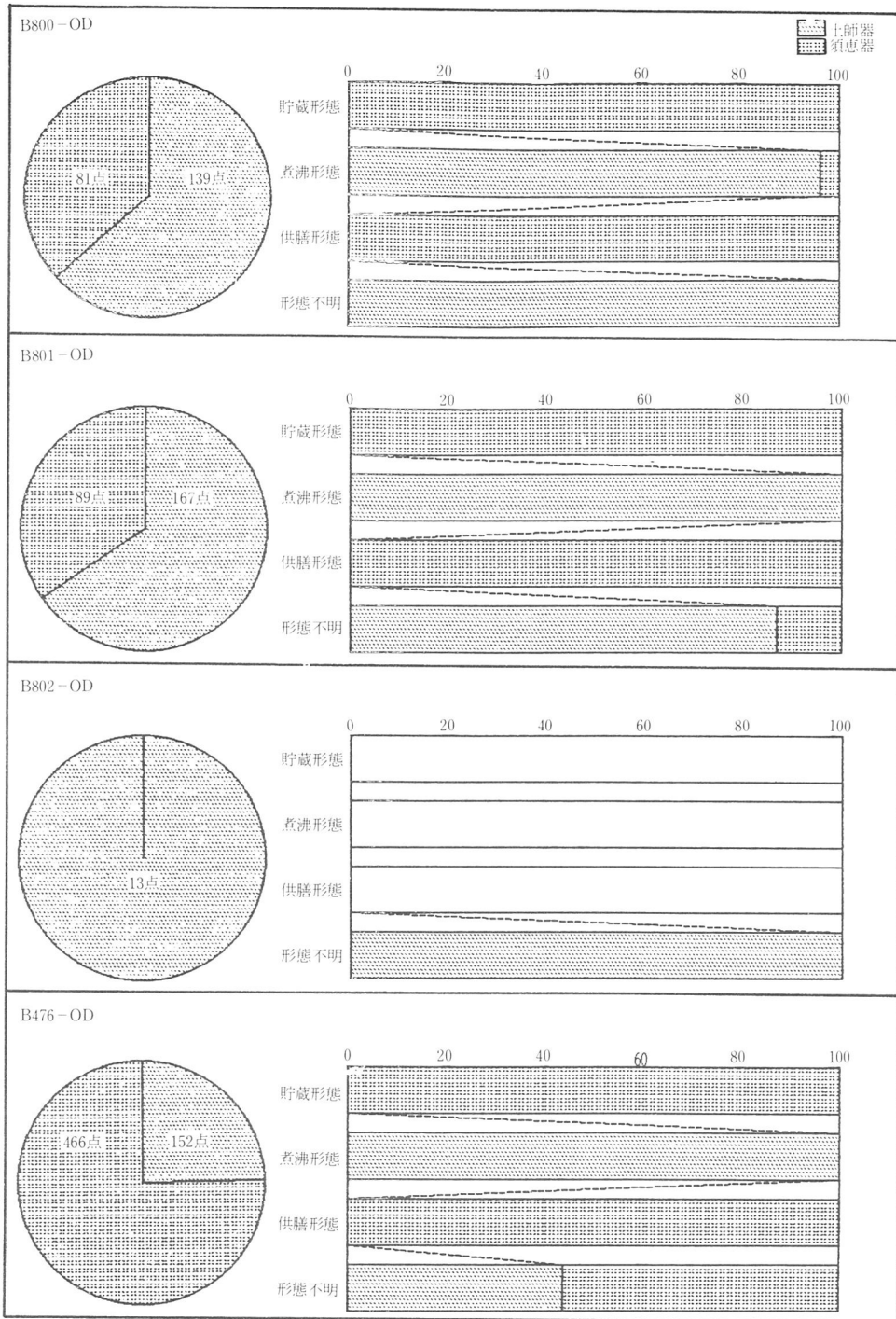
第334図 各遺構の器種別破片数グラフ(2)



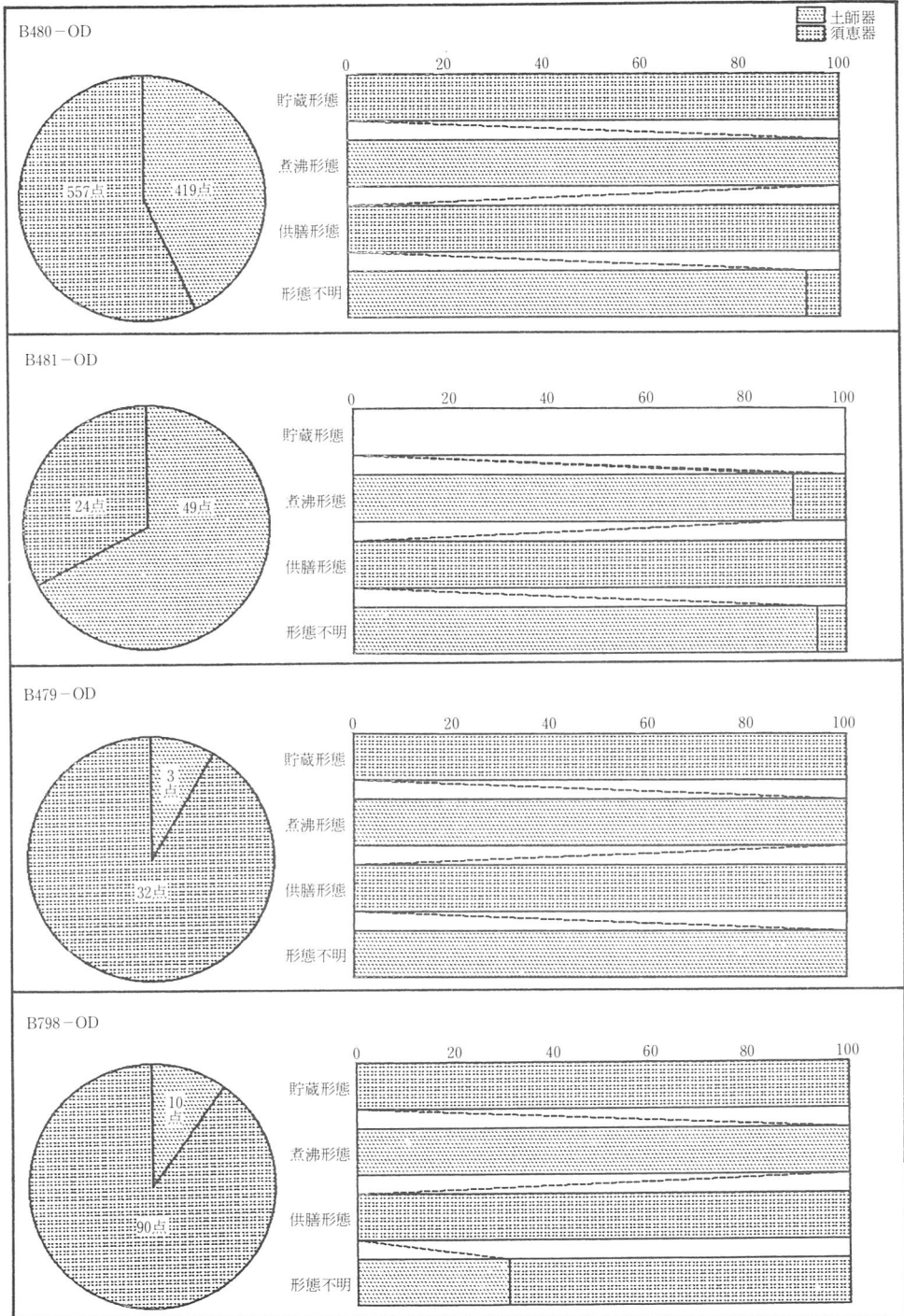
第336図 各遺構の土師器・須恵器比率グラフ(1)



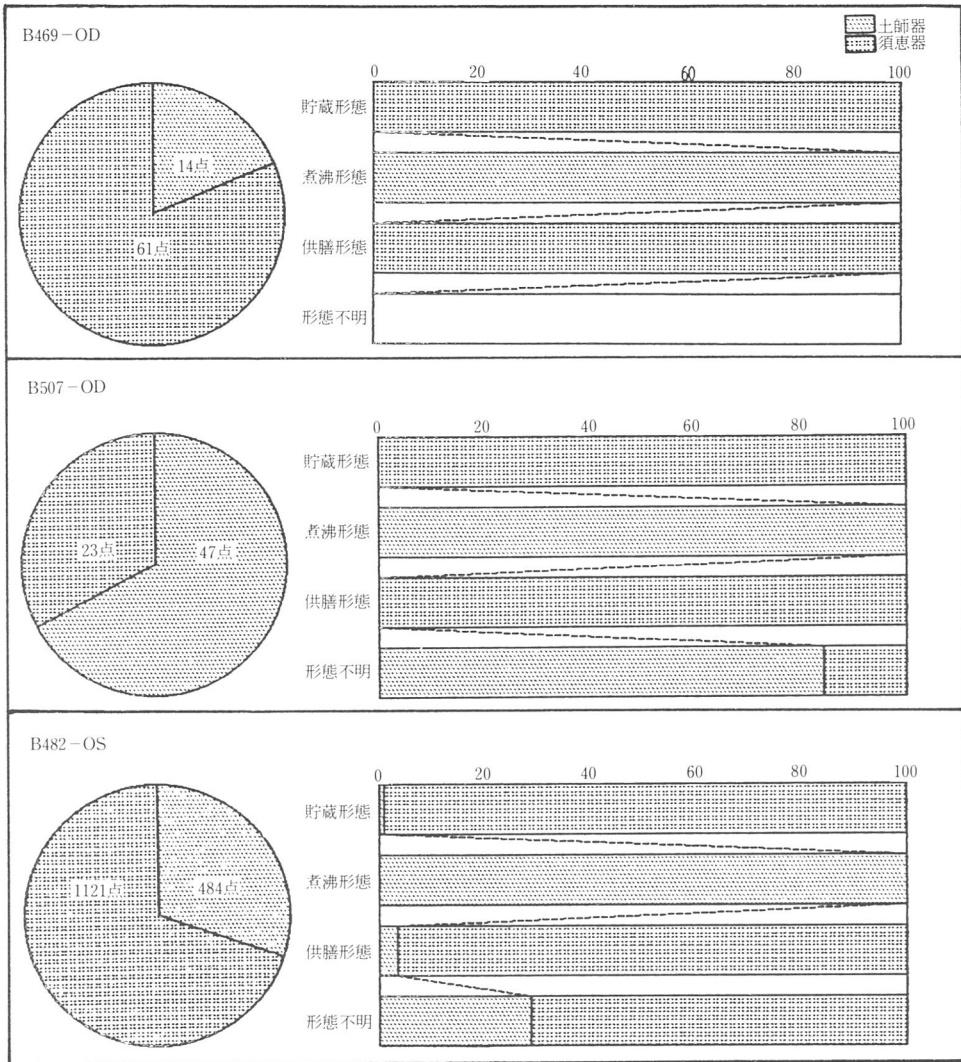
第337図 各遺構の土師器・須恵器比率グラフ(2)



第338図 各遺構の土師器・須恵器比率グラフ(3)



第339図 各遺構の土師器・須恵器比率グラフ(4)



第340図 各遺構の土師器・須恵器比率グラフ(5)

第13表 各時期の土師器と須恵器破片数

種 類		土 師 器	須 恵 器
1 期	I 型式第 5 段階	1 5 4 0 点	1 7 6 0 点
	Ⅱ 型式第 1 段階		
2 期	Ⅱ 型式第 2 段階	6 3 8 点	1 2 1 7 点
	Ⅱ 型式第 3 段階		
3 期	Ⅱ 型式第 4 段階	5 4 5 点	1 2 0 5 点
	Ⅱ 型式第 5 段階		

第5項 須恵器「ヘラ記号」について（第341図、図版71）

本遺跡のB地区から出土した須恵器類の中には、「ヘラ記号」が施されているものが17個体ほど確認された。時期的にはI型式第5段階からII型式第5段階までと、ほぼ各時期に亘っている。出土地点も、竪穴住居、溝、土坑の埋土並びに2区の包含層（第4d層）からであった。

本遺跡出土資料の場合には、「ヘラ記号」の形状から7類に大別することができる。各類の特徴と出土地点及び器種、施紋箇所、時期等については、以下のとおりである。

I類：「×」状に2本の沈線が交錯するもの。B342（B482-OS、杯蓋天井部外面、II型式第5段階）、B123（B476-OD、杯身底部外面、II型式第2段階）、B173（B469-OD、杯身底部外面、II型式第5段階）。

II類：「-」状に1本の沈線を施すもの。B336（B482-OS、杯身底部外面、II型式第5段階）B343（B482-OS、杯蓋天井部外面、II型式第5段階）、B112（B476-OD、杯蓋天井部外面、時期不明）、B146（B480-OD、杯蓋天井部外面、時期不明）、B73（B800-OD、杯身底部外面、I型式第5段階～II型式第1段階）、B77（B800-OD、有蓋高杯脚部外面、I型式第5段階）。

III類：「八」状の形状を呈するもの。B90（B799-OD、杯身底部外面、I型式第5段階）、B169（B798-OD、甕底部外面、時期不明）。

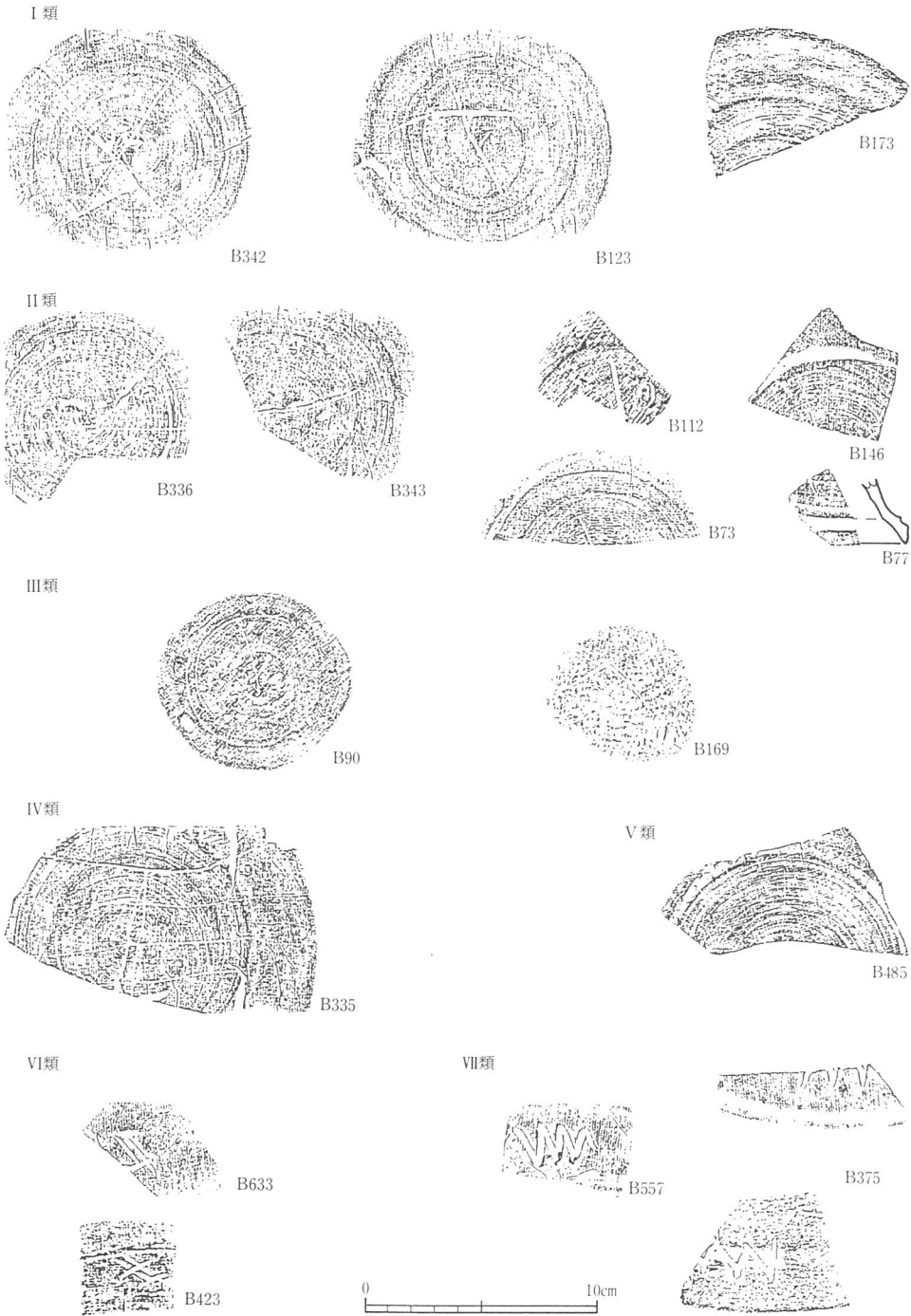
IV類：「冊」状に複数の並行線に、直線1本を直交させるもの。B335（B482-OS、杯身底部外面、II型式第5段階）。（時期は異なるがMT200-I号窯に類例が確認される。『陶邑V』大阪府教育委員会 1982年）

V類：中心から放射線状に沈線を多数施すもの。B485（B839-OO、杯蓋天井部外面、時期不明）。

VI類：「#」状に4本の沈線を施すもの。B633（2区第4d層、甕体部上端外面、II型式第5段階）、B423（B94-OO、甕口縁部外面、II型式第5段階）。

VII類：鋸歯状の連続する沈線を施すもの。B557（2区第4層、甕口縁部外面、I型式第5段階）、B375（B158-OO、器台脚部内外面、I型式第5段階）。

II類が最も多い。またVI・VII類については、極めて特徴的な「ヘラ記号」であり、将来窯の同定が可能になると思われる。時期的にはII型式第5段階に属するものが7点認められ、その内4点はB482-OSからの出土であった。B地区では、この時期「ヘラ記号」を



第341図 へラ記号分類図

施した土器が増加を示す。須恵器流通の実体と生産地（窯）との関係を解明するためにも、今後各消費地（集落）におけるあり方を、より具体的に把握する必要がある。（渡辺）

第2節 三田遺跡の変遷（付図4参照）

第1項 先土器時代～縄紋時代

本遺跡北側のC地区において、古墳時代のベース層である黄褐色シルト層よりサヌカイト剥片が出土している。それ以外の石器、剥片類は全てベース層直上ないしその上層の包含層や遺構埋土中から検出されている。

明確に先土器時代に属すると考えられる剥片類も確認されているが、多くの石器、剥片は縄紋時代草創期以降に属する。有茎尖頭器も第1次調査を含めて4本出土している。その他石鏃、石匙、不定形刃器、磨製石斧等が検出された。いずれも遺跡北半部に集中する傾向を示す。また、地形的にも微高地部分及び段丘面のわずかな傾斜変換部に顕著である。

A-3区においては、縄紋土器が1点出土している。後期前葉の北白川上層1式頃に相当する資料であった。近くに集落が存在する可能性を示唆している。（渡辺）

第2項 古墳時代前期

景観を復元すると、A-3区とC-3区に自然流路が走り、C-4・5区では溝の掘削と土壇墓を主体とする墓域の造営がなされている。従って、当該期の特徴として人為的遺構の性格が極めて限定されている点が指摘できる。土壇墓群は現状では総数165基を数え、小若江北式を前後する一定の時間幅内で形成されている。土壇墓群の北東約400mには開析谷を挟み摩塗山古墳が存在するが、時期的に併行することから土壇墓群の検出は大形前方後円墳周辺の土地利用の一端を示す資料になる。しかし、墓域に対応する集落は今回の調査では未検出で隣接する山直北・上フジ遺跡でも報じられておらず、今後その所在が問題になる。（小山田）

第3項 古墳時代後期

ここでは5世紀末葉から6世紀初頭の時期と6世紀前葉から7世紀初頭の時期に分けて述べてみたい。

古墳時代前期（布留式期）の後、若干の時間的空白を置いて、5世紀末段階になると遺跡の南端部に竪穴住居によって構成される集落が出現する。この集落占地は、地形的に安定していた微高地を好んだというだけでなく、現存の藤池から続く開析谷に面していたことによる理由が大きいと考えられる。本遺跡と南接する上フジ遺跡においても、ほぼ同

様な時期から集落が営まれる。1つの開析谷を挟んで2つの集落が確認された。このことは、開析谷が当時の生産域（耕作地）であった可能性を暗示している。牛滝川流域の段丘面にあつては、開析谷を利用した水田経営が5世紀末葉から開始されるようである。

その状態は、6世紀段階においても継続的に緩やかな発展を示すようである。その状況の中で、6世紀前葉以降にA地区で小古墳が造営される。2号墳と3号墳は方墳であるが、1号墳は前方後円墳の可能性をもつ。古墳時代前期の土壌群が墓壙であると考えられるところから見て、100年近い断絶をもちながらも古墳が出現した一帯に対して、墓域としての意識が残存していたとも考えられる。いずれにせよ、三田遺跡、上フジ遺跡さらに本遺跡に北接する山直北遺跡をも含めた地域の中での墓域と言えるのではなかろうか。東山丘陵の古墳群との関係が問題として残されている。

5世紀末から続いた集落の状況は、6世紀末葉から7世紀初頭にかけて新たな展開を示す。B地区に溝で区画された大形掘立柱建物が出現する。この時期は、前時期から継続する開析谷を利用した水田経営に何らかの変革が現れるのではなかろうか。まだ具体的な資料は得られていないが、灌漑技術の向上や段丘面での畠作の積極的な導入等が想定される。

(渡辺)

第4項 奈良時代～平安時代

当該期の遺構はC地区より検出されている。C地区には掘立柱建物を主とする遺構群があり、8世紀後半から11世紀前半まで続くが10世紀前半から11世紀前半を境に律令的村落から中世的村落への変貌をとげている。

C地区においてはまず、8世紀後半に正方位を原則とする土地区画と建物群が出現し10世紀前半まで続く。特に9世紀後半から10世紀前半にかけては数次にわたる建替がみられ、安定した集落経営がうかがえる。この時期のC地区の遺構群は古代村落としての一単位になることは明らかだが、一方では距離的に近接し同時代性を有する山直北遺跡や田治米廃寺とともに山直谷開口部においてひとつの遺跡群を形成する単位である点にも留意する必要がある。さらに日常雑器類を主体とする本遺跡に比較して、山直北遺跡は大形掘立柱建物の存在や緑釉陶器、漆器、硯、齋串などの遺物の有様からして官衙的性格が強く、また田治米廃寺は古代氏族との関連が説かれるなど、遺跡群構成において集落間格差があることも重視する必要がある。従って田治米廃寺と山直北遺跡を遺跡群の核とすると、当該期の本遺跡（C地区）は遺跡群においてその縁辺部に点在する従属的小村落のひとつに位置付けることが可能である。

次に10世紀前半以降先にみた律令的村落構成が崩れ始め、11世紀前半には屋敷地が出現することになる。屋敷地の所有者は律令的土地経営の解体より折出されなおかつ農業経営における個別経営単位としての有力農民層と考えられ、屋敷地の主軸と山直条里の方位が一致することから条里地割を伴う大規模土地開発に深く関与していたことは想像に難くない。

第5項 鎌倉時代

耕作に係わる遺構が遺跡のほぼ全域より検出されている。いわゆる鋤溝や区画溝および踏み込み痕で、現在に残る山直条里地割に方向の一致をみるものである。耕作遺構の全体的な分布をみるのは、C地区では12世紀末～13世紀でB地区では13世紀後半である。従って、11世紀前半に出現した屋敷地の所有者が主導的立場を果した可耕地の拡大が、13世紀に入り条里地割を伴う形である程度完成していたといえる。

第6項 江戸時代

調査区の全域より耕作関連遺構が検出されている。傾向として景観を改変する程の行為は見当らず、基本的には中世期に形成された景観を踏襲している。 (小山田)

第3節 調査成果と課題

第1次から数えると約3年間を要した調査であり、調査担当者も11人に及んでいる。各調査区での調査方法、及び時間的な制約には若干の差異は見られたものの、それぞれで多くの成果を得ることができた。幅約20mの範囲であったが、一遺跡を通して約800mにわたって調査することができた。

前節で述べたとおり、大きく6期の遺構が確認された。遺物の面では、さらに幅をもって各時期のものが出土している。この中で特に本遺跡を代表する時期としては、古墳時代後期と奈良時代から平安時代にかけての2つがあげられる。

前者の場合は、牛滝川流域における集落変遷の実体と、東山古墳群に対する小古墳の位置付け等が未解決である。

後者については、「山直郷」の中で本遺跡集落が占める歴史的な位置及びその性格を明らかにする作業が残されている。今後、調査の進展に伴って「牛滝谷」の開発史における画期と、その変貌の姿を明確にする必要がある。 (編者)

版 图



1 : 15,000 (1967年10月撮影)